

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール」日本招聘 訪日感想文



目 次

1. 「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

東華大学 日本語科 3 年 張哲琛 (団体戦1位)	2
東華大学 日本語科 3 年 李婧雄 (団体戦1位)	3
東華大学 日本語科 3 年 焦蘇揚 (団体戦 1 位)	5
安徽大学 日本語科 4 年 楊瑞雲 (団体戦 2 位)	5
安徽大学 日本語科 4 年 徐龍鳴 (団体戦 2 位)	6
安徽大学 日本語科4年 周娟 (団体戦2位)	7
北京郵電大学 日本語科3年 袁姝 (団体戦3位)	7
北京郵電大学 大学院生 1 年 唐菲 (団体戦 3 位)	10
北京郵電大学 日本語科 4 年 李鵬飛 (団体戦 3 位)	11
中国人民大学 大学院生 1 年 譚浩 (個人戦 1 位)	13
大連外国語大学大学院 1 年 汪逸晨 (個人戦 2 位)	17
南京大学大学院 2 年 劉雅君 (個人戦 2 位)	19
ハルピン工業大学大学院 1 年 孫琳 (個人戦 3 位)	20
南京師範大学 日本語科 4 年 呂篠 (個人戦 3 位)	21
貴州大学大学院 1 年 馮婉貞 (個人戦 3 位)	22
中国人民大学 外国語学院日本語科 準教授 錢昕怡	23

2. 「笹川杯作文コンクール」優勝者訪日団

燕山大学 文学新聞伝播学学部 4 年 楊超	25
中国海洋石油総公司 ニュースセンター 記者 付饒	26
寧波日報社 編集者 袁明淙	29
桂林天華智投信息諮詢工作室 総経理 鄭天華	30
中共南開区委党校 講師 劉曉秋	31
南京信息工程大学 日本語科 3 年 付昱	32
天津外国語大学 日本語科院生 李钰婧	33
哈爾濱工業大学 日本語科 4 年 季 佳琳	35
中国青年報社 国際部 記者 張蕾	35

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール」訪日団感想文

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

1. 「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

東華大学 日本語科3年 張 哲琛（原文中国語）



関西空港から上海への帰国便に乗っていると、脳裏を突然『ノルウェイの森』の一幕がよぎりました。小説の初め、主人公のワタナベは飛行機に乗っており、昔のことで暗然と意気消沈していたのです。それと似た情景にいる私は、8日間訪れたこの地への名残惜しさが胸が一杯でした。

日本の友人達

この8日間、さまざまな理由があったとは言え、他のメンバーほど積極的には参加していませんでした。それでもたくさんの善良で親切な日本の大学生と知り合えたのです。

それまでも何度か日本大学生と交流する機会 was ありましたが、これほど感慨深かったことはありません。特に東京で知り合った委員会の各位には何度お礼を言っても足りないでしょう。心を込めて用意してくれたプレゼント、旅程、プログラムには心の底から感動し敬意まで覚えました。大型イベントを企画したことがあれば、これだけの規模で実施する難しさがどれほどのものか分かります。それでも委員会の皆さんは疲れも苛立ちも全く見せませんでした。ずっと満面の笑みで接してくれたので、心から歓迎されているという感覚を味わえたのです。

討論会の当日、中国の反日勢力は本当に報道されているほど凶暴なのかいと、ある日本の友人に質問され、一瞬、言葉に詰まりました。こちらも同様に、一部の日本人は中国を敵視していて、日本を訪れる中国人を疫病神扱いすると聞き及んでいたからです。しかし今回の交流で確信できたことが一つあります。メディアは政治的な立場から報道するし、隣り合う両国は各自の利益に動かされるので、政治上で絶対的な平和に到達することはできないということです。しかし民間での交流は、こうした政府同士の公然なものをさておいて、最も純粹かつ友好的な態度で心と心を通わせることができます。暮らす国、育った環境が違うため、中日の若者には考え方にきっと違いがあることでしょう。そうした違いは怖くありません。怖いのは、そうした違いを無視して、自分が正しいと思うものを相手に押しつけ、無理に従わせようとすることです。そんな強迫的な態度だからこそ平和が乱れるのです。

また特にお伝えしておきたいのは、今回の交流に参加してくれた日本の大学生は、その多くが中国の文化に興味を持ってきていることです。おかげで話題は一気に豊かなものになりました。もう「中日の将来は君たちにかかっている」と言われてもむなしさを覚えることはありません。

日本の情景

大学二年になって突然、日本の流行文化に興味湧きました。日本語を習って以来、さらに日本へのあこがれが募っていたのです。今回は初めての日本でした。何度となく写真や映像で見てきた「幻」日本が、遂に本当の姿を見せてくれたのです。

まっすぐに清潔な道路、緑豊かな通り、ネオンきらめく繁華街、スーツ姿の通勤族……何もかもが魅力に溢れていました。

東京での最後の夜、同行していた親友と東京タワーまで散歩しました。夜の港区は適度に涼しく、東京タワーがビルの隙間から先端だけ見えていたので、その先端を目指して歩いたのです。時折ぬるい風がゆっくりと吹き抜け、思っていたことを自然に語り合えました。かなり大回りをしつつやっとなこと

で目的地へ辿り着いたのですが、かつて何度となく携帯電話の待ち受けにしていた東京タワーが目の前に現れたその瞬間、日本語を習い始めた最初の頃の衝動と勇気がよみがえったように感じました。夜に光を放つタワーは、心に何か抱き続けることを暗示しているかのようでした。揺らぐことなくしっかりとそびえ立ち、きらきらと。以前 2 度、交換留学の面接試験に落ちたことを思い出しました。そしてその後の惨めだった自分も。日本語の道を捨てようかとも思いましたが、考え直してみるとここ何年も日本語と日本文化を学んできただけでなく、他の何もかもなおざりになると気付いて余計に不安になっていました。しかし目の前のタワーは幾多の風雨に耐え、今や地上波の送信機能さえスカイツリーに取って代わられたというのに、静かにそこに立って輝き続けているのです。この紅白の交互になった巨人を眺めて、私は初心を見つけ出しました。

中国のチームメイト

私は今回の訪日団で最年少でした。たくさんの先輩を前に自己主張するのは大変でした。ですが、志を同じくする親友も見つかりました。大連外国語学院の汪逸晨さんが、私達の東華チームと「北方の四匹狼」ユニットを組んだのです。実は 4 人とも純然たる南方の人間なのですが、誤解を招くようなユニット名を付けたところがポイントでした。

8 日間を共にしたパートナーは忘れがたいものです。旅行中、私達は自分の身に起きたことを話し合いました。どうしてだか分かりませんが、初対面で意気投合し旧知のように付き合えたのです。

沖縄での 2 日目、首の具合が悪く丸一日話すことがありませんでした。夜ホテルに戻る前、パンダ（汪逸晨さんのニックネーム）が近くの商業施設まで付き添ってドラッグストアを探してくれました。商業施設の 1 階は食事客でいっぱいだったので、人波をかき分けながら、私は焦っていたので早足で歩き、パンダはその後ろに続いて狭い通り道を歩きました。明らかに独りでもできることでしたが、彼女がずっと付き添ってくれたことで、心がとても温まりました。

わずか 8 日間の旅行で純真な友情の収穫があり、とても感激しています。

大事な思い出を言葉に表すのは難しいものです。日本科学協会の顧先生、宮内さん、吉田さんに最も誠実な謝意を捧げます。中日の青年に交流の基盤と機会を設けてくださった日本科学協会と、そのために努力してくださった皆様にも感謝いたします。

友情を大切に。中日は必ず平和になります。

東華大学 日本語科 3 年 李婧雄（原文中国語）



2013 年の 7 月末、無料で日本を旅行する機会に恵まれました。わずか 8 日間ではありましたが、この旅でそれまでなかった経験ができました。そもそも集まるはずのない皆さんと知り合っ。異国の空気を本当に感じることもできたのです。

スケジュール上、各都市での滞在時間はやや短かったのですが、その土地に漂う雰囲気は確実に感じ取れました。東京のにぎやかさ、沖縄ののどかさ、大阪の熱さ、京都の優雅さといった空気感がはっきりと独特だったことは忘れられません。

東京という国際化した大都市は、上海と同じ「車輪の上で動くような」速い生活リズムでした。ここでの滞在時間が最も長く、相対的にゆっくりできたおかげで、欧米先進国の都市とは違うその魅力のありかをよりよく知ることができました。通りは人波が揺れ動き、地下鉄路線は複雑で、昼夜止まることなく、しかし何もかも整然として乱れがなく、誰もがルールを守っていました。公共の場所であっても、他の人の空間を侵さないよう慎重に振る舞っているようでした。最も印象深いのは地下鉄の車内です。文庫本や小さく折った新聞を真剣に読んでいる人が多く、ほとんど誰も話をしていませんでした。知り

合い同士が話をする場合でも声を抑え、他の人に影響しないようにしていたようです。

東京の人はこうして物事を済ますので、東京全体の人情味がかなり薄くなったと言う人がよくいます。しかし私はそうは思いません。発達した都市が発展を続けるには、市民が理性的な態度と冷静な頭を保たないと、大きな財産を目の前にして方向を見失ってしまうのでしょうか。様々な枠組みを守るという状態の維持こそが最も基本的な保障だと思うのです。それに、彼らの人情味も実際に薄れてはいません。

東京で二泊目の夜、一人でスーパーに行こうとして地下鉄の駅を出たら道に迷ってしまい、都合の悪いことに目的地の地図も忘れてしまっていました。通行人に道を聞くほかなかったのですが、ちょうど通りかかった年配のご夫婦が親切に教えてくれて、最終的には直接スーパーまで連れて行ってくださいました。ひたすらお礼を言うしかできなかったのですが、ご夫婦は手を振るなり自転車で立ち去ってしまいました。東京の魅力は、きらめく明かりの下にまだゆっくりと流れている温情にあるのかもしれない。

次に訪れた沖縄は、東京と正反対の街だったと言えるでしょう。町並みは少し寂しく、たまに見る通行人も南国の日差しを楽しみながらのんびり歩いているようで、時間の流れまでゆっくりしているように感じました。「駆け足」の速さで沖縄を感じ取ったことが惜しまれます。しかしその美しい景色は深く脳裏に焼き付いています。広大な空、深い海、水平線の景色では二種類の青が一体に溶け合い、見れば見るほど吸い込まれるような明るく純潔な眺めでした。この純粋な環境で育った人も非常に温和で善良で、のんびりとして満ち足りている感じがしました。

28日の朝、より良く沖縄を体験するため、早起きしてホテルの近くを散歩してみました。静かで美しい景色を目にして、思わず携帯電話で写真を撮りだしてしまいました。途中で通りがかったおばさんに観光客かと聞かれ、少し言葉を交わすと、「沖縄を十分に楽しんで行ってね」と微笑んで彼女は去って行きました。驕らず焦らず、自分の暮らしを楽しむと同時に、相手が住民かどうかに関わらず、こうした態度でもっと多くの人に接するようになりたいと思いました。沖縄の人を尊敬するのは、彼らが海のような性格の持ち主だからです。

その後の大阪と京都は、時間制限のため、あまり接触することができなかったのですが、一点だけ強く感じたのは、同じ関西地区にあってこれほど近いにもかかわらず、両地がまるで違った雰囲気だったことです。大阪は市井のにぎやかさだと言うなら、京都は貴族の優雅さです。両者の動静が際立っていたことで、今回の旅がより多彩なものになったのだと言えます。

日本各地の風情より忘れがたいのは、この8日間、訪日団と共に過ごした時間と、深い友情をはぐくめたことです。

忘れられないのは、初めて触れた海がみんなと一緒にだったことです。朝の明るいうちから日の入りまで、静かな砂浜の貴重な景色を鑑賞する一方で、存分に青春を謳歌しました。生まれて初めてのドラゴンボートレースでは、海のすぐそばで、力の限りを尽くして舟をこぎ、かけ声に合わせ、勝ち負けを気にかけず、前進することだけ考えていました。

ホテルの4人部屋で、買ったばかりの桃1つを分け合ったことも忘れられません。一口ごとに幸せな顔になり、感想も直接的な「足りない」から「死ぬほど美味しい」まで変わりました。桃が卒倒するほど甘かったのか、4人で盛り上がる楽しさが言葉にできなかったからなのかは分かりません。

もっと忘れられないのは、日本の大学生達との交流で友情の火花が散ったことです。国籍こそ違っても、みんな何かしら共通点を見つけることができ、国境を忘れて楽しく語り合うことができました。たまに相違があっても、かえって絶え間ない交流する中でそうした違いを正視すれば、双方に対する理解が深められるのかもしれない。

最後に、日本科学協会の心のこもった手配と、交流を持ってくれたすべての個人や団体の協力に心から感謝を申し上げます。皆さんがいなければ今回の訪日イベントは成立せず、この8日間にこれほど深く日本の風土と人情を感じ取ることもできなかつたらうと思います。

短い日本の旅で学んだことはたくさんあります。自分を豊かにするには、自ら足を踏み出し、より多

くの人と交流する勇気が必要だと分かりました。もう国の陰に潜む井の中の蛙にはならないつもりです。

東華大学 日本語科3年 焦蘇揚 (原文日本語)



八日間の訪日からいっぱい収穫しました。日本財団と日本科学協会のみなさんに感謝いたします。

今回は東京、沖縄、大阪そして京都に行きました。この四箇所は一度観光者として行きましたが、団体の見学で行くのは感覚がずいぶん違います。今回の訪日は人と人の交流を重視したからこそ、新しい日本を見せました。

東京では、優秀な大学生に付き添われて、この発展した都市をもう一度認識しました。そのあと、沖縄ではこの町の重い過去と今の現状を知りました。最後は関西に行きました。大阪の繁華さと京都の落ち着いた佇まいはまた、別の風情でした。

この八日間、日本の大学生の風貌が一番印象に残りました。彼らは私たちを受け入れるために、5月から既に準備していました。東京での二日間は彼らの企画のおかげで、充実していました。陽気で、優れている学生との交流を通して、勉強させました。自分も更に頑張らなければなりません。

沖縄のビーチで美しい風景を堪能し、バーベキューし、ハーリー大会も参加しました。

夏らしいことをいっぱいしました。私は男性の浴衣も試着しました。とても面白かったです。美味しい当地の果物も食べて、いい思い出になりました。沖縄はただ風景が綺麗なところではない。首里城を見学し、その歴史を知ること大切です。沖縄の人々と交流して、彼らは心から太平な世を望んでいることを感じました。

大阪に着いた瞬間、工業化の進んだ町という感覚に直面しました。それに対して、京都は大阪を見守っている賢者のように、傍に立っているような感じでした。古都の佇まいに惚れました。最後の一夜は小雨が降りました。これは帰らせたくないためか、それとも私たちの帰りたくない気持ちを受けたのでしょうか。

短い時間でしたが、記憶に残ることがたくさんでした。今回の訪日を通して、中日交流のことも新たな認識をしました。今回の訪日は遊びだけで終わらせない。いい経験として、自分に成長させたいです。

安徽大学 日本語学部4年 楊瑞雲 (原文日本語)



今回は日本に行き、全部ではないですが、日本のいろんな面を見てきました。一番印象深いのは東京の高いビルではなく、大阪の賑やかな繁華街ではなく、沖縄の青空でもなく、日本の大学生の熱意と努力です。

今回の訪日旅行で最初に行く場所が東京だと聞いた時、正直に言えば少しがっかりしました。私は東京に行ったことありますし、真夏に東京を回るなんてどこが面白いんだと思ってきましたが、今回はいろいろと楽しめました。それは東京が涼しかったというわけではなく、東京の大学生に感動しました。松尾一志さんを始め、中国人学生招聘事業実行委員会のみなさんは訪日旅行の前からメールで私たちの意見を聞いたりして細かい計画を作成してくださったそうです。中国人の私から見ればややこしいなあと思われるほどの細かい計画です。しかし、その「ややこしい」計画を作った皆さんのおかげで、東京での時間は毎日充実して過ごせたのです。25日の夜、その日のイベントが終わって、みんな普通にホテルのロビーで解散した後、私は友達と東京タワーを見に出かけようとして、またロビーで実行委員の皆さんの姿を見かけました。26日の交流会や料理大会の準備をしていたみなさんの姿はなかなか私の頭に消えず、それに感動しました。26日のカラオケ大会の時も、司会者の津久井さんは上の

服を脱いで「中国」の書いたシャツをみんなに見せた時も、「雰囲気盛り上げるために、どれだけ工夫したんだろう」と思いました。その熱意と努力に答えるために、私は精一杯楽しんでいました。

それに、みなさんの努力ぶりに感動しただけではなくて、自分自身に対してひとつの質問が生まれてきました。もし逆の立場だと、相手に満足させるような計画を立てられるのか、また、その計画を実行できるのか少し疑います。私たち中国人の学生は良く「勉強熱心」と言われますが、勉強に時間を使いすぎ、行動力に欠けるとか、チームワークがうまくできないとか、このような問題も出てくるのではないかと思います。今回の訪日旅行がきっかけで相手とうまくコミュニケーションをするために、私達中国人の学生はこれからどうやって自分の能力を向上させるのにどのようなことをすればいいかというのも一つの課題だと思います。

安徽大学 日本語学部 4年 徐龍鳴（原文中国語）



2013年7月24日、笹川杯日本知識大会と作文コンクール受賞者の訪日イベントが行われました。まずは今回の旅程をご紹介します。7月24日に東京に到着して2泊、27日に沖縄、29日に大阪、30日に京都を訪れ、31日に関西国際空港から帰国しました。

日本財団、日本科学協会、中国人民大学の催した今回の知識大会にはとても感謝しています。幸い大会で入賞し、貴重な訪日のチャンスを得ることができました。日本科学協会の顧先生、宮内さん、吉田さんが道中の配慮をしてくださったこと、また中国学生招待プロジェクト実施委員会のボランティア各位と沖縄のボランティア各位にも感謝しています。皆さんとの忘れがたい一瞬一瞬はずっと心に残っています。

今回の日本旅行では、日本文化を知ると同時に、日本の大学生の親切さと誠意を肌で感じることができました。東京での日程では、中国学生招待プロジェクト実施委員会のボランティア各位が一連のイベントを組んでくれました。心を込めたイベント準備をしてくれたおかげで、このイベントがより有意義なものになったと思います。この旅のメインは体験でしたが、日本文化の体験よりも、日本の学生の皆さんとの交流のほうが深く印象に残っています。中日両国はかねてから深い歴史的つながりと幅広い共通の利害を持っており、みんなが友好的な態度で共に発展することを期待しています。実は最初、内心では少し心配でした。前にネットや新聞で、日本の中国に対する友好的でない態度や観点についてたくさん見ていたからです。しかし数日間のふれあいで心配は完全に解消されました。今回のイベントで出会った日本の皆さんは友好的な交流のため来てくれた人ばかりなので、言葉の違いが壁になったとは言え、付き合ってみるととても親切で楽しいと感じました。

今回の日本旅行は7泊8日で日程がぎっしりでしたが、多くのものが得られたと思います。

一つは、外国語の重要性を強く認識したことです。言葉は人と人を結ぶ架け橋なので、言葉が通じないと交流しようにも障害が生じ、誤解も避けられなくなります。ですが、幸い数人のボランティアが中国語をある程度学習していたので、日本語での交流がぎこちなくても、彼らが喜んで中国語で接してくれました。もう一つはチーム意識です。特に沖縄で参加したドラゴンボートレースでは、トーナメント戦でなかったものの、日中の選手がともに汗を流し、一つのチームとして前へと進んでいきました。中日両国もドラゴンボートのように道を切り開いて、歌声も高らかに猛進していけたらと心から望んでいます。

今回の旅行に参加してたくさんの友人と知り合えたこと、お互いに率直で誠意がある交流ができ、学び合えたこと、同い年の外国の友人達の違う生活を知ったことを嬉しく思っています。今後もメールで交流を保ち、生活中的出来事や両国文化の理解について、やりとりを続けていきます。今回のイベント

は円満に終了しましたが、心残りもたくさんあるので、機会があればもっと長く日本に滞在して、もっと十分に日本文化を知り、中日交流を促進しようとも思っています。日本の皆さんに中国を理解してもらって、中日両国の友好の発展推進に力を尽くします。

安徽大学 日本語学部 4年 周娟 (原文日本語)



今回はとても光栄なことに日本科学協会に招聘されて、八日間の訪日活動に参加した。これは私が初めて日本に行って、初めて自分の目から今まで本とテレビだけで理解できる島国を観察する経験だった。

聞いた通りに日本は本当にきれいだ。青い空と透き通る海は心を落ち着かせ、溢れた緑は真夏の季節に涼しさを感じさせた。でも、私にとって、今回の訪日に一番深い感触は、美食でもなく、美景でもなく、日本人の熱情と素直だった。

尖閣列島事件以来、中日関係はもう谷底に落ちそうだ。それで、その後の様々な政治事件が重なって、中日は今一触即発の状態になったと思っていた。だから、日本に出発前に、日本人に冷眼と差別をされるかもしれないと心配した。でも、事実はこのような心配は余計なことだと証明した。私たちは日本に滞在期間に、ずっと日本人から熱心な招待と手伝いを受けた。東京に観光している期間、慶応義塾大学、早稲田大学などの大学の学生たちは、私たちの訪日のため、夏休みを放棄して、多い時間と精力をかけて観光スケジュールを設計した。また、ボランティアのガイドをして、東京の各名所に連れていってくれた。沖縄に観光している期間に、私たちは地元の中国を勉強している日本学生と交流して、一緒に潮風がそよそよ吹いているビーチでバーベキューをした。関西に観光している期間、私たちは道をあまり知らないのによく通行人に道を尋ねた。歩みを急ぐサラリーマンでも、のんびりと散歩しているお婆さんでも、ビルの守衛さんでも、コンビニのレジスターでも、聞いたら必ず辛抱強く詳しく説明してくれた。ある時さらに手で簡易な地図を描いてくれた。そういう時に、思わずに本心から「ありがとうございます」と言い出した。

沖縄に行った時に、二人の日本人の友達が私たちを連れて米軍基地前の、若者の町と言われる繁華街にドライブに行った。途中、私たちは色々喋った。驚いたことに、沖縄人の頭には、中日関係はそんなに悪くないと思われている。中国国内の大規模な反日活動とか、日系車を破壊した、なんか全然知らなかった。政局はどう動揺しても、日本国民の心は依然として素直だ。ある政治家の言動は平民の意志を代表できない。日本の平民たちは平和と中日友好を切望している。同時に、私たちもある誇張した記事に影響されて、全日本人を恨んで、勝手に頭の中に犬と猿のような日中関係を構想したことがあるかと反省しなければならない。

今回の訪日活動のおかげで、日本人民は中国人と中日関係についてどう考えているのか了解した。八日間は本当に短くて、全ての日本を見られない。でも、私がこの青い海に囲まれる国を愛していさえすれば、必ずまた来るチャンスがあると信じている。

北京郵電大学 日本語科 3年 袁姝 (原文中国語)

いつかはその地に辿り着く



このタイトルは唐代の詩人、張祜の『破陣樂』の最後の句「千里を行くを辞せずんば路は遠けれど、いつかはその地に辿り着く」から拝借しています。苦難が多く長い道のりを恐れなければ、いつかは思ったところにたどり着けるという意味です。日本への旅そのものは幸運の賜物で、しかもたくさんの風景に出会い、たくさんの親友に知り合えたので、

自然と心に決めました。道のりは長くても、もう一度きちんと会いたいと。

東京の町並みはどう表現しましょうか。きれいでよくできていて、道の両側に立つ建物はラインがくっきりとしていました。小さく切り取られてはいても空は青く、日本のドラマか映画の舞台に立ったように錯覚しました。目に入ったカフェもよくできていて、明るくオープンな中に落ち着きがあり、まるで自由な箱庭のようでした。人々の動きが慌ただしく地下鉄が忙しく込み合っている様子から、東京の圧力とリズムにはそう簡単にはついていけないと分かります。

しかしその一方、都心部にある新宿御苑は広く懐を開いており、色濃い緑が都市の文脈に溶け込んでいました。静かな園内を歩いていると、にぎやかな日本橋を思わせる一角に茶室があり、しばらくいると、沈黙の力がしみ込んでいました。墨のしぶきを感じるような勢いのある「滝」の字が飾られた床の間を前に、姿勢を正して古い茶道具を鑑賞し、互いに礼と微笑みを交わし、ほろ苦い抹茶の香りを味わいました。炎天下にありながら、湖南の地にいるような気分で、涼やかな風を感じました。

茶室の外では手が届くほど近くに、慌ただしく明滅するバーのサイン灯が。こうした溶け合う力というのが東京についての第一印象でした。

東京で二泊目の夜には、目頭を熱くするイベントがありました。イベント実行委員の皆さんがとても素晴らしく、初日の東京観光ツアーで皆さんと仲良くなれました。中には中国留学経験者や、共通の知り合いがいる人まで。まさに縁は異なるもの。その時の驚きと喜びは今でもありありと目に浮かびます。ずっと私達に気を遣ってくださっていた顧先生のお話によると、皆さんは準備に2か月以上もかけてくれたのだそうです。何から何まで完璧でした。そして多彩な友人達をイベントに引き込み、中国の学生と交流してくれたのでした。また、日中に付き添ってくれていたことは言うに及びませんが、夜に出歩いていて明け方近くホテルに戻ったところ、皆さんは1階のロビーでまだ打ち合わせや支出の突き合わせをしていました。

料理コンテストや流行歌の歌合戦など尽きることがないアトラクションの数々に、その気遣いの細やかさと創意工夫を感じ取ることができました。その夜に歓迎ビデオが放映されていたとき、『東京へようこそ』の歌が響くと、皆さんの礼儀正しい姿や笑顔を振りまく様子が映り、いろいろなぬくもりがスクリーンから伝わってきて、世界と抱き合っているような気分になりました。私達はこうしたあれこれに感動して「泣けるよ」（もう泣き出してしまいそう）になりながら、涙を堪え笑顔で最後まで参加していたのです。

連絡先を交換したので、その夜には写真と挨拶がメールで届いていました。ぎこちない日本語でお礼を書きながら、本当に貴重な友人達だから一生大事にしたいと思いました。

かつて「一期一会」という言葉を学んだ時すぐ気に入りましたが、まさにこの機会こそ、それを実感できる絶妙なものでした。再会できるかどうかは誰も知りませんが、今回の出会いで誰もが後悔のないよう力を尽くしていたのです。結果、授業で習ったこの言葉を、実感として復習できたのでした。

そうした気持ちを胸に、澄み切った沖縄の海と空を目にしました。東京のボランティア各位が精密に順序よく働いてくれたと言うならば、沖縄でのイベントは活発でのびのびしたものだったと言えます。知り合ったばかりの友人がメールで沖縄を紹介してくれたのですが、本州ほど名勝古跡はないけれど「それなりに楽しめます」（沖縄ならではの味わいがある）とのことでした。

午後の半日ビーチを裸足で駆け回り、舗装道路の熱さに大声を上げて、子供に返ったようにのびのびと遊びました。ドラゴンボートレースに参加したのは初めてで、みんなリズムが合わずばたばたしました。なかなか感覚が掴めず、レースの終盤にやっと息を合わせゴールに着いた時には他チームをうらやむほかありませんでした。初めて浴衣を着て、よろめきながら海辺をぶらつくと、目に入ったのは良い

景色ばかりでした。全てが芸術映画のワンシーンのような心ときめく美しさで、それでいて自然だったのです。

翌日に平和祈念資料館を見学しなかったら、私は沖縄を半分も理解しないまま賛美するばかりで終わっていたかもしれません。同館は1945年の沖縄戦で犠牲となった「ひめゆり学徒隊」を追想するための記念館で、とても多くのことを考えさせられとても心が痛みました。

館内で放映されていた記録映画がとても印象に残っています。完全に聞き取ることはできませんでしたが、戦争経験者の語りに触れると、一言一句に当時の血なまぐささや残酷さ、出口の見えない救いのなさを感じ取れました。彼女たちが身を寄せる横穴に米軍のガス爆弾が投下された惨状の様子や、先生の「ここで甘んじて死ぬのですか」という激励に言及されたときのショックはとても言葉では表せず、聞いていてただただ涙が出ました。

記録映画の最後では、館内200名あまりの犠牲となった女学生の遺影が一つ一つ映し出され、厳かな音響効果の中で数十年の流れが示されていて、見終わると自分で現場を見学したように感じました。

一枚一枚の写真に添えられた氏名や身分などの定型的な紹介文のほか、学友による「無口で堅実」といった犠牲者の説明が添えられているのが目に入りました。その時、何も知らずぼんやりとしていた私ははっとして気付かされたのです。一人一人の犠牲者はみんな年頃の女の子で、最もすばらしいはずの青春の中この世を去ったのだと。ひめゆり達は私達と何も違いません。戦争がすべてに残酷なラベルを刻みつけ、その年を最も暗い時代に決めつけたのです。

年配の館長が私達の間立って、心から「もう二度と戦争がないことを望んでいます」と声を掛けてくれました。多くの人が黙って涙を拭いているのが目に映りました。多分その瞬間に思っていたことは同じなのでしょう。無関係な立場から話を聞いたのではなく、友達のように気持ちを同じくしていたのだと思います。できる限り戦争を知ることから、できる限り戦争を防いでこそ、彼女たちの死が意義あるものになるのです。

それから複雑な気持ちと期待を胸に、私達は関西を訪れました。目的地は大阪と京都です。さまざまな歴史のあるこの地はもっと長い時間をかけて味わう価値があるので少し心残りでした。しかしわずか8日間です。この旅程のおかげで最短時間でうっすらとは味わうことができたのだと思います。心残りがあることは再会の動機ではありますが。旅行とその間の生活で、実にさまざまな側面を体験することができました。今後は機会を作れるよう努力して、もっと長い時間をかけて、もっと色々な視点から、もっと新しい体験をしたいと思います。

最後の歓送会では、みんなで乾杯して楽しく飲みました。日本科学協会の中村理事がわざわざ駆けつけ、一人一人と杯を合わせて、最後にほろ酔い顔で「中日友好万歳！」と高らかに一声。酔っ払った学生団員が中村理事と抱きつくように「われわれは兄弟だ！」と応じました。その瞬間は感動的なものではありませんでしたが、これほど深い人と人の絆を見たのは初めてです。

文中で書き切れなかった名残惜しさと再会への思いを詩に綴ってみます。

本当に、きっと、またお会いしましょう。

醉短歌・离京都

振衣散策醉邻家，鴨川桂月惜岁华。
数日谈笑酬知己，一纸诗怀寄烟霞。
满座攢杯身不老，离城再许会清嘉。
千里不辞行路远，时光早晚到天涯。

京都に酔いて

酔いに任せてほとぼり歩き 鴨川・桂に月日を惜しむ
言葉を笑顔を交わした友よ 霞に寄せてこの詩を贈ろう
若くあろうと杯を交わし 離れてもまた会う時は来よう
道のりは長く辛かろうとも いつしかその地に辿り着くまで

北京郵電大学 大学院1年生 唐菲（原文中国語）

初めての日本旅行



8日間の日本旅行はいつの間にか終わってしまい、思ったことを書き残そうとはしているのですが、まずは初めての日本旅行を記念して以下に書いてみようと思います。

今の気持ちを一言で表わすなら、感謝の二文字しか思いつくものはありません。日本科学協会の先生方、日本の大学生ボランティア、各地のガイドの皆さん、各地の平和を愛する皆さん、ドライバー、……感謝する人、事、物が本当に多すぎて、また感謝の2文字でまとめて

いいものかも分かりませんが。

わずか8日間でしたが、日本を代表する4地区である東京、沖縄、大阪、京都を回ることができました。各地から受けた印象は全く違うものでした。

繁華な東京。初めて見る東京では、人々が慌ただしく行き交い、まるでタイムレースのようでした。林立する建築物は言うまでもなく、車の往来が盛んな大通り、何もかもがぎっしりとした感じで、それでいてとても秩序がありました。この点はどこでも見受けられたので、日本の国民気質と無関係ではないのだらうと思います。ここで接触したたくさんの日本の大学生ボランティアは、ものごとの処理能力に優れ、人や物事に接する態度もよく、とても深く印象に残っています。感動しただけでなく、震撼しました。

静かな沖縄。沖縄は訪れた中で最も好きな場所です。本当に何か神秘的な力があるため、自然と感動して、心が温まる感覚が沸き返り、何とも言葉に出来ません。風景も人もそうでした。沖縄の海はエメラルドグリーン、空は紺碧で、人々は親切で平和を愛する人ばかり。ひめゆり平和祈念資料館の館長には更に心を動かされました。残酷な戦争の中で幸い生き残った人は誰もが、戦争に対して一般人より深い感銘を持っています。館長からその言葉を聞いたとき、感動の涙を抑えられませんでした。

にぎやかな大阪。スケジュールがぎっしりだったので、大阪を見学する時間はほとんどありませんでした。行ったのは心斎橋だけです。そこで感じたのはにぎやかさでした。色々な商売をする人たち、様々な買い物をする人たち。目にしたものは商業の街と売り買いをする人々でした。

歴史を伝える京都。東京から京都へ行くと、現代から古代にタイムスリップしたような気分です。高くそびえる建築物が見当たらず、大通りも比較的静かで、色も揃っているようでした。日本語を専門とする学生にとって、清水寺、金閣寺の名前こそおなじみですが、初めて目にしてやはりその精緻さに感動しました。

表面をざっと見ただけでも、その中から日本国民の優れたところをたくさん見つけることができました。初めての日本旅行で感じたことをここで書き尽くすことはできませんが、日本で受けた感動と震撼は本で見たものよりずっとたくさんあります。日本の秩序や日本人の礼儀正しさは、いずれも一朝一夕にできたものではありません。これは私達が努力して学ぶべきところです。

現在の中日関係はあまり樂觀できませんが、学生同士の交流や民間での活動を通じて、中日関係の未来はきっと晴れ渡るだらうと信じています。

近くから日本を観察して—日本滞在中のいくつかの細部



7月24日から8日間の訪日イベントに参加できたことは本当に幸運だったと思います。期間中は大いに心を動かされたことで、日本という国に対して、より入念な観察と確実な体験ができました。それまでは日本に関するすべてが本で見たものであり、自ら体験したことはなかったのです。

日本は中国から見て一衣帯水の隣国であり、古代からの切っても切れない関係があります。しかし大多数の中国人が日本海に持っている印象はお聞きの通りです。これまでは日本の実際の状況に対する証拠や自らの考察が不足していました。しかし本当の日本は驚きに満ちた国でした。自分の目で見て自分の耳で聞かないことにはよく分からないこともたくさんあることでしょう。

以下、訪日の期間中にあった忘れてたくないいくつかの出来事を書き並べて、私が見た日本について説明したいと思います。先にも書いたとおり、あくまで個人的な印象に過ぎません。正しいかどうか、漏れがないか、偏っていないかなどについては、皆さん自身で日本の観察に行ってから、討論しましょう。

1. 日本の路面

旅行前に同級生から聞いた話では、日本の路面は清潔で、地上に埃が見当たらないとのことでした。小さいときから山西省で生活してきた私には少し不思議なことです。中国では首都である北京でさえも、ごみのない路面を見られることはなかなかありません。埃もないとは、全く想像できないことでした。そこで私は日本の路面に挑戦してみようという気になったのです。

日本に着いた翌日、7月25日の早朝に一人で街に出てみました。道を歩いていてふと思いつき、しゃがみ込んで左手の人差し指で足元をこすってみたのです。指を確かめてみると、本当に埃が付いていませんでした。土埃さえも少なかったのも、しばらくショックでした。信じられなかったのもう一度やってみたのですが、やはり埃は付きません。ここは都市化が進みすぎて土の痕跡も覆い尽くされているのでは、というのが辺りを見回して探し出した答えでした。しかし気付いてみると、そこは70階以上もある高層ビルの建築現場の近くだったのです。自国の建築現場を思い起こすと、すぐに答えは見つかりました。

今度は愛宕神社の近くで適当な場所を探して試してみたのですが、やはり埃は付きませんでした。ごみも廃棄物らしきものもなかったのは言うまでもありません。

しかし清潔な場所ばかりでもありませんでした。大阪の心斎橋に行くと、なじみのある中国語が聞こえてきて、北京の路面のようでした。すぐにアットホームな気分になりました。そして更に日本人が中国語と英語で「路面をきれいに保ちましょう」と書かれた看板を掲げているのを見たとき、内心やるせないものを感じました。

2. 日本のサービス

道中ではすべて日本のサービスを味わいました。普通の沿道にある居酒屋、小飲食店、街角のコンビニから商業地区の百貨店に至るまで、サービスに対する態度と情熱を目にすることができました。

店舗の入り口に立つと、女性店員がそっと挨拶してくれます。いらっしやいませ、店内ご自由にご覧くださいと。ただ見ている時にわざわざ話しかけてくることはあまりありませんが、手伝って欲しいことがあると示すと、彼らはすぐに早足で現れるのです。中国では一般に相手にされることがないので、やや適応できない感じでした。何か買うと、大変な手伝いでもしたかのように、何度も礼を言われます。何も買わないときでも、白眼視されたり文句を言われたりすることはありません。

ヤマダ電機でデジタルカメラを買おうとした時のことです。もう気に入った商品を見つけ、支払いの寸前だったのですが、最終確認してみると、中国語機能がないことに気がきました。店員はすぐにこちら

の意図を察して商品を持ち帰り、中国語機能付きのカメラ探しを手伝ってくれたのです。7機種ぐらい見たのですがどれも気に入らずにいると、店員は恐縮そうに、申し訳ございません、お探しの条件に合ったカメラがなくてお手数おかけしました、と言うのです。却ってこちらが申し訳ない気持ちになりました。こんな一幕が中国国内で見られたと聞いたら絶対に信じられないと思います。

ここまで書いてきて、日本での8日間に接したサービススタッフの語気がほぼ一致していたことを思い出しました。話すときは笑顔で、積極的なトーン。日本語そのものの習慣に関わるものとは言え、これも日本国民の風貌や資質の表れだと信じています。

3. 日本の建築物と住居

実はこの点については責任が負えません。観察できたものがあまりに少なく、きっと全面的ではなかったのです。ですが、見たものと思ったことについて共有してみようと思います。以前に本で見かけたときは、日本建築はだいたい同じ様式で、中国の古代建築と似たようなものだと感じていました。しかし今回、清水寺、金閣寺と嵐山の沿道の寺院を観察してみて、私は日本建築にもそれぞれ独特な風格があると感じたのです。ふだん目にする建築の専門書がとても少ないせいだと思います。したがって、具体的な違いまでは説明できません。廊下の軒の曲がり方にしても建物全体の色にしても、そして建材に至るまで、中国のものとは異なる点がありました。もう少し具体的に言うと、日本様式はひなびて暗く、中国にあるような気迫に満ちた建物はあまり見られません。その建築の妙は精度の高い用地と計画にあります。すべての角で景色が考慮されており、しかも自然と一体になることができているのです。私の以前に行った南京瞻園のようでしたが、人工的な痕跡はもっと少なかったように思います。

もう一つの日本と中国との違いは、自然と都市との調和で、日本のほうがよくできていました。東京で泊まった旅館の近所に愛宕神社があったのですが、同社の両側は高層ビルでした。参拝道の両側も住宅がひしめき合っていました。同社は近代都市の中に問題なく溶け込んでおり、100メートル先には電車さえ走っていました。しかし愛宕神社は竜のように長い森に覆われており、静けさと神聖さが見えるのです。同じようにホテルの南側500メートル先には寺院もありましたが、名前は思い出せません。その寺院も商業モールとオフィスに挟まれていましたが、そこから受ける安らかさと静けさは久々のものでした。考えてみれば、繁華ににぎわう都市の中で自信の落ち着きを保てることこそ寺院の真の意味です。比べてみると、中国では都市と共存している寺院は珍しく、都市の中に存在すれば、人の往来が盛んにぎやかなことは避けられませんが、それでは禅の目的とあまり一致しないのではないのでしょうか。

もう一つ、今でもまだ分からない問題があります。日本の領土は30数万平方キロメートル、私の記憶では人口1.2億で、この人口密度は我が国の大部分の省を上回るものです。しかし高層住宅街があまり見られませんでした。今回の旅行では、中国にあるような大規模高層住宅地域がとても少なかったのです。8日間で目にしたのは、先祖から伝わる二階建ての持ち家ばかりで、マンションのようなものはあまりありませんでした。あれだけの外来人口がありながら日本人は何処に住んでいるのか本当に理解できません。全く観察できていなかった可能性もあり、この問題には未だに悩まされています。

ついでに言うと、日本の住宅街は東アジアの古い国の住宅を思わせる作りで、古代の精神と風格がその中に残されているような感じも受けました。ですが私達の住居を見ても中国の二文字を感じることはまずありません。

4. 日本のインフラ

日本でもう一つ印象深かったのは、その整ったインフラでした。まず、障害者向けの施設からもその一端をうかがうことができます。道路に視覚障害用ガイドが設けられているだけでなく、誘導音声までありました。私が入ったすべての公衆トイレにも身障者専用の個室が提供されていました。日本の地下鉄の発達ぶりは路線網の密度もかなり恐ろしいものですが、この辺りは皆さんご存じでしょうからこれ以上は書きません。町中にはレンタサイクルが置いてあるところもあり、最初の一時間は無料、一時間

経過後に時間料金を計算するというシステムでした。東京、沖縄、大阪、京都のどこにも自転車専用道が見られませんでした。たぶん総面積が不足しているせいでしょう。

注目に値するのが、日本の街角にはごみ箱が少なかったことです。今お話ししたとおりの清潔な街角に、なんとごみ箱がほとんどありませんでした。初めは不可解でしたが、よく考えてみると分かります。ごみ箱があったら、人々はごみをそちらに投げるので、街角の清潔さは維持しにくくなります。それに日本人全体の素養があるので、ごみをポイ捨てする人もいないため、ごみ箱を設けなくとも散らかすことなく、持ち帰ることになっているのでしょう。面倒だと思う時はどうしたらよいでしょうか。答えは簡単、外出時にごみを出さなければ済むのです。

5. 日本人々

これだけたくさんお話ししながら、日本人がいったいどういう感じだったのか正面から言及していませんでした。この数日間に見た人数も少なかったのですが、共通点をほんの少しまとめることはできます。ここで話すのは自分が目にした人だけなので、きっと日本人のうちごく一部だろうとは思いますが。したがってすべての人を表わすことはできないため、偏りのないようにお読みください。

一言でまとめると、日本は文明的な国です。文明の範疇はとても広いので、様々な面を含めることができます。ここでは真っ先に思いついたシーンだけ紹介します。まず、日本人は話し声がとても小さいです。話し相手にだけちょうど聞き取れるぐらいの声で話すため、他人の邪魔になることはありません。

次に、大多数の人がルールをきちんと守ります。東京で郵便物を出しにコンビニに寄った時、私達4人は待機場所の前でおしゃべりをしていたのですが（その時はそこが待機場所だと知らなかった）、その後ろは会計待ちの人で混み合っていました。しかし後ろにいた日本人のおじさん二人はずっとそこで待っていて、5分はゆうに経っていたと思いますが、私達がどけるまで待っていたのです。そのうち一人がすいませんと言いながら前に進んで会計を済ませたのですが、もう一人は待機場所でおとなしく待っており、前の人が終わってから、自分もまたすいませんと言いながらレジに進んで会計を済ませ、前の人と二人一緒にお店を出て行きました。二人ともずっと静かに自制しており、私は自分の至らなさを自問しました。

また、日本で信号無視をする人はあまりいませんでした。一度だけ目にしたのは夜中12時ホテルに戻る途中で、ある女性があたふたと急いで赤信号が変わる前に歩いて行った時。それ以外に赤信号が点いているとき渡る人は見かけませんでした。

一度にこれだけ思い出したので、他はとりあえず書かないでおきましょう。私が日本に行く前に持っていた『梁啓超自伝』には、彼が日本を学ぶ時に見せた情熱と希望が記されていました。機内で読んだ時にはまだよく理解できず、自分が日本語を学ぶ意義もよく分かっていませんでしたが、今なら答えを持っています。最後に日本を離れる時、脳内に考えが浮かんだのです。木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通の夢はもう実現しているようですが、梁啓超先生の夢はまだどこなのかも分かりません。

中国人民大学 大学院1年 譚浩（原文中国語）

訪日感想3篇

1. 東京物語



東京を訪れたのは4年ぶりです。たいした変化はありませんでしたが、寛容さと魅力は十分にありました。何につけ作りが細かく清潔で、にぎやかさと静けさが両立したこの町で、日中はスーツ姿で働く人々が、夜には浴衣で月光浴。秋葉原には若い人が集まり、銀座のホワイトカラーは慌ただしく、中国南方の出身者にも親しみが持てたのは東京の空気が湿っぽいところだけでした。

しかし今回は独りで街をさすらう必要がありませんでした。日本の大学生と交流するという貴重な機会を頂けたので、彼らの姿を知ること、そして親交を深めることもできたのです。私が出会った善良な愛すべき日本の大学生について、まずお話ししたいと思います。

最初に、東京一日観光ツアーのガイドを努めてくれた星野君と山田さん。星野君はとても男前で、体格がよく、目の際に青あざがありました。ボクシングの試合でついた傷跡だと聞いて、ふと北野武監督の『キッズ・リターン』が頭をよぎり、尊敬の念を覚えてしまいました。星野君は自分でフィットネスジムを開業して自給自足しているそうで、SOHOらしさを感じさせる人でした。それに比べて自分ときたら単なる青白いインテリで見劣りのすることと言ったらありません。

道中、スポーツから社会事情まで、時事ネタから都知事選挙まで、あれこれ話をしました。共通点がたくさんあり、またお互いの違う視点を尊重し合っていました。星野君は中国を訪れたことがあるようで、中国語ができ、中国のこともある程度分かっていました。

本を買いたいと伝えると、ブックオフに連れて行って一緒にたくさんの本を漁ってくれました。文学、哲学、文化、どれも日本関係の本です。お互いに好きな小説を紹介しあったりもしました。私がたくさん本を抱えて本棚の間で興奮しているのを見て、彼は私の日本を理解しようという情熱に敬服しつつ、自身が自国をちゃんと理解してこなかったことを反省したそうです。実際は自分が生活しているところのことこそ一番よく分かっていないもので、ちょうど彼が日本を知らないように、私も祖国である中国のことをわずかにしか知らず、偏見だらけだったりします。

星野君は料理にも詳しく、お昼にはちゃんこ鍋の有名店に案内してくれました。ちゃんこ料理はボリューム満点で、食べきれないほど出て来ました。後から知ったのですが、ちゃんこというのはちゃんこ鍋だけではなく、引退した力士が開いたお店のことも指すのだそうで、店主は私達が外国人だと知ると、デザートをプレゼントしてくれました。午後は星野君の案内で秋葉原と銀座を見て回りました。一行が疲れたのを見て、彼はおしゃれなカフェに連れて行ってくれました。お茶と談笑を楽しんで盛り上がるひとときでした。

星野君が男前だと言うなら、山田さんはかわいらしいおしゃれなお嬢さんだったと言えるでしょう。山田さんは三姉妹の長女のためかお姉さんらしい雰囲気があり、面倒見のよい人でした。道中、日本語が話せない鄭さんのために、山田さんが英語で話しかけてくれていました。お昼には魚を一切れ分けてくれたので、星野君がうらやましそうにしていました。星野君は冗談が好きで、山田さんがいちいち彼の間違いを指摘するたび二人で面白おかしい掛け合いをしていました。また山田さんは二日目の討論会と中日カラオケ大会の司会も務めていました。落ち着いたある美しい笑顔にぐっときた男子はたくさんいたと思います。

討論会では鈴木君、鈴木さん、愛さんとも知り合いました。

内気で真面目な鈴木君はグループ討論のリーダーで、討論を真剣に仕切ってくれました。私達が問題を曲解して言いすぎることがあっても、しっかり聞き届けてから適宜まとめられて、きりのいいところで話題を切り替えてくれていました。

もう一人の鈴木さんはお母さんが中国人、お父さんが日本人のハーフでした。12歳まで中国で暮らし、それから日本で生活しているため、彼女は中国東北部の人らしい率直さと日本女性の細やかさを兼ね備えていました。自分の意見を伝えるのがうまく、また他人の考えをよく聞いてまとめる力も優れていたため、私達のグループは彼女のおかげでまとめができたのだと思います。討論を記録した模造紙を持ち帰りたいと言うと、彼女がすぐさま床に膝をついて丁寧に資料を畳んでくれたあの瞬間は今でもはっきりと覚えています。

討論会では全面的で深い交流ができました。最初に各自が関心を持っている環境問題について確認し、それから中日の大学生で環境意識が違う原因について討論して、最後に環境問題で両国が協力できる可能性について話し合いました。討論は全体として筋が通っており、最後にはみんなで床に座ってまとめたものを鈴木さんが紙に書き取ってくれて、みんなからアイデア溢れる意見が出されていました。完成

後みんなで演題に立って発表したのはなかなかの効果があったと思います。唯一の心残りは時間が足りず、中日間の環境協力について発表できなかったことです。

討論会の後には料理コンテストと中日カラオケ大会がありました。グルメと音楽で日本の大学生たちと一つになって、一緒に両国の美食を作り、みんなで知っている歌を歌いました。いわゆる国境を越えるというのがここに現れていたのではと思います。日本で過ごした中で一番楽しい夜でした。

また津久井君、松尾君、天利さんも親切で善良な人たちでした。皆さんのことはきっと忘れなと思います。津久井君と松尾君は中国語がとても流暢で、また二人とも積極的な人でした。天利さんは清純でかわいい人でした。最後にスクリーンで彼らの製作したという『東京へようこそ』が放映されました。率直に言うと、感動で泣きそうでした。

まとめると、東京の皆さんがとても心のこもった周到な準備をしてくれたので、安心して十分に思うところをやりとりでき、また、料理と歌の文化交流を通じて、日本の大学生の考え方や能力に心から敬服しました。

日本という感性に満ちた国では、知らず知らず感性的になってしまうようです。最後の送別会ではみんなで雑談を楽しみ、大いに酔いました。記憶がほとんどないのですが、唯一ちゃんと覚えているのは、中村理事と李先生が約束していたことで、次に日本に来たら一緒に富士登山しようという話でした。その日が早く訪れることを願っています。

2. 沖縄の海

熱い空。

情熱的な人々。

美しい海。

そして美しい人々。

「どこの話ですか」と聞かれたら、歴史書をめくって琉球国のページを見せましょう。

「また訪れたいと思いますか？」と聞かれたら、黙って小枝を拾い、砂浜に自分の名前を書くつもりです。

初めて見る沖縄の海は、これまで見てきた中で最も青い海でした。しかしその魅力はそれにとどまりません。先生から沖縄の歴史を聞いて、那覇の街を歩き沖縄の人々と会話し、平和祈念資料館を見学して、フェンスの向こうが米軍基地だと理解してからその海を振り返ると、その青さが少し暗いことにやっと気付くのです。この穏やかな青い海と空も実は穏やかではないのだと。それでも穏やかであれと願っています。沖縄の海を愛する心は何物も邪魔できないものでしょう。

東京での秩序ある活動に比べ、沖縄での活動は割とのびのびしていました。これも沖縄らしさなのかもしれません。沖縄の大学生との交流も自由気ままなもので、みんなでバーベキューをしながら、中国と沖縄を紹介しあい、映画や音楽といった興味のある話題について語り合うというものでした。沖縄の大学生は初めはにかみがちで口数も少ない人ばかりでしたが、慣れてくるとオープンになってくれました。

赤峰さん、久留美さん、美佑さんは沖縄のガイドになろうと思っているそうで、県内地図を見せながら沖縄の風土や人々について紹介してくれました。シーサーや北部の動物など、興味深い話もたくさんでした。私達も北京の風土や特産物について紹介すると、面白がって聞いてくれました。それから、見たことがある映画とジブリアニメを勧めあいました。

そのほか、男子数人が沖縄の友人達とご当地の美酒、泡盛を飲んで真っ赤になりながら話を弾ませていました。まるで中国の実家に帰省したような感覚でした。日本はどこもお邪魔する感覚だけど沖縄はアットホームだよと友達が言っていたのも道理です。皆さんがこれだけのびのびとしているからでしょう。

夜には那覇のホテルに戻ったのですが、寝付けなかったので街を散策しました。那覇市の町並みは東京よりゆったりとしており、建物の雰囲気も様々でした。和風、沖縄風、洋風が混在しており、外観が少し傷んでいる建物もありましたが、話によると台風のせいだそうです。沖縄は日本本土とだいぶ異なり、沖縄の人も大和民族とかなり違うのだと言えるでしょう。

帰り道、街角でお菓子をつまみに飲んでいるおじさんを見かけたので、道を尋ねるついでに話しかけてみました。おじさんの祖先は中国の福建省から渡ってきたものの、本人はもう日本人なのだそうです。大工さん一筋の人で、内装職人だそうです。もう63歳だということにまだ引退できないそうです。年金だけでは日常生活がままならないので、もう数年は働かないと、という話でした。30代の一人娘は県内で大きな眼鏡店を開いており、結婚はしているもののおじさんはいないそうです。

おじさんは数十年前の沖縄の話もしてくれました。沖縄変換時に起こった面白いでたらめな出来事をいくつか聞いた後、沖縄の未来について話し合いました。沖縄にはこんなに車は要らない、鉄道網が必要だという話で一致しました。

その夜は遅くまで話し込みました。別れ際、中国人と話したのは30年ぶりで、まさかまた中国の若者と話ができるとは思っていませんでした。私も励ましにお礼を述べました。

おじさんが十分な年金を受け取って楽しく暮らせるよう心から願っています。苦勞して半生やってきたのにまだ生活の圧力を受けるとは、中国人にはちょっと理解できないことです。しかしこうしたことが中国でも起きる可能性はあるでしょう。

沖縄を離れるとき、思わずこの小さな島を振り返ると、沖縄の海と空はそれまでのようにひっそりとした青さを湛えていました。この地に暮らして、沖縄の人として、彼らの辛酸苦樂を味わってみたい気がしています。

3. 日本で出会った中国人

今回の日本旅行では、日本で暮らす中国人とも少なからず会いました。留学生、仕事で滞在している人、日本人と結婚して公民権を得た人たちなどです。暮らし向きは様々でしたが、皆さん日本での生活はとても充実しており、現状に満足しているそうです。ですが留学中の若者は帰りたいがっていました。彼らも公平な機会をくれる日本には感謝していますが、やはり故郷が恋しく、帰れる日が待ち遠しいのだそうです。それを聞いて、自分も日本にいた頃を思い出しました。日本で暮らす中国人は中日友好のために黙々と貢献しています。彼らは日本が好きで、日本人の中国に対する理解を助けようと努力しており、日本人も中国を好きになってほしいと願っているのです。

1週間で日本の4都市を回り、慌ただしく表面だけ見てきましたが、狭い視野の中からも感じたことはいくつかあります。たくさんの人、たくさんのお出来事に触れ、日本人の生活も少しは分かりました。北京に帰った直後には違和感がありましたが、日本人の礼儀正しさと回りへの気配りに慣れてしまったからだだと思います。北京では見知らぬ人に気を遣う人などいません。中国に長くいた日本人が日本に帰った後も適応しにくいようです。

中国には中国の、日本には日本の良さがあり、暮らしは違いますが一概に善し悪しは言えません。ただ、こちらにはないものが日本にはないと知って、それを理解したいと思うだけです。

日本にいる友人の皆さん、帰国してからたびたび思い出しています。皆さんもがんばっているのだから

ら自分もがんばらないと、と気付かされました。

次に日本を訪れるときはもう少し長く過ごし、より詳しく日本を体験しもっと多くの発見をしたいと願っています。勿論、こちらの暮らしを知るため中国にいらっしゃるのも歓迎します。

中日の交流では昔から詩歌を贈り合う伝統があるので、古人に倣って、下手ながら気持ちを詩に綴ってみます。

琉球明月照海云、
浪花壮士起歌声。
万里长城君做客、
三千富士待我登。

琉球の月は海面を照らし、
浪花には男達の歌。
万里の長城は君を待ち、
霊峰富士は僕を待つ。

ここの天気が熱い、
ここの人も熱い
ここの海がきれい
ここの人もきれい

「ここはどこですか」
と誰かに聞かれたら、
僕は歴史書を開き、琉球のページを辿る。
「またここに来たいのですか」
と誰かに聞かれたら、
僕は無言のまま、岸辺の白砂に名前を書き残した。

大連外国語大学 大学院1年 汪逸農（原文中国語）

日本での収穫



日本から帰国して数日になりますが、感想を書こうとずっと思いつつ、思うことが多すぎてどこから書けばよいか分かりません。みんなの撮った写真を見ながら期間中のことを思い出してみ、そこから得られたものについてお話してみることになりました。

最初の収穫は美食です。食べるのが好きなので、美食はきわめて大事なことです。日本滞在中は毎日決まって牛乳を買い、街ごとにご当地アイスを探しては味わいました。

きっかけは、基礎日本語の授業で出て来た文章で見かけたエピソードです。「旅に出るときは、自分の目で見て自分の耳で聞き、自分の口で当地の美食を味わいます。こうした美食は当地の風景や人情を離れると味が変わってしまうので、お土産として持ち帰ってゆっくり味わおうとしても、何かが欠けているように感じてしまうものです」というような意味の話でした。

今回の日本旅行ではずっとこの話が頭にあり、あちこちで現地の正統なる美食を探しました。食べ歩きは見た目にはやや品を欠きますが、その楽しみはもちろん言うまでもありません。京都のアイスには黒ごま味が、沖縄にはゴーヤ茶があり、山梨産の水蜜桃はとてもジューシーで甘く、本場大阪のたこ焼き

は中国で売られているものとは全くの別物で、中が火傷するほど熱くてとろとろでした。あたりの美景を長めながらご当地限定のグルメを味わうというのは本当に素晴らしいものです。

二つ目は友達ができたこと。自分は個人戦の入賞者なので、遊びに行くとき孤立しないか心配でなりませんでしたが、QQ（インスタントメッセージ）グループでみんなと会話していたので、元からの知り合いのようになれました。結局、浦東空港での集合から、不安は取り除かれていたのです。深く悩むことなくみんなと遊べてとても楽しい日々を過ごせました。

気持ちのまとめりと言えば外せないエピソードがあります。沖縄に着いた日、ガイドさんからマンゴーが沖縄の特産物の一つだと教わりました。高いけれど味わってみる価値は十分にあるということです。

その日の夜、イベントが終わってからスーパーマーケットでマンゴー探したのですが、値段を見て呆気にとられました。高いとは聞いていましたが、それでも1個880円もするとは予想外だったのです。しかし沖縄のマンゴーはよそのものと違い、色も独特な赤さでした。先にも書いたように旅先ではご当地の美食を口にしたかったので、つらい気持ちを抑えて200円の見切り品マンゴーを選びました。

その時、張哲琛さんが2人で分けて食べれば1人340円で済むよと声を掛けてくれたのです。よし！と感動の声を上げてしまいました。それから店内で雅君さんに出くわすと、彼女はこちらのかごを見て、マンゴーを買う気なのかと尋ねてきました。2人で共同購入するんだと答えると、私も入れれば3人になるから、3人で共同購入すれば定価880のマンゴーが買えるよねと言うのです。それはよかったですと思いました。こうしてマンゴー試食組は3人に拡大したのです。

この話にはまだ続きがあります。ホテルに戻ると、食べてみたいという人が次々に増えて、結局1個のマンゴーを6人で分け合ったのです。この思い出は一生ものだと思います。

並んで順番に一切れずつ食べ、一口ごとに次の人へ回しました。ふと、本当に6人も兄妹がいたらご飯ももっと美味しいだろうなと思いました。

ちょうど最終日の歓送会で、ある学生（皆さんお分かりでしょうから名前は伏せます）が酔っ払って車上で意気軒昂に「兄弟、みんな兄弟！」と叫んでいたように、この数日で結ばれた絆は兄弟姉妹のように忘れられないものとなりました。

三つ目は、人と人とのコミュニケーションがとても必要なものだという考えが学べたことです。そう考えるに至った経緯は二つあります。東華大学の皆さんとの付き合いが一つ、もう一つが日本人との付き合いです。

実家は上海に割と近いのですが、小さい頃から上海の人は排他的でよろしくないという話を聞いていました。そのせいで上海の人にあまりいい印象を持っておらず、進学するときにも上海地区は頭にありませんでした。

ですが面白いことに、今回の訪日で最も親しくなれたのは、上海の東華大学の三人だったのです。三人中二人が上海出身でしたが、彼女たちと接してみて、他の地区の人と何も変わらないことに気付きました。二人ともかわいくて気遣いの出来る人でした。かつて聞いていた上海人は排他的だとかいう感じは全くせず、とても仲良くできました。四人で遊んだときも笑いが絶えず、自分のほうが二年も先輩だったのですが、まるでそんなことは意識せず、まさか彼女たちのほうが年下だとは気付きませんでした。

「北方の四匹狼」と名乗っていた私達四人は、生まれも育ちも南方だったのですが、北方の狼を自称するのも楽しかった思い出です。上海に戻って解散するとき、最後まで一緒だったメンバーにお礼を言いました。皆さんのおかげで考え方が変わったと。

上海の人は付き合いにくいと感じていましたが、実際にはこちらが色眼鏡をいただけでした。あの人は上海出身だと聞いただけで敬遠するありさまだったので、交流もなかったのです。

もう一つの日本人との付き合いについて。二年前の交換留学では、多くの日本人に助けられました。現在の中日関係は二年前どころでなく、ニュースでは毎日のように日本がどうのこうのと聞かされ、かなりの緊張状態にあるのだらうと思います。しかし、今回また日本を訪れ、イベントを組んでくれたボランティアの皆さんだけでなく、あちこちで暖かみのある親切な日本人にたくさん出会いました。

実際、人と人との間で最も大事なことはコミュニケーションです。コミュニケーションをとらなければ、お互いに対する偏見がより悪化してしまいます。今回の訪日交流イベントでその考えにしっかりと確信が持てました。

以上が今回の日本旅行での収穫の記録です。

最後に、この交流の機会を提供し手配に腐心してくれた日本科学協会、尽力してくれたボランティアの皆さん、楽しませてくれた訪日団各位、ありがとうございました。感謝すべき人はもっとたくさんいるのですが全部は挙げられません、悪しからず。

最後の最後に、俳句を添えておきます（無理矢理ひねり出したものでよければ）。

真夏には、みんなと会えて、幸せよ。

汪さんの作文を読んで試みたものはこちらです。

七月の 沖縄マンゴウ 六人で 食べ美味しさも 六倍かなあ

南京大学 大学院2年 劉雅君 (原文日本語)

美しい日本の思い出



今はもう南京の家に着きました。自分の部屋の椅子に座って、ぼんやりとしていながら、写真を見回っています。昨日の昼まではまだ日本にいたが、夜はもう中国に帰りました。飛行機が交通機関としてよく使われている今、行き帰りが便利になったと同時に、いささか不真実感が感じられます。日本に滞在した八日間はほんとうにあっという間で夢のようでした。日本で撮った写真を見ながら、この八日間のことは次々と頭に浮かんでいきます。

24日に東京に到着した際、わくわくした覚えがあります。これからのことについて好奇と緊張にあふれています。成田空港で訪日団全員が集まって、迎えに来た日本科学協会の顧先生たちと合流しました。その時、ほんとうに新しい旅が始まったような感じがしました。訪日団の団員はみんな北京での知識大会後、成田での再会は二回目です。知り合いと言っても、それほど詳しいわけでもありません。顧先生たちとはメールでの連絡があっても、会えるのはそれで初めてです。その場において、みんなはきっと私と同じように興奮しているでしょう。

東京で過ごした三日間は忙しいけど、すごく楽しかったです。日本の学生さん、特に実行委員会の皆さんの行き届いた準備のおかげで、どのグループの東京見学もとても楽しそうです。お台場で温泉を楽しめ、海浜公園での名所探し、どれも貴重な思い出になりました。東京は南京に負けないぐらい暑いけど、日本人の友達との歓談で暑さも忘れられました。最も忘れがたいのは26日の一日でした。朝の熱々とした討論会、午後の楽しい料理大会、夜のにぎやかなソングクイズ、どれも雰囲気がよく、みんながすごく張り切っていました。ソングクイズの最後のところ、実行委員会の皆さんが作ってくださったビデオが上映され、この三日間の生活を記録して、どれもこれも懐かしい記憶を呼んでいます。じっと見ているうちに、懐かしくて涙が出てきそうです。楽しい三日間であると同時に、懐かしい三日間でもあります。この大切な記録はきっと忘れがたい記憶になります。

東京で懐かしい三日間の後、私たちは沖縄へ向かって出発しました。日本は初めてではないけど、沖縄は初めてです。沖縄は日本で有名なリゾート地と聞いて、海は非常に綺麗だと前から知っていました。今回は自分の目で沖縄の海を見られることはずっと期待しています。白い雲が漂っている青い空、きりが見えない青い海、綺麗な海浜ビーチ、どれも印象的です。海で張り切ったハーリー大会、ビーチで沖縄の学生さんと楽しく交流しながらやったバーベキュー、とても新鮮で忘れがたい経験です。その場の学生さんの中に、日本人の学生さんもいて、中国人の留学生も何人かいます。日本人の学生さんはみんな中国語が好きなようで、中国語がべらべらの人もいて、これからは中国で就職する予定の人もいます。

日本人の学生さんの中国に対する愛情にほんとうに感動しました。そして、沖縄に留学している中国人の学生さんはほとんど沖縄で就職したがっているという気持ちを聞いて、すごく感心しました。日本人の学生さんは中国語を勉強して中国で就職し、中国人の学生は日本語を勉強して日本で就職することになります。このようなバランスのよい人員交換は、中日友好交流の真の現れではないでしょうか。沖縄で出会った中日両国の学生さんから中日友好関係の希望が見られ、中日関係はきっと困難を乗り越えられ、よりよい方向に向かって進められると固く信じています。

その後、関西に向かって、関西巡りをしました。東京と沖縄とずいぶん違う感じの関西をいっぱい味わってきました。今回日本の旅では、いろいろな風景が見られ、さまざまな日本を味わえ、とても楽しかったです。それよりもっと楽しかったのは、日本科学協会の先生の方々とお目にかかり、数日間にわたって付き合ってくださいましたこと、そして日本人の学生さんとの交流で新しい友情を築き上げたことです。これから中日関係の行方はよく分かりませんが、私たち中日若者同士は自分のできる範囲で努力すれば、きっと何かいいことが出てきて、花を咲かせます。それで、いつかきっと中日関係を推進する力になれると信じています。

哈爾濱工業大学 大学院1年 孫琳（原文中国語）

共に過ごした夏



今でも忘れられないこと。東京お台場のレインボーブリッジの美しさ。われらG組が餃子で一位になったこと。沖縄のあの藍色の海、あのとても厚い雲。仲間達と大阪でショッピングを満喫したこと。京都の静寂な小径と願をかける寺院……共に過ごしたこの夏。

笹川杯知識大会で入賞した私はラッキーでした。日本財団と日本科学協会のご招待にあずかり、今回の日本旅行が実現したのです。日本に来たのは初めてではありませんが、中国各地のエリート達とこの国を感じ取るのは初めてで、そして日本の大学生や人々と交流ができたことで今回の旅はより有意義で豊かなものとなりました。

東京での二日間は日本の有名大学の学生が同行してくれて、とても充実した有意義なものでした。大江戸温泉物語はさながら小さなお祭り会場で、見て回りながら温泉に浸かって心身のリラクセスができ、屋外での足湯という選択肢があったことにも非常に満足しました。テレビドラマでよく見るお台場のレインボーブリッジも、イメージそのままの夢のような素晴らしさでした。二日目は日本の学生と様々な形で交流しました。環境問題の討論、料理コンテスト、カラオケ大会を通じ、歌と笑いの中それはそれは充実した48時間を過ごすことができました。

沖縄の海、青い空と白い雲の美しさには震撼させられました。現地ではドラゴンボートレースに参加することもでき、何もかもが新鮮で満足できる経験でした。青空の下、青い海の砂浜でみんなと焼き肉を楽しむ光景が想像できるでしょうか。素敵な風景、焼き肉、ビールと、仲間達そして沖縄大学、琉球大学の中国人留学生と日本人学生。青い空と海、白い雲と浜辺の中、みんなで盛り上がったのです。数え切れないポーズで写真を撮りましたが、海の素晴らしい青さは撮り尽くせませんでした。うららかな景色の中を、砂浜をぶらぶら歩いて、このまま時が止まればいいのにと思いました。

大阪のたこ焼きはやっぱり美味しく、京都の金閣寺、清水寺、嵐山の竹林は壮観なままでした。同じような風景を、違う時期に、違う人たちと歩いたのです。これほど多くの人と知り合って、一緒に味わうと、景色が更に美しく見えるような気がしました。

この旅に招待してくださった日本財団と日本科学協会には本当に感謝しています。道中ずっと付き添ってくださった親切な顧先生、かわいい吉田先生、一見厳しそうでも実際はとても優しい方だった宮内先生にも、そして北海道に連れて行こうかと冗談をおっしゃった中村常務、素敵な写真をたくさん撮ってくださった人民中国の孫先生にも。皆さんが努力してくださったからこそ、素晴らしく充実した日々

が過ごせたのだと思います。

帰国後にも日本の例の情勢はどうだったかと聞かれることはありました。実際、旅行中は何も感じなかったのですが、NHKの取材を受けた時さながらに、国と国の角度から見れば、今の中日両国は少し厳しい情勢にあると思います。ですが、こういう時には民間の交流こそ大事です。国と国との交流も、主体はその国民であるべきで、国民同士の理解とコミュニケーションあってこそ、問題の解決を促せるのです。きっと誰もが平和に憧れていると信じています。

わずか8日間はすぐ終わってしまいました。毎日がとても充実して忙しく、終える気になれない日々でした。今回の日本旅行は終わりましたが、各人は進むべき道にまだいます。その道すがら、共に過ごしたこの夏をずっと覚えていることでしょう。

南京師範大学 日本語科4年 呂篠（原文中国語）

細かいところから知る日本の強さ



中国人はいつも大国を気取り、日本をからかって「小日本」と呼んで、国土が狭く資源に乏しい国だと思っていますが、今回の日本旅行では細かいところから「大日本」を目にすることができました。

5月の知識大会から、中日双方が日本旅行の件に着手して、頻繁なメールのやりとりを通じて、まだ顔も合わせないうちから友達になっていました。訪日団の名簿、旅券、ビザ、航空券、日程といったこまごまと煩わしいことを、日本側が根気よく1通1通メールで確認してきたので、ひとしお親しみを感じたのです。

日本を訪れる前から、日本の強さを感じていたということになります。みんなのビザの資料はすべてEMSで各自に郵送されましたが、私の名前には簡体字と繁体字の違いで2種類の書き方があるため、とても注意深い日本科学協会の先生がわざわざ両方で送ってくださったことにはとても驚きました。

また、東京の日程のために慶応大学の皆さんが卒業論文の作業時間を割いてプロジェクトの実施委員会を立ち上げ、個々人のために特別な日程でグループ行動を設定してくれました。その分刻みなスケジュールの精度も中国では絶対ありえないものです。

先生方と学生の皆さんが親切で丁寧なので、旅行の日が来る前から期待でいっぱいでした。

7月24日、飛行機が東京の成田空港に着陸。第一印象は中国の空港ほど大きくはないものの、日本らしい清新さと静謐さがあって、きちんとして快適な感じでした。一つ一つの小さな売店には和風アイテムがきれいに並び、環境を作り出す観葉植物は自然の中にあるかのような気分にさせてくれました。

ホテルに着くと、一連の「予想外」がたたみかけてきました。エレベーターの前には手指の消毒液があり、客室内には湯気が当たっても曇らない鏡、枕元には直接USB接続できる充電器、浴室の小さいかごには化粧用具とかみそり！全体の空間は中国より小さくても、内容は絶対に強いです。外出時の不便もそうした親切設計のシステムで解決されていました。そのあたりの問題には数え切れないほど接していますが、この業界の心配りと責任感を初めて感じたのは日本ででした。

思わず日本の他業界の強さにも気づきました。日本製のものが好まれるのは理由があって、品質だけではなく製品設計からして快適便利な親切さがあるのです。そして全部が日本人の細かさ、慎重さ、まじめさのなせる業だったということに。

ここ数年来の流行語「細部が成否を決める」は最もよく日本人の真実を描写しています。このような国土が狭く、資源の乏しい国が、世界でこれほど高い業績を得ているのは、実はその「小ささ」のおかげなのです。

幸い茶道を学ぶ機会がありました。茶道は日本人が細部を重視することの現れの一つです。茶室全体の内装と装飾品から茶道具の選びかたまで、そして茶道全体のプロセスに至るまで、すべてに細かいと

ころの美が現れていました。

夏には夏の生け花と書画が茶室の床の間に飾られ、大自然に身を置いたような気分になさしてくれます。氷の形をした茶菓は、さわやかで満足した気持ちを作り出してくれました。茶道具はすべて完璧ではなく、少し傷があり、茶道の不完全な美の境地を表現。小山状に盛られた抹茶が、小さな茶碗の中で自然の存在を表していました。

茶道は単にお茶を味わうだけでなく、独特な気持ちで美を鑑賞するものとなっています。こうした美は茶道のかすかな動作それぞれの間で散りばめられ、更に心と心の何かも感じさせてくれます。

どこで何をするにつけ、日本人の親切さと細やかさを学ぶことができました。細部を重視する人が他人から好かれるに値しない理由はなく、そういう団体が他人からの尊敬に値しない理由も、そうした国が強大でない理由もありません。

初めての日本で、日本の細かいところの強さと心の強さを肌で感じることができました。

盛夏中 海に囲まれ 気持ちいい 情熱のなか 涼しくなるよ

貴州大学 大学院生1年 馮婉貞 (原文日本語)



期待していた八日間の日本への旅はもう終わった。家に帰って、体が疲れた上で、心の興奮を長い時間落ち着かせることが出来なかった。頭の中は素晴らしかった毎日を回想している。

以前日本を訪れるチャンスがあったが、ある原因で、最後に実行しなかった。実際に、今回日本へ行ったのは初めてだ。昔からの日本への了解は、ただ本から了解した知識だ。中国では百冊の本を読むことより、万里の道を歩くことがもっと良いという言い方がある。そうですね。専門書から日本に関する全てを了解することができるが、自分自身が日本へ行かず、根本的にこの国を理解することは必ずできない。

大学入試センター試験の準備をした時、ただ一種類の外国語を勉強しようと、日本語を選んだ。最初にそんなに大きい興味がなく、この何年間の勉強時間はただ日本語を習うことを目標にしていた。選んだことをぜひ努力してちゃんと完成しようとした。漫画も見なく、映画も見なく、全く合格的な日本語勉強者ではない様子であった。先週飛行機を垂れ込めている雨雲を突き破って、東京に着陸した時、窓外の輝かしい光を見て、もう他の国に着いて、これが伝説的な東京だということを突然に意識した。早く心を持って体験し、目を拭いて、この世界を見ましよう自分に教えた。

行きたいところが本当に多くて、時間が短い、グループに分けて選んだ一番行きたいところに行った。日本温泉を体験し、浅草寺に参拝し、日本伝統的な文化を体験した。苦勞したボランティア達が一緒に行って、興味を持っていることあるいは分からない所を説明してくれた。翌日日本若者達との中日環境保護に関する討論会、料理作り、歌詞クイズ

などの活動が行われた。日本側の学生達といろいろな課題がある。そこには、もめごともなく、争いの発端もなく、ただ両国若者交流する楽しさと調和的な雰囲気がある。真面目な平和問題がいらなく、このような雰囲気の下で、多く友達ができ、別れる時はみんな離れられなかった。ボランティア達が詳しいスケジュールを作り、彼らのまじめさと苦勞が感じられた。

もし、東京は高いビルがそびえている現代的な雰囲気が強い都市であるといえ、沖縄は全然違っている異郷風情である。空気が新鮮で、空が青く、海も青く、町が綺麗で、全く桃源郷のようだ。ここで、初めて海を見て、初めてハーリー大会に参加し、初めて怖いプールに入って、初めてBBQを体験した。沖縄は確かに深い印象を残してくれた。また、沖縄は中国と昔から密接な友好関係を持っていたため、心中で他の親しい感覚が湧き出る。大阪も美しい都市である、ビジネス雰囲気が濃い心齋橋も可愛い飾り物で飾られて、とても面白い。最後は最も期待している京都で、さすが千年以上の歴史を持っている

古城平安京である。古めかしく優雅的な建物、歴史感を持っている神社、お寺、有名な川と森、全て魅力的である。この古城に於いて、まるで千年以前に戻り、周りが人が行き来して、たいそうにぎやかで、遣唐使が唐の物事を持って帰る平安京のことを思い出した。

八日間の旅はこれで終わった。もっと深刻的に日本と日本人を了解させた。日本がそんなに綺麗で、どこへ行ってもゴミが見られなかった。百次聞いても、一回見る方がいい。自分の目で、真実的な日本を体験することができる。日本側の友達が友好的で、親切的な持て成しと手伝い、及び熱情に心が暖かくなった。国境がなく、若者友達の交流があるだけだ。

ただ残念が残って、それが私の言語表現能力とコミュニケーション能力である。完全な日本の環境で、自分のコミュニケーション能力が遥かに足りない。他人がぺらぺらと交流でき、私達をもっと焦っている。その時、早く帰国して、自分のレベルを向上させようと努力したい。心の思いを完全に表現し出したい。また、日本への体験と理解で、自分の考えを持って、勉強に有益だ。日本語を勉強し始める時、このようなチャンスがあれば、きっと今のレベルではない。身をもって体験したことがあるからこそ、日本語をちゃんと学ぼうとする意欲がある。

沖縄でのスケジュールの中では、ひめゆり平和祈念記念館に見学する計画があった。被害生徒達と先生達の写真を見ると、みんな心情が暗くなった。戦争が残酷で、かわいそうな民衆達が戦争の中で最大な被害者である。戦争が欲しい民衆がいない。ここで、世界は永遠に平和が欲しく、国間が平和的に往来し、民衆が友好的交流出来ることが欲しい。日本語を学ぶことはただ一つの言語を学ぶことではなく、それをツールに、両国人民の友好交流を促進する任務を担うことが大事なことだ。世界の平和、民衆の福祉、国家も繁栄に自分の力を尽くしたい。ここで、私達を歓迎し、わざわざ大阪に私達を歓送した中村常務、私達のそばに立ち、一緒に八日間付き添った顧先生、宮内さん、吉田さんに、心より感謝の意を申し上げたい。先生達が従事している両国民衆友好交流に促進する努力に深い敬意を表したい。また、各地で私達を持て成した先生達、市民達、及び生徒達の熱情に日本人民の友好を感受させた。別れる時はそんなに離れられなかった。これがまことな別れではないと信じて、今度の再会を期待している。私は、これから何をすべきかを考え始める。。。。。

水无月抵大江戸，霓虹古朴总相宜。
云低海阔骄阳烈，风诉琉球异域情。
天下厨室大阪府，千载平安国色城。
把酒约待重会日，得交知己心底留

江戸とネオンが織りなす東京
海も日差しも薫る沖縄
食は大阪 雅は京都
君との杯またいつの日か

中国人民大学 外国語学院日本語科 準教授 銭昕怡

八日間の訪日を終えた感想



このたびは 2013 笹川杯日本知識大会の主催校の代表のひとりとして、訪日団に参加させていただいた。行く先々で日本科学協会の行き届いたお気配りと、中国の若者に日本をよりいっそう理解してもらうための熱意と工夫が感じられ、とても感動に満ちた旅だった。

まずは東京での日中若者の交流イベントを高く評価したい。慶応大などの学生ボランティアからなる中国人招聘事業実行委員会によって行われた、環境問題討論会はもちろんのこと、東京見学、

料理対決やカラオケ大会などにも若者ならではの創意工夫がみられ、とても打ち解けた雰囲気の中で日中の若者の親交を大いに深めることが出来た。日中両国の交流と友好を担う次世代を育てるという趣旨から、日本科学協会は学生ボランティアにこのような活躍の場を提供しただろう。一教師として、この親心は見習いたい。これから中国の若者たちにも中日交流の場でより大きな役割を果たしてもらいたい。

それから、今回の訪問地は関東、沖縄、関西と、三つの地方にわたり、日本をほぼ縦断したことである。高層ビルが立ち並び、鉄道網が織り込まれている国際大都市東京から、南国ムードが溢れる沖縄、そして古い町並みや寺院が点在する古都・京都へ。走馬灯をみるようだったが、訪日団のみんなも日本の地域性や文化の多様性を肌で感じる事ができた。「百聞は一見に如かず。」今回の日本を縦断した旅は皆さんにとって、日本は小さい国だ、日本は単一民族だといったステレオタイプを見直すいい機会となるだろう。

この八日間の旅から得た何よりも大切なものは日本科学協会の皆さんと訪日団のメンバーたちとの出会いと友情である。同じ時間と空間を共有することによって、私たちは本当の仲間となった。このたびは本当にお世話になった。皆様、いずれまたどこかで会おうね。

2. 「笹川杯作文コンクール」優勝者訪日団

燕山大学 文学新聞伝播学学部 4年 楊超（原文中国語）

出会った人と出来事



北京時間の12:45分、飛行機が着陸。乗務員の軽やかな日本語が聞こえましたが、吸い込んだのはもう北京の空気で、8日間の日本の旅はこの時、本当にピリオドを打ったのでした。

日本に対する感想をお話しするのは、多かれ少なかれ複雑な感覚があります。この感覚をどう形容すればいいのか分かりません。単純なプラスマイナスの評価ではまとめきれないのです。感じたというのが最も確かな表現かもしれません。

東京はドラマで見たように、一列一列がきれいで風情もありました。ここで知り合ったのは津久井二郎さんときれいな日本のお嬢さんです。

二郎さんは活発で親しみやすく、表情豊かで生き生きとした雰囲気の人でした。初日の行程で、二人が東京を案内してくれたのです。自分の時間を犠牲にして何度も計画を練って、何度も路線を検討してくれていたことを知った時、本当にとっても感動しました。この数人から日本人がどうだとまとめることはできませんが、彼らの品格が学ぶに値するものであることは疑いありません。

浅草ではお嬢さんと二人で観光する機会がありました。私は全く日本語がわからないので、ごく簡単なやりとりしかせず、おかしなところもありましたが、原始的な言語は通じるもので、いくつかの中国語ときれいでない英語を使っていました。言葉が通じないなら眼光で、心を理解すればよいのです。そんな感じでした。最も原始的なレベルでの交流は大変でしたが、楽しめました。

一日の最後に抱き合ってお別れをすると、友情とはこういうものかという気になりました。嘘も誇張もなく、一日いや数時間でも友達になれるものです。

沖縄は本当に空も海も青いところで、景色が美しいだけでなく、静かな場所でした。古いカラオケ機材で何年も前に引き戻され、何年も前の当地や住人たちはどうだったのだろうと思いを馳せました。初めて出会った当地の人々の純朴さに心が動きました。彼らには独特な特徴があり、美しい大きな目、温かな性格、強い情熱を兼ね備えていました。食卓で左に座った日本人男性は三十代らしく、小柄で見た目にはカッコいいとは言えない感じでした。ところが彼は相当な中国マニアで、携帯電話に保存した京劇のコスプレ写真を見せてもらったら、本当に美しかったのです。彼は粗末な中国語テキストを手を苦勞しながらとつとつと中国語訳をしては、一段ずつ中国語の字句を作っていました。手を角に見立てて頭に寄せ、色々面白い動きをしてくれた彼は、カッコよくはなかったのですが、確かに純朴なかわいらしさがありません。

夜、静まりかえった海辺を高くから満月が照らすと、沖縄の海はそっとさえずりのようなリズムを奏でました。海辺の石に腰掛けた二人の若者が小声で何か話しているのを見て、『海角七号』のシーンを思い浮かべました。月のきれいな夜に、ある日本の若者が、敗戦して帰国する船上から台湾に残る彼女へと手紙を書くシーンです。彼らは戦争で出会い、また引き離されたのでした。そんな画面によく似た月夜、日本の若者が二人そこでささやき合っているのは幸運でないとは言えません。海辺の月はそんな静かさで、波の音を伴っていました。きっと同じような月明かりの下、山の麓で、川辺で、どこでも、月を眺めながらの愛情は同じことでしょう。これだけ平和で穏やかであってこそ、愛情が長続きできるのです。

日本から帰って来て、一方ではますます自分の国が心から好きになりました。飛行機で祖国の景色を高い所から見下ろすと、雄大な河川、山河は絵のように美しく、いっそう自国の文化が好きになった気がします。もう一方では日本のことも好きになり始めました。その清潔さと秩序、礼儀正しさとまじめさが。日本の人々が何事に対しても一心に完全無欠にやり遂げるところがもっと好きです。この点は尊敬すべきところで、中国人が学ぶに値するところだと思います。

中国海洋石油総公司 ニュースセンター 記者 付饒

日本旅行記



東京は「汚れを隠す」ところだという第一印象でした。お手洗いとごみ箱を見ての感想です。

成田空港のお手洗いはとても広く清潔で、ちり一つ落ちていない施設で、備え付けペーパーにも不足がありませんでした。今は中国国内の公共施設でもかなり清潔なお手洗いはありますが、「便利さ」の観点からは確実に日本とは開きがあります。

日本のごみ分類はとても細かく、しかも街中にはごみ箱がほとんどありません。ごみの分別処理、粗大ごみの有料化などはかなり一般的です。日本はエネルギーに乏しいため、石炭燃料を節約してエネルギーを効率よく使わなければならないため、こうした細かいごみ分別法があってもおかしくはないと連

想しました。

空港から東京の宿泊先に着いたのはもう遅い時間でしたが、ガイドさんから東京についての紹介がいくつかありました。東京ディズニーランドは夕方になると童話の世界のような姿だそうです。しかし同園の近くを通るとき、ガイドさんが示したのは道路の反対側でした。明かりの灯っていないところです。

その部分は同園の倉庫で、緊急避難場所を兼用しているのだという話を聞きました。東日本大地震の発生時、同園の従業員は道を挟んで LED 灯を掲げ、利用客全員をそこへ案内したそうです。神聖なほどロマンティックな雰囲気乱すことなく落ち着いた振る舞いは、従業員の平素からの訓練と「顧客至上」の理念を示しています。

東京の愛宕山の旅館に到着したとき、長旅で疲れきっていたのですが、やはり興奮を抑えきれず一部の仲間と東京タワーの夜景を見に行きました。上海の「東洋の真珠」、広州の「広東タワー」、台北の「101」、パリのエッフェル塔といった高層建築には行ったことがあったので、東京タワーが取り立てて珍しいとは思いませんでした。しかし夜の霧に見え隠れする絢爛な色彩はやはり魅力的でした。タワーまで歩く途中、寺院、神社、住宅、商店を通り過ぎました。珍しくもなんともないものばかりですが、いずれも中国文化と複雑な関係があるうえ、微妙な違いもありました。

あまり考えが進まないうちに疲れが襲ってきたので、旅館に戻って日本式の湯船に浸かって寝ました。

25 日の旅程は「電車」に乗るところからです。駅に歩く途中で、日中の東京を初めて細かく観察してみました。「洋服」(スーツ、シャツなど)をまとめて慌ただしく道行く人々の姿に、その場がオフィス街なのだ気付かされました。道路は狭いものの、きちんと秩序がありました。歩道上でさえ人々は左寄りに歩き、急ぐ人のために通路を空けていたのです。

電車では東京の海や橋を遊覧しながら、東京の同年齢の人に生活の話を聞きました。グループ行動の「リーダー」徳永さんは今年、慶応大学を卒業して日本の航空会社に就職し、初任給は月 20 万円(人民元に換算すると約 1 万 2 千元)だそうです。希望の仕事につけたと聞いて祝福しました。同時に中国の「就職超氷河期」を連想し、就職情勢が日本の若者よりも困難なことを密かに嘆きました。

最初の目的地は大江戸温泉物語です。中国と違ってこの温泉には江戸時代を模した町並みが作られており、浴衣で館内を歩き日本のグルメを味わう趣向が凝らされています。

日本の温泉文化は世界でもおなじみです。グループの日本人メンバーにリードしてもらって浴衣に着替え、男女に分かれて大浴場で室内外の色々な温泉を楽しみました。

しばし温泉を体験してから、日本式の食堂でお昼です。私が選んだお刺身定食は 1380 円でした。中国の定食と比べると安いとは言えませんが、おいしくてボリュームも十分にありました。

昼食後には初めて「自動販売機」を体験。日本では飲料や食品だけでなく、アイス、新聞、煙草、場所によってはお土産まで自動販売機で買うことができます。

次の移動も電車でした。徳永さんの案内で、かの有名な秋葉原電気街を歩いたのです。今や秋葉原と言えばアニメオタクの「聖地」です。ここではアニメ関連商品やコスプレ(なりきり)用品がたくさん売られているからです。

メイドさん文化も秋葉原を彩っています。リーダーの案内でメイド喫茶に行ってみました。店内では「メイド」に扮した店員さんがデザートやドリンクを運んでくれます。利用客は店内のポラロイドカメラで彼女たちと記念撮影してもよいことになっていますが、身体に接触してはならないルールです。

男社会で「メイドさん」文化が流行っているのは、日本人の仕事がストレスフルで、風変わりなレジャーで紛らわせる必要がある証拠の一つでしょう。

秋葉原ではショッピングも体験しました。自分用にパナソニックのシェーバーを買ってみました。9 千円は中等品の価格帯でした。日本の商業施設にはほとんど値引きの余地がなく、全国各地でほとんど価格差がありません。

夜六時過ぎ、「三尺三寸著」での歓迎会に向かいました。歓迎会では初めて日本科学協会の大島美恵子会長にお会いしました。とても風格をお持ちの方でした。挨拶では現在の微妙な中日関係に触れられて

いました。しかしこの一日の交流で目にしたのは両国の民間、特に青年の交流は今でもしっかりした基礎があるということです。「国の交わりは民が親しみあうところにある」という言葉を思い出しました。中日関係の未来は私達若者がどう築いていくにかかっています。

夕食後、中国青年報の張蕾さんの案内で渋谷観光にも行きました。地下鉄の駅を出るとすぐ「ハチ公」の銅像が目に入ります。この像は当駅が目印で、若い人が待ち合わせするスポットです。その近辺から、かの有名な交差点を眺めました。さまざまなファッションの若者が一塊にまとまって、信号が赤になると、人、車、ネオンサインの急流が織りなす壮観はシンフォニーのようでした。

渋谷では「暴走族」も見かけました。改造した単車、エンジンの轟音、独特な服装は、渋谷のすべてと融合しているようでした。アジアひいては世界の若者のファッション先端を代表する姿です。

宿に戻る地下鉄は終電でしたが、酔っ払った人が多く乗っていました。日本の会社員、特に男性は退勤後「二次会」で同僚と呑んでから帰宅するとは話に聞いていましたが、まさにそんな様子でした。

日本財団のビルは東京でも繁華な港区にあります。26日の朝、中日50名あまりの青年がそこで環境問題と中日関係について語り合いました。グループ討論はとても熱い雰囲気でした。環境についてのグループ討論では、両国の若者が環境に対して持っている関心事に違いが見られました。中国側はPM2.5や水質汚染など、比較的日常生活に近い環境問題を気にしていました。日本側では地球温暖化、廃棄物リサイクルといったより世界規模の環境問題について関心を寄せる人が多かったのです。環境問題に関する双方の関心事について、各自の解決方法を提案しあいました。双方とも、情報共有と技術面での交流強化を希望しています。また日本の青年は、中国が環境分野の立法と制度教育を強化すべきだとも行っていました。

私のいた「F組」には福島出身の女子大生がいました。彼女によると、2011年の地震で放射性物質漏出事件があってから、それまで人気のあった福島の農産物が売れなくなってしまっているそうです。当地の観光業にも大きな影響が出ているとのことでした。福島原発の事故は日本政府も原子力発電の発展戦略を見直す契機となりました。日本に50基ある原子力発電所が全て運転を停止して保安検査に入り、「脱原発」の声が絶えず上がっています。

お昼頃に衆議院の前を通りかかると、その向かいに「福島原発の再起動反対」と掲げたデモの人がいました。これも一部の民意の表明です。

環境省地球環境局中国研究官である染野憲治さんから中国の環境汚染対策に対していくつか提案を頂く機会もありました。染野さんは1970年代初めに日本の環境品質が転換点を迎えたころの状況について紹介されましたが、このお話は将来の中国にとって重要な参考資料となります。「1964年、日本で東京オリンピックが催され、1970年に公害対策基本法が公布、1974-1975年の環境保護の投資はピーク期に達しました。日本の軌道で推測すると、中国は2008年にオリンピックを催したので、向こう10年で多くの問題が見つかる可能性があります。投資拡大が続き、投資のピークとなるのは2018-2020年になるでしょう。」

現在の微妙な中日関係という背景にあって、中日の青年が環境問題について討論したのには民間交流としての重要な意義があると思います。今回の訪日団の団長を務めた中国青年新聞社の李雪紅編集委員が発言されたように、討論会では両国の青年の情熱と国に対する責任感が見られ、こうした深い交流により相互理解を促す試みは中日両国には非常に重要です。両国の間に存在する問題の解決にも有益な影響があります。

笹川杯全国大学日本知識大会の特別賛助者である日本財団の尾形武寿理事長がインタビュー時に話されたところによると、両国間には常に大小の問題があり、相互理解が十分でないためのものも大きいとのこと、両国の青年が討論会の形で交流を深めることは両国関係の将来の発展を利するものであり、今後もこうした交流活動を続けていきたいそうです。

午前中の討論会と比べると、午後の料理コンテストとカラオケクイズ大会はリラックスした雰囲気

した。中日両国の青年が満面の笑みで両国の特徴的な料理「関西風お好み焼き」、「開口笑（中華ドーナツ）」、「餃子」などを作り、ジェスチャーで相手の曲名を伝えようとがんばったりしていくうち、きっと心の距離はなくなったと思います。

別れの時はいつもつらいものです。宿の出入り口で手をつなぎ花道トンネルを作って日本の皆さんを見送り、曲がり角で姿が見えなくなるまで見つめていました。

近い将来に再会できることはないでしょうが、交換した名刺のメールアドレスがつながりを続けてくれます。東京を離れないうちに何人もの友人から心のこもったメールをもらいました。

27日、全日空の「ポケモンジェット」で日本の最南端、沖縄へ向かいました。首里城は2000円札に刷られた観光地で、日本における重要度が窺えます。沖縄で最初の目的地は首里城でした。特に貴重なのは、中日の風格を併せ持った建築物の由来が、古くは琉球と呼ばれていた沖縄が中国の属国だった歴史にあることです。着陸してからガイドさんに琉球の歴史を聞き、この街に対する親しみが増しました。

午後はビーチに出て水着に着替え、写真をたくさん撮りました。和服を着るところから交流イベントが始まり、夜のカラオケ大会では、中日の青年が協力して両国でポピュラーな歌を何曲も歌いました。周華健（エミール・チョウ）の『花心』が沖縄民謡のメロディーで、日本では『花』と呼ばれる曲だったことを初めて知りました。日本の女子大生一人と、この歌の各国語バージョンを歌いました。

沖縄で二日目の午前中は気分の沈む日程でした。軍事や戦争に関係する地区を回ったからです。沖縄の米軍基地を遠くから眺め、沖縄市戦後文化資料展示室を見学して、沖縄国際大学で富川盛武学長から米軍のヘリコプター墜落事故で外構が壊れたときの話を伺いました。在日米軍の存在に頼る市場が不景気な様子を見て、米軍の飛行機が住宅地を飛行しないようにという同学長の主張に回答を得られていないと伺い、日本は第二次大戦で他国に罪を犯した一方、自身も重傷を負っていたのだと思わず感嘆してしまいました。70年近く経つ今なお沖縄が戦争の辛い結果を味わっていることから、平和の重要さが分かります。

お昼は「和風亭」でとても日本的な天ぷら定食でした。一同が畳の上に座って刺身、味噌汁を味わい、茄子、南瓜、エビ、きのこの天ぷらを頂きました。天ぷらの衣は中国の揚げ衣と違って薄く透き通り、金色の絹糸のようでした。特に野菜の天ぷらは透明感があるだけでなく、裏側がほとんどべとついていないものもありました。だからこそ天ぷらは香ばしく揚がるだけでなく、油を吸いすぎないため具材のあっさりした味を壊さないで済むのです。

定食が運ばれてきた時はみんなとても空腹でしたが、手を付ける前に写真を撮る人がたくさんいました。

午後の日程はかなり気楽になりました。海辺でドラゴンボートレースを体験し、沖縄大学で中国語を学ぶ学生33人と交流し、豊見城市民と海辺で焼き肉を楽しんで、沖縄の伝統舞踊を習いました。その光景を目にしてこちらも「太極拳」を一通り披露してしまい、日本の若者達と「言葉ではない」交流を持ちました。

28日の午前と同様に29日も沖縄の平和祈念館を見学しました。ひめゆり祈念館は戦争で亡くなった女学生を記念した施設です。1945年当時まだ17歳で、戦争の中で先生や学友達が亡くなっていくのを目の当たりにした生存者である館長のお話を伺うこともできました。館長がつぶさに経験された世の変転を伺って、改めて戦争の残酷さと平和の大切さに感嘆しました。

東京と沖縄とで日本のさまざまな一般の方と交流したことで真実な日本の一つが見られました。慌ただしかったとは言え、日本で目にした一つ一つの景色、一人一人の言動は日本についての新しい認識をくれたと思います。

日本式の道路横断から中国式を振り返って



初めて東京を見たら、日本人の歩く速さにきつと驚くことでしょう。朝晩を問わず、地下鉄駅から勤務先まで、通勤族がすごい速さで歩いています。更に驚くべきことは、テンポの速い生活に慣れている日本人は交通規則を頑なに守っていることです。細い道で通行車両がないときでも、赤信号を無視して渡る人はいません。中国式の渡り方とは鮮やかなコントラストです。

日本人がルールを守る人たちだと前から聞いていましたが、新宿駅付近の混雑した交差点で、半歩もはみ出さず信号を待っていた人たちが青になると流れていく場面にはこの上なく震撼しました。

どうして日本人はそんなことができるのでしょうか。「小さいときから交通ルールを守るように教育されているから」とある日本人は答えてくれましたが、内心の疑問は消えていません。

日本旅行の前に、ある隣人からこんな話を聞きました。電動スクーターで子供を幼稚園に送る途中、赤信号で停車したときにタイヤが少しだけ停止線をはみ出してしまいました。子供がそれに気付いて、線の後ろまで戻らなければ、1センチもはみ出ではいけないと言ったのだそうです。

その話からまじめに想像すると、こちらでも幼稚園のうちに交通ルールを守るように教育されているのです。では何故、大人になると信号無視をしてしまう人が多いのでしょうか。

明らかに、信号無視する人も交通ルールの知識ではなくルール意識が足りないのです。つまり自分から、規則で自分の行動を縛るという意識が足りていません。

日本では誰もがルールを守る環境で暮らしているため、人々は強いルール意識を持っています。交通ルールが厳守されているように、列に並ぶのも常識で、ごみの分別も過酷なほどきちんとされています。

2004年の秋、香田証生という日本の若者が、政府の忠告を聞かず戦争中のイラクに旅行してテロリストに誘拐されたニュースを思い出しました。政府は救出部隊を何度も派遣したものの、彼は最終的に殺害されてしまったのです。そのニュースが日本に伝わると、一部の日本人が彼の実家に電話して、彼はルールを守らなかったばかりに政府に手間を掛けたと叱責したそうです。世論の圧力を受けた家族は政府と社会に謝罪せざるを得なくなりました。テロリストが公開した録画の中で、彼は小泉首相（当時）に対して「小泉さん、すいませんでした」と話しています。ここから、日本ではルールを守らないと多くの人から後ろ指を指され巨大なプレッシャーを受けるといことが分かります。

ここで中国を振り返ると、ルール意識の足りない一部の人は、信号がないかのように勝手に道路を横断しています。信号無視で罰を受けても、恥ずかしげもなく口実を探しては信号を見なかったと答え、所持金がないので罰金は払えないなどと言っているのです。

実際、ルール意識が集団として欠けているため、中国式の横断法が横行しているのです。もし社会全体で交通ルールを守らないのは恥ずかしいという雰囲気形成されていたら、信号無視をしたとき白眼視に晒されるでしょうが、それでも大手を振って歩けるでしょうか。

集団としてルール意識の足りない状態が続いていけば、中国式の横断もそのまま横行するでしょう。先の話にあった真面目なお子さんが、ルールは破ってよいものだ、公平性は踏みにじれるというのを目にして育っても、信号無視をする大人にならないとは誰も保証できません。

東京で最後の夜、渋谷駅前の有名な交差点に立ってみました。信号が青に変わった瞬間に、まっすぐ並んだ人々が忽然と歩き始め、道路に押し寄せました。私もそこに加わりましたが、横断を急ぐためではありません。雑踏の足並みから、人々がルールを守っているという素晴らしい体験をしようと思ったからです。中国国内でもこうした体験が実現できるようになることを心から望んでいます。

桂林天華智投信息諮詢工作室 總經理 鄭天華（原文中国語）

青い海と空



皆さん、私はもう中国に帰ってしまいました。

出発前に、日本の友人からメールをもらい、最近の日本は暑いので対策の用意をするようにとのことでした。しかし期間中、日本の「酷暑」は中国よりいくぶん見劣りがするものだと感じました。

8日間の日本旅行は本当にとっても疲れしました。飛行機に乗ること4回、4都市を回り、道中はずっと自分の荷物を気にしていました。毎日のように車の乗り降りや建物内の移動で持ち歩くことを考えると、いつどれがなくなるやら心配でなりません。しかし荷物をホテルに置いている間も自分たちはバス、地下鉄、徒歩で目的地間を動かなければならず、本当に移動で疲れ果てました。

そう、旅程がぎちぎちだったのです。きっと主催者とボランティアの皆さんが、限られた時間でよりたくさん日本を知ってもらおうと考えてくれたのでしょう。午前、午後、夜とも盛りだくさんで、昼も夕方も面倒を見てくれていました。当然、私達より皆さんのほうが疲れたはずですが、毎晩の解散時にも、皆さんは片付けや資料整理、翌日の計画をする必要があり、地下鉄の終電で帰宅していたようです。そして翌朝の集合時には階下で待っていてくれました。お礼を言おうと思っていましたが、皆さんはずっと笑顔を向けてくれていました。間違いなく友好的な笑みなのですが、まだお互いを理解していないことも分かっていたので、近づいてみることにしました。

日本の大通り沿いにはほとんどごみ箱がないので、ごみは長時間持ち歩く必要がありました。日本のごみ処理技術は向上し、分別も数年前ほど細かくはなくなったそうですが、中国と比べるとやはり面倒の二文字に尽きる感じでした。

日本の公共施設にはほとんど喫煙者がいませんでした。屋外の吸い殻入れやガラスで囲まれた喫煙室に集まった喫煙者たちは、すでに「最高の幸せ」の一種であるあの快感にありつけなくなっているのではと思います。

数日で表面だけざっと見て回りましたが、ある摩天楼のそばに恐らく数百年前からの神社があり、この高低、新旧の異なる建築物が当然のように混在しており、何も違和感がありませんでした。

割と多くの中国人が注目していたドラッグストアの店内では、たくさんの化粧品に「和漢処方」と書かれているのが目に入りました。数年前、中国で一部の「憂国の士」が「伝統医学を廃止する」と騒いでいたとき、日本の多くの友人から、明治時代に漢方は廃止され、1970年代にようやく復興したのでまるまる百年の断層が生じていると指摘されたのを覚えています。

日本の古代建築は現存しても、伝統文化は存亡の危機に瀕しているようで、残念に思うこともたくさんありますが、もう増えないでほしいものです。昔も今も私達は多くの面で交流しているはずですが。たとえば経済、技術、残念な思い、経験など、北京と東京の地下鉄のように。北京ではホームを間違えても地上に出て道を渡る必要はありませんが、東京ではエスカレーターが整備されているので階段の長さを心配する必要がありません。

日本の上空を駆ける飛行機はいつも一面の広々としていた海と空の間を通ります。その時の飛行は安定しており、天地は一面の紺碧で、飛行機が止まって透き通った水晶玉の中に浮かんでいるように感じるので。その瞬間、世界はそれほど静かで、平和も友情も気に懸ける必要がありませんでした。以下に詩を綴ってみます。日本語でその意味を伝えられる日が来るかも知れないし、皆さんが中国語のまま読める時が来るかもしれません。

朝に東京を発ち午後には守礼門へ
波が雲に届くまっすぐな水平線
鳥が休む日の入りには潮も引き
新旧の友人と親しむ
千年を受けて万里を憂えず
晴れて虹かかかりますように

中共南開区委党校 講師 劉曉秋（原文中国語）

細部の中の日本



2013年7月24日から31日、中国青年報「笹川杯作文コンクール2012—感知日本—」の一等賞受賞者として日本科学協会のご招待にあずかり、他の受賞者達と日本を感じる旅をする機会に恵まれたことは一生の思い出です。

8日間のうち、一部の有名な人文・自然の景観を見学したほか、日本の大学生と向き合っ
て環境問題と中日関係について討論を交わし、また沖縄の県民の方や学生と気軽な対話を楽
しみドラゴンボートレースに参加したりもしました。楽しい時間はあっという間で、気付けば帰国から
もう何日も経っています。

期間中の写真を整理しながら、その間のできごとをあれこれ思い出してみました。今回の日本を訪問
する旅で最も印象深いことをあげるなら何かと聞かれたら恐らく、金閣寺の精巧な美しさでも、沖縄の
青い空と海でもなく、細かいところに配慮が行き届いた日本のサービス業だと答えます。

「態度が全てを決める」とも、「細部が成否を決める」とも言われています。私がお話ししたい細部の
日本とは、細かい配慮で顧客至上の理念を体現する日本のサービス業とそのスタッフ、そして国民の行
いもその影響を広く受けているということです。

空港から旅館に向かうバスで早くも気付いたことがあります。まず、バスの運転手さんが文句一つ言
わず三十人あまりの荷物をトランクルームに片付けてくれたこと。バスのステップに少し湿ったタオル
が掛けてあり、靴に付いた砂埃を取れやすくすることで車内が清潔に保たれていたこと。バスの座席す
べての背面に小さな設備がついており、それぞれ飲み物、バッグ、ごみを入れられるようになっていた
こと。乗客のニーズを最大限に満たしてくれていると思いました。

日本のサービス業は細かい配慮の極致に達しているなど気付くと、細部の改善をし続けることが日本
人にとっては更にすごいのだろうと分かるようになりました。

旅館で入浴を済ませてテレビを付けると、備え付けのトイレトペーパーの折り方を流しているチャ
ンネルがありました。一般にトイレトペーパーはきちんと三角形に折られていることはおなじみです。
日本のホテルはたいていそうですが、中国ではほとんど気かけられていません。しかしそのチャ
ンネルで流れていたのは、ペーパーの一端で四つ葉のクローバーや千羽鶴など面白い形を作る折り方だ
ったのです。ペーパーの色ごとに目標とする作品が違い、たとえば緑だと四つ葉のクローバーや青
蛙、ピンクだと花や鶴といった具合でした。キャスターがそれぞれの折り方を説明しているのを見
て、すごいものを見たとしばらく感嘆してしまいました。トイレトペーパーがこんなにも鑑賞に堪
えるものだったとは。よく考えてみるとごく小さなことですが、宿泊客がお手洗いに入る時、色
々なかわいらしい形に折られているペーパーを見たら、にっこりと笑って、気持ちと口角を同
時に上げられないでしょうか。

こうした例は他にもたくさんありました。日本全体が丁寧に刈り込まれた盆栽さながら、あちこ
ちに気遣いを見せてくれていたのです。旅館やホテルの片隅もがら空きのところはありません
でした。目を楽しませてくれる緑が風になびいたり、小さな花壇が人目を引いたり、「花の世
界、砂の天国」といった静かさとはるかさを感じ取れるものだったのです。こうした細部
から見える日本には、どこからの観光客も親しみと暖かさを感じることでしょう。

南京信息工程大学 日本語科 3年 付昱（原文中国語）

中日友好を交流から



大学で4年も日本語を学びましたが、日本を訪れたのは初めてです。日本の文化習俗を体験する機会をくださった主催者の方に感謝申し上げます。

初めて日本に着陸した時、少し興奮していました。宿に到着した時はすでにとっても遅かったのですが、同行者と東京タワーに行きました。夜の東京は静謐で落ち着いている感じがして、とても好きです。

東京での3日間は東京の学生ボランティアと一緒に観光し、両国の環境問題を討論し合っ、料理を作り、歌を歌って、深い友情を築きあげました。

日本の学生に会ってしばらくは、何から話せばよいのか分かりませんでした。東京大学の田村さんと群馬大学の上原さんが、親切に東京の景色の名所を解説してくれて、少しずつなじんでいきました。話題も自然の景観から中日両国の文化と生活まで及びました。日本語専門の学生とは言え、日本については間接的にしか理解がありません。ですが彼らと話していく中で、日本の若い世代の暮らしや気持ちを知ることができ、中国の若者の考えかたを分かってもらうことができました。

様々な要因の影響で、両国の間にはいくつかの偏見があります。しかし東京の学生達と交流する過程で、認識の偏差が存在しているのは恐ろしいことではないと納得しました。恐ろしいのは、本当の交流が不足して、相手を本当に理解できないことです。

沖縄に着いた夜の歓迎会で、沖縄大学の新垣さんと話し合ったことを思い出しました。彼女は中国語ができないので、日本語で少しおしゃべりをしました。彼女は訪日団の一行にとっても興味があるのに恥ずかしがり何話をしたら良いのか分からないといった様子でした。宴会が終わってホテルに戻ると、彼女からメールが来ました。中国人に接したことがなかったので、本当に私達と交流したい、中国を理解するため翌日もあれこれ教えてほしいとのことでした。翌日は沖縄の学生達と海岸でバーベキューをしてお酒を飲み歓談しました。そんな楽な雰囲気の中で歌ったり躍ったりして、最後は名残を惜しみながら別れました。

この8日間の日本の旅で、たくさんの友好的な日本の若者に会いました。お互いに理解しあおうという好奇心がありました。中日両国は地理上で一衣帯水だけでなく、文化の上でも同じ流れを汲んでおり、似たところがあまりにもたくさんあります。沖縄の宴会では、日本の定年退職者ともたくさん知り合いました。皆さん中国語を学んでいるのだそうです。その理由を聞いてみると、興奮しながら「北京や西安、中国のあちこちへ行って、古い神秘や、数千年の文化が伝わる中国を見てみたいから」と答えてくれました。

受賞作品で書いた日本の先生も、最初は中国を見てみたいという気持ちだったのが、結果として私の母校に5年も勤めたのでした。先生は次々と優れた日本語人材を育て上げ、そしてたくさんの学生の心に中日友好の種を蒔いてくれた人です。

その日の宴会では、沖縄の優しいお年寄り達に、中国へ来れば日本語の先生になれますよと笑って話しました。中日友好を促せるだけでなく、中国の景勝地をゆったり見て回ることもできますよと。あるおばさんが感動して連絡先を聞いてきました。中国に行ったら必ず声を掛けると言うのです。中国で両国の交流に余力を尽くしたいとのことでした。

沖縄を離れる日、テレビの取材を受けました。キャスターは「中日両国の友情を、沖縄の青い海と空のように永遠に続けていけるよう願っています」と話していました。

東京の学生と別れる時、歓送会で名残を惜しみあいました。目頭を熱くする人も、再会を約束する人もいました。みんなで連絡先とプレゼントを交換しあって、個別ではあれ友情の新しいきっかけができたと思います。

東京の旅で近代日本の美が体験できたと言うなら、京都と大阪では昔の、沖縄では中日両国文化の結合した美が体験できたと言えます。日本科学協会の中村常務のお話を思い出しました。「日本を代表する富士山に行かなかったのは、また再会するとき富士山で杯を交わすためだと思っています。」

北京空港に着陸した時、日本の学生からメールを受け取りました。「またね、と言ったからにはきっと

また会えます。交友は永遠に続きます。」それを見てふと、両国の関係が厳しいときほどお互いの交流は強化すべきだろうなと思いました。今回の訪問団がアイスブレイカーの役割を果たしていることを望みます。

富士山の麓で再会できる日がそう遠くはないはずだとは私も強く信じています。日本の友人の皆さんのことを考えています。中日友好交流という夢のため、共に努力しましょう。

天津外国語大学 日本語科院生 李钰婧

花は咲く—初めての日本—



時は7月、日本科学協会のお招きにより、笹川杯作文コンクール及び日本知識大会で受賞した私たち一行は日本を訪れました。成田空港へ向かう途中、飛行機が大きな揺れに遭い、何分間も続けて不安定な状況だったため、スチュワーデスまで平静ではありませんでした。初めての空の旅でこんな経験をしたのは思いがけないことでした。しかし、この旅が普通と違うのは全てここから始まっていたのかも知れません。

頭の中には常にあるメロディーが流れています——「花は咲く」です。シンプルな歌詞の中になんと熱い未来への希望や励ましが含まれているのでしょうか。いつか日本の方々とともにこの歌を歌おうと思いましたが、今回の旅ではチャンスを得られませんでした。しかし、歌うまでもなく、中日双方の参加者たちの心の中には、既に美しい花が咲いているのです——友情の花、希望の花、若くて生命力が満ち溢れている花。

東京滞在の初日、団員達はグループに分かれて東京名所を巡りました。案内役を務めたのは、中国大学生招聘事業実行委員会の皆様でした。彼らはボランティアとして、今回の招待のためにいろいろ心血を注いで準備をしてくれました。この精神に非常に感服しています。私のグループの日程は、午前が温泉、午後が浅草観光でした。温泉に向かう途中、遠くから東京タワーが見えました。赤と白が混ざり込んで聳え立っている東京タワー。東京のシンボルであるこのタワーを見て、自分は本当に日本の空気を吸っているのだということに気づき、訳も分からなく少し興奮しました。これからもいろいろと日本らしさを満喫できるよね、と心の中で期待しました。

温泉に到着後、初めての浴衣を楽しみました。引率者の上原さんが親切にいろいろと教えてくれたため、温泉に不慣れな私にとっては助かりました。雑談したり写真を撮ったりして、メンバー達は短い時間で既に仲よくなりました。楽しい温泉の体験を終えた後、浅草へ向かいました。賑やかな境内には観光者がいっぱいでした。正門には、人力車の車引きさんがいました。彼の誘いを受けて、人力車に乗りました。車引きさんはいろいろ紹介しながら私たちと雑談していました。私たちグループメンバーは午前に知り合ったばかりと聞くと、不思議な顔つきでした。

「本当？なんか長く付き合ってきた友人だと思いましたよ。すごく仲が良さそうですね」と車引きさん。

この話は確かにそうだと思います。人と人との「縁」というのは、二種類あると思います。ある人々とは、いくら付き合っても心が寄り添うことはありません。しかし反対に、初対面で意気投合できて、ほんの短い時間ですぐ仲良くなれる人々もいます。正に今回の中日青年のようです。今回別れたら、この先一生会えるチャンスはないかもしれません。むしろこのことを覚悟していたからこそ、双方とも一層今回の出会いを大事にしようと思って、たった一日でとても仲良くなれたのです。「中日友好」は、おそらく既に無味乾燥な四文字ではなく、中日両国国民の心に深く刻まれた願いや着実な行動に変わったと感じました。

名所めぐりが終わったら、夜の晚餐会を迎えました。主催者の大島会長が優しく歓迎の挨拶をしてくださり、団員一同非常に感動しました。

二日目の東京滞在は三つの活動がありました。午前のディスカッションでは、中日青年が環境問題や相手国に求めることについて意見を交わしました。最後の発表を聞いて、各グループとも深く考えた上に結論を出せた気がしました。若者世代の力はこれからどんどん強くなり、この世界に大きく貢献できると信じています。

そして午後の楽しい料理ショーを迎えました。ちなみに、グループのメンバーは既に変更してあります。活動の計画者・中国人学生招聘事業実行委員会の皆様の、訪日団の団員により多くの人々と交流してもらいたいという思いがあったからです。抽選の結果、私のグループは餃子作りになりました。餃子作りが得意な私は興奮して、メンバー達と手分けして作り始めました。中には餃子作りが苦手なメンバーもいましたが、皆の協力のおかげでだんだん上手になりました。実行委員会の皆様の配慮は素晴らしいと思いました。わざわざ協力が必要な活動を準備したからこそ、各グループは素早く団結し、心を一つにすることができました。餃子を作っているうちに、中日両方が一つの目標を目指して頑張りました。なんと貴重な経験だったでしょう。しかし、審査の結果、私のグループはあと一歩で優勝を逃してしまいました。原因は、日本人の味付けをよく知らなかったからです。惜しかったですが、優勝よりもっと大事なものを得ました。それは、活動を通して中日青年との間で結ばれた友情の絆です。

それからは中日POPソングクイズでした。実は、このゲームの際にも新しいグループ分けがありました。しかし、前の料理ショーが楽しかったため、メンバー達は既に名残惜しくなっていました。実行委員会の方々は皆のその気持ちに気づき、そのまま料理ショーのグループでやると決めてくれました。一曲一曲のよく知られている歌の流れとともに、その場の雰囲気も非常に盛り上がりました。私のグループも、まるで前の料理ショーのリベンジを目指すかのように、全員燃して次から次へとクイズに正解していき、最終的に優勝を手にすることができました。非常に楽しかった私たちは抱きあって歓声をあげました。その時、私には聞こえました——花の咲く声でした。そう、花は咲いていたのです。その場にいた中日青年の顔にも、心にも。この花の香りが中日両国国民の心に届いてくれるよう、心の底から願っています。

初めての日本訪問でした。しかし初めてではないのは、中日両国の友情や人の暖かさの経験でした。別れの際、私は涙をこらえてさようならと告げ、他の団員も名残惜しく日本人の方々を見送りました。

それからの五日間も、日本名所を回って、主催者側の至れり尽くせりのおもてなしを受けました。中日民間交流の情熱をしみじみと感じ、両国国民の友好への思いを十分理解することができました。日本へ来ることができて本当によかったです。これからも、友情や希望の花はどんどん咲いていくことでしょう。

ありがとう、日本。また会おうね、日本。

哈爾濱工業大学 日本語科 4年 季 佳琳 (原文中国語)

8日の縁



大阪を離れる前日は2時間しか寝ていませんでした。帰国便の中で途切れ途切れ見ていた夢はこの8日間の断片ばかりで、北京から東京、沖縄、大阪、京都へと回った、心いっぱいの幸せな記憶です。

私は人と人との縁を信じています。訪日団の引率の先生、日本科学協会の先生方、中国の大学生達、東京イベント企画チームの日本の大学生達、沖縄の親切な市民……皆さんが初対面とは思えないほど親しく感じられました。

そっと写真を何枚か見ると、絵葉書コレクションに入れたいような美しい風景、みんなの笑顔ばかりで、8日の旅行の中でできた永遠の結晶だと思います。古い日本の風格を伝える江戸東京博物館、とてもにぎやかな秋葉原電器街、夜空の下きらきらとまばゆい東京タワー……大都会東京は初めて日本を

訪れた私達を大歓迎してくれました。

それから沖縄の青い海の青空、大阪の喧噪、京都の静かな落ち着きを訪ねて回り、色々な角度から日本の魅力を味わうことができました。毎日がイベント満載で、平均5時間弱しか寝ていませんでしたが、むしろ興奮状態が続いてずっと楽しめたと思います。

日本各地の素晴らしい景色より感動したのは、各地の学生や住民の皆さんが中国人に対して親切で友好的だったことです。

東京では慶応大学、早稲田大学の学生と中日の環境問題について激しい討論を繰り広げました。中日の双方の学生がそれぞれ相手国の環境問題に対する自国の見方と提案を出して、両国が協力できる側面について討論するというものです。その後の料理コンテスト、カラオケ大会ではみんなが能力を発揮しました。グルメと音楽に国境はありません。

沖縄では現地で熱心に中国語を学んでいる市民が中国語と日本語のちゃんぽんで交流してくれました。学生よりずっと年上の人も多くいましたが、素晴らしい中国語学習熟を保っている人たちでした。彼らの中国人と中国文化に対する純粋な思いにはとても感動しました。

わずか8日間のうちに異国の友人と知り合い、異郷の風景を味わって、たくさんの感動が得られました。今日の別れは明日の出会いのため。心の奥底でかすかに、この8日間の縁でまたいつかきっと、中国か日本で皆さんに会えそうな気がしています。

中国青年報社 国際部 記者 張蕾



中国青年報社が、去年、公益財団法人日本科学協会、人民中国雑誌社と共に「笹川杯作文コンクール2012—感知日本—」を開催したのは、ちょうど中日国交正常化40周年の時期でした。本コンクールは幸運にも両国政府から「2012年中日国民交流友好年」の一連の活動の一つに認定。心あるすべての人々が、この一年で中日関係が「高速鉄道」さながら速やかに前進すると思っていた。ところが、思いがけないことに、両国関係は尖閣諸島問題で大きく暗礁に乗り上げ、ゴールどころかスタート地点に戻ってしまったのです。

多くの人々が「政冷経熱」ならぬ「政冷経冷」で現在の中日関係を形容するようになりました。200回あまりも中国訪問歴があり、中国と30年あまりの付き合いがある日本財団の尾形武寿理事長にも、今の両国関係は国交樹立以降で「最もよくない時期」と映っているそうです。

8月5日、日本の言論NPOが中国日報社と共同で実施した最新の「日中共同世論調査」の結果を公表しました。それによると、両国の国民が相手国にマイナスのイメージを抱いている割合がいずれも9割を超えています。調査レポートによると、この一年で、両国の国民感情と認識のいずれも悪化し、2005年の定期調査開始以来で最悪の数字であるとのことでした。

そうしたなか、複雑な思いを胸に、「笹川杯作文コンクール2012—感知日本—」と「笹川杯全国大学日本知識大会2013」の受賞者一行28名が7月24日から31日の8日間、日本の青年や人々とふれあう旅に出たのでした。本当の日本を自分の肌で感じようという目的意識が見られました。

両国の若者が共に関心を寄せる環境問題

数年前に日本常駐だった頃、日本人から一番よく聞かれた質問は、「日本のどこがよいと思うか」でした。

日本人は他者からどう見えるのかを気にしているようです。「空気」と口にすると、質問の主は目を丸くして聞き返してきました。少ししてから、かつての大気汚染の記憶を辿ったり、黄砂やスモッグに覆われた風景に思いを馳せたりしたものです。

7月26日午前、日本科学協会の主催する「中日青年討論会」が東京の日本財団ビルで開かれました。討論会のテーマは環境問題です。

基調講演では、日本の環境庁、駐中国大使館経済部での勤務歴があり、東京財団の研究員を勤める染野憲治さんから、中日両国の環境協力についての紹介がありました。それによると、中日両国にはすでに20年あまりの環境協力の歴史があり、1996年に北京で中日友好環境保護センターが設立されたとのこと。双方は砂嵐などの研究テーマで協力を行った実績があります。今年1月に北京で基準を大幅に超えるPM2.5のсмоッグが発生したことに言及すると、染野さんは1968年の東京の写真を示しました。写真では、黒々とした空気の中で建物は輪郭しか見えず、現在のсмоッグ発生時の北京とかなり似た状況でした。日本は過去のある時期、経済の発展だけに関心を持ち、環境保護をないがしろにしたため、1955年のイタイタイ病、1956年の水俣病、1960年の四日市喘息といった深刻な公害を招きました。その後、環境保護の重要性が理解され始め、被害者達は1960~70年代から公害問題に対する訴訟を始め、公害反対運動を起こしました。日本政府が立法による環境公害問題の解決を図ったのはその後です。今や東京の空気は大幅に改善されています。

かつては東京もそうした痛ましい経験をしているのです。記者自身、日本の空気の質は優れた自然条件によるものと思っていましたが、人的要因のほうが主となっているということをはっきりと理解することができました。

討論会の参加者54名はグループに分かれて環境問題を討論し、その結果を発表しあいました。各グループの発表内容をまとめると、環境問題について中国側の参加者が共通して気にしているのは、自国の水質汚染、土壌汚染、PM2.5指数、森林面積の減少が健康に及ぼす影響で、日本側では放射能、資源の再利用、地球温暖化といったより世界規模の問題により関心が寄せられていました。

これらの問題はどのように解決すべきでしょうか。共通してみられた考えは、環境関連の立法強化、地方政府/公共団体の理念を経済重視から環境との両立にシフトさせること、企業の社会的責任感を涵養すること、環境意識の普及、青少年に対する環境意識の強化などでした。

環境分野で中日両国が協力する方法についての認識は、日本には深刻な公害の経験があり、近年には放射性物質の漏洩事故があったため、関連する経験による経験と先進的な技術を中国に提供できるというものでした。また双方は、現在の日中関係は政治上の関係が民間交流にも一定の影響を及ぼしているものの、環境分野での協力が中断されるべきではないとの意見でも一致していました。

沖縄人の「中国コンプレックス」

7月27日の昼ごろ、沖縄本島的那覇空港に着陸。空港内では年間を通して蘭が飾られており、訪れる人々を歓迎しています。

沖縄はあまりにも多くの出来事が積み重なる地方です。訪日団の旅程からもはっきりと見ることができました。

1日目、古代琉球王国の皇宮の首里城を見学。中国とあまりに深い縁を持つ場所です。沖縄と中国との縁は、今でも分かりやすく痕跡が見られます。例えば、黒い肌、大きい目で中国人と容貌が似ている沖縄の人が中国人に示した友好と親切さには、訪日団の一同が感動しました。他の例では、沖縄国際大学、琉球大学の学生、中国語愛好者と訪日団の交流会を主催した、中国教育文化協会の陸丹鳳先生の紹介によると、沖縄市教育委員会の仲松齡子会長は、去年から現地の小学校に中国語の課程を取り入れているそうで、また市では、1人あたり6万円（約3800元）を補助し、2週間の短期中国留学を奨励することが決定されたそうです。

訪日団の沖縄滞りで意外な喜びとなったのは、豊見城市でのドラゴンボートレースに参加できたことです。団員達は不慣れな操作でドラゴンボートを漕ぎながら、沖縄の青い海と空を満喫し、チーム名に謳う「追い風」や「猛竜」といった覇気はどこへやらの陶醉ぶりでした。

美しい沖縄のビーチで行われた現地の若者との焼き肉パーティーも、訪日団員達には忘れられないひとときとなりました。沖縄大学の王志英先生が中国語を学ぶ学生 30 数名を連れていらしたのです。交流の後、日本の学生は、中国の団員のすばらしい日本語能力とコミュニケーション能力に対して心から賛嘆し、今後いっそう真剣に中国語を学んでいきたいと話していました。

「文化は水のようにお互いを潤す」

訪日後に改めて「日中共同世論調査」の結果を振り返ると、次のような記述がありました。中国の回答者が日本に対して「良い印象」を持つ最大の理由は「科学技術レベルが高い」（58.2%）で、「仕事熱心でまじめ」（54.4%）と「日本製品の品質がよい」（49.4%）が続いています。日本の回答者が中国に対して「良い印象」を持った最大の理由は「古代の文化と歴史に関心がある」（43.8%）で、「周囲の留学生や民間交流に従事する人を含め、知り合った中国人の影響で」（32.3%）と「中国が世界の大国として国際社会で活躍しだした」（22.9%）が続きました。

今回、訪日団のメンバーが日本で自ら経験したことで、「中国が世界の大国として国際社会で活躍しだした」点に深く感銘を受けています。一同が共に経験したことは、愛と恨みの間にはたくさんの豊富な感情が、白と黒の間にはたくさんの鮮やかで美しい色があるので、自分の目で見つけ、肌で味わい、フェイストゥフェイスで交流すれば、そのすべてが可能になるということです。

7月26日の中日青年討論会で、笹川杯の作文コンクール、知識大会のは特別賛助者である日本財団の尾形武寿理事長が、政治上で最も問題が生じやすいのは得てして隣国なので、中日関係の改善には皆さんの力を借りなければならないとおっしゃっていました。できる限り自分の目で相手の国を見るよう勧める言葉もありました。

作文コンクール受賞者訪日団の団長、中国青年報社の李雪紅編集委員は、今回の訪日の過程で、中日両国の若者の溢れる青春の力と国に対する責任感を目にするが多かったと話しています。若者同士の交流は、理解を促し、好感を増すだけでなく、中日協力や中日関係にもポジティブな影響があります。

日本科学協会の大島美恵子会長も、中日関係のよくない今、両国の青年が率直で誠意ある対話を共にする機会は貴重で、中日両国の青年が良い友達になれることを望むとおっしゃっていました。

8日間という交流の時間とても短く、訪日団員は日本に対して多分あまり全面的に感じ取ることはできなかったでしょうが、交流を通じて、知っているようで知らなかった風景を目にして、様々な日本人の姿を知ることができたかと思います。また、あまり政治の痕跡を見ることはありませんでした。もしかすると皆さんが心の底で、中日の青年の交流と民間の交流を通じて、中日関係の苦境に希望が見えてくるきっかけを見つけないかと願っているのかもしれない。

日本科学協会の中村健治常務理事は、ある漫画家の話の話を引いて、作文コンクールと知識大会そして訪日団の価値と意義を説明できるかもしれないとおっしゃっていました。「政治は火のようなもので、燃える時は熱く消える時は冷たいが、文化は水のようにずっとお互いを潤し続けるのです」

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

東華大学 日本語科3年 張 哲琛（原文中国語）



関西空港から上海への帰国便に乗っていると、脳裏を突然『ノルウェイの森』の一幕がよぎりました。小説の初め、主人公のワタナベは飛行機に乗っており、昔のことで暗然と意気消沈していたのです。それと似た情景にいる私は、8日間訪れたこの地への名残惜しさを胸一杯でした。

日本の友人達

この8日間、さまざまな理由があったとは言え、他のメンバーほど積極的には参加していませんでした。それでもたくさんの善良で親切な日本の大学生と知り合えたのです。

それまでも何度か日本大学生と交流する機会 was ありましたが、これほど感慨深かったことはありません。特に東京で知り合った委員会の各位には何度お礼を言っても足りないでしょう。心を込めて用意してくれたプレゼント、旅程、プログラムには心の底から感動し敬意まで覚えました。大型イベントを企画したことがあれば、これだけの規模で実施する難しさがどれほどのものか分かります。それでも委員会の皆さんは疲れも苛立ちも全く見せませんでした。ずっと満面の笑みで接してくれたので、心から歓迎されているという感覚を味わえたのです。

討論会の当日、中国の反日勢力は本当に報道されているほど凶暴なのかいと、ある日本の友人に質問され、一瞬、言葉に詰まりました。こちらも同様に、一部の日本人は中国を敵視していて、日本を訪れる中国人を疫病神扱いすると聞き及んでいたからです。しかし今回の交流で確信できたことが一つあります。メディアは政治的な立場から報道するし、隣り合う両国は各自の利益に動かされるので、政治上で絶対的な平和に到達することはできないということです。しかし民間での交流は、こうした政府同士の公然なものをさておいて、最も純粹かつ友好的な態度で心と心を通わせることができます。暮らす国、育った環境が違うため、中日の若者には考え方にきっと違いがあることでしょう。そうした違いは怖くありません。怖いのは、そうした違いを無視して、自分が正しいと思うものを相手に押しつけ、無理に従わせようとすることです。そんな強迫的な態度だからこそ平和が乱れるのです。

また特にお伝えしておきたいのは、今回の交流に参加してくれた日本の大学生は、その多くが中国の文化に興味を持ってきていることです。おかげで話題は一気に豊かなものになりました。もう「中日の将来は君たちにかかっている」と言われてもむなしさを覚えることはありません。

日本の情景

大学二年になって突然、日本の流行文化に興味を湧きました。日本語を習って以来、さらに日本へのあこがれが募っていたのです。今回は初めての日本でした。何度となく写真や映像で見てきた「幻」日本が、遂に本当の姿を見せてくれたのです。

まっすぐに清潔な道路、緑豊かな通り、ネオンきらめく繁華街、スーツ姿の通勤族……何もかもが魅力に溢れていました。

東京での最後の夜、同行していた親友と東京タワーまで散歩しました。夜の港区は適度に涼しく、東京タワーがビルの隙間から先端だけ見えていたので、その先端を目指して歩いたのです。時折ぬるい風がゆっくりと吹き抜け、思っていたことを自然に語り合えました。かなり大回りをしつつやっとのことで目的地へ辿り着いたのですが、かつて何度となく携帯電話の待ち受けにしていた東京タワーが目の前に現れたその瞬間、日本語を習い始めた最初の頃の衝動と勇気がよみがえったように感じました。夜に

光を放つタワーは、心に何か抱き続けることを暗示しているかのようでした。揺らぐことなくしっかりとそびえ立ち、きらきらと。以前 2 度、交換留学の面接試験に落ちたことを思い出しました。そしてその後の惨めだった自分も。日本語の道を捨てようかとも思いましたが、考え直してみるとここ何年も日本語と日本文化を学んできただけでなく、他の何もかもなおざりになると気付いて余計に不安になっていました。しかし目の前のタワーは幾多の風雨に耐え、今や地上波の送信機能さえスカイツリーに取って代わられたというのに、静かにそこに立って輝き続けているのです。この紅白の交互になった巨人を眺めて、私は初心を見つけ出しました。

中国のチームメイト

私は今回の訪日団で最年少でした。たくさんの先輩を前に自己主張するのは大変でした。ですが、志を同じくする親友も見つかりました。大連外国語学院の汪逸晨さんが、私達の東華チームと「北方の四匹狼」ユニットを組んだのです。実は 4 人とも純然たる南方の人間なのですが、誤解を招くようなユニット名を付けたところがポイントでした。

8 日間を共にしたパートナーは忘れがたいものです。旅行中、私達は自分の身に起きたことを話し合いました。どうしてだか分かりませんが、初対面で意気投合し旧知のように付き合えたのです。

沖縄での 2 日目、首の具合が悪く丸一日話すことがありませんでした。夜ホテルに戻る前、パンダ（汪逸晨さんのニックネーム）が近くの商業施設まで付き添ってドラッグストアを探してくれました。商業施設の 1 階は食事客でいっぱいだったので、人波をかき分けながら、私は焦っていたので早足で歩き、パンダはその後ろに続いて狭い通り道を歩きました。明らかに独りでもできることでしたが、彼女がずっと付き添ってくれたことで、心がとても温まりました。

わずか 8 日間の旅行で純真な友情の収穫があり、とても感激しています。

大事な思い出を言葉に表すのは難しいものです。日本科学協会の顧先生、宮内さん、吉田さんに最も誠実な謝意を捧げます。中日の青年に交流の基盤と機会を設けてくださった日本科学協会と、そのために努力してくださった皆様にも感謝いたします。

友情を大切に。中日は必ず平和になります。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

東華大学 日本語科3年 李婧雄（原文中国語）



2013年の7月末、無料で日本を旅行する機会に恵まれました。わずか8日間ではありましたが、この旅でそれまでなかった経験ができました。そもそも集まるはずのない皆さんと知り合っ。異国の空気を本当に感じることもできたのです。

スケジュール上、各都市での滞在時間はやや短かったのですが、その土地に漂う雰囲気は確実に感じ取れました。東京のにぎやかさ、沖縄ののどかさ、大阪の熱さ、京都の優雅さといった空気感がはっきりと独特だったことは忘れられません。

東京という国際化した大都市は、上海と同じ「車輪の上で動くような」速い生活リズムでした。ここでの滞在時間が最も長く、相対的にゆっくりできたおかげで、欧米先進国の都市とは違うその魅力のありかをよりよく知ることができました。通りは人波が揺れ動き、地下鉄路線は複雑で、昼夜止まることなく、しかし何もかも整然として乱れがなく、誰もがルールを守っていました。公共の場所であっても、他の人の空間を侵さないよう慎重に振る舞っているようでした。最も印象深いのは地下鉄の車内です。文庫本や小さく折った新聞を真剣に読んでいる人が多く、ほとんど誰も話をしていませんでした。知り合い同士が話をする場合でも声を抑え、他の人に影響しないようにしていたようです。

東京の人はこうして物事を済ますので、東京全体の人情味がかなり薄くなったと言う人がよくいます。しかし私はそうは思いません。発達した都市が発展を続けるには、市民が理性的な態度と冷静な頭を保たないと、大きな財産を目の前にして方向を見失ってしまうのでしょうか。様々な枠組みを守るという状態の維持こそが最も基本的な保障だと思うのです。それに、彼らの人情味も実際に薄れてはいません。

東京で二泊目の夜、一人でスーパーに行こうとして地下鉄の駅を出たら道に迷ってしまい、都合の悪いことに目的地の地図も忘れてしまっていました。通行人に道を聞くほかなかったのですが、ちょうど通りかかった年配のご夫婦が親切に教えてくれて、最終的には直接スーパーまで連れて行ってくれたのです。ひたすらお礼を言うしかできなかったのですが、ご夫婦は手を振るなり自転車まで立ち去ってしまいました。東京の魅力は、きらめく明かりの下にまだゆっくりと流れている温情にあるのかもしれない。

次に訪れた沖縄は、東京と正反対の街だったと言えるでしょう。町並みは少し寂しく、たまに見る通行人も南国の日差しを楽しみながらのんびり歩いているようで、時間の流れまでゆっくりしているように感じました。「駆け足」の速さで沖縄を感じ取ったことが惜しまれます。しかしその美しい景色は深く脳裏に焼き付いています。広大な空、深い海、水平線の景色では二種類の青が一体に溶け合い、見れば見るほど吸い込まれるような明るく純潔な眺めでした。この純粋な環境で育った人も非常に温和で善良で、のんびりとして満ち足りている感じがしました。

28日の朝、より良く沖縄を体験するため、早起きしてホテルの近くを散歩してみました。静かで美しい景色を目にして、思わず携帯電話で写真を撮りだしてしまいました。途中で通りがかったおばさんに観光客かと聞かれ、少し言葉を交わすと、「沖縄を十分に楽しんで行ってね」と微笑んで彼女は去って行きました。驕らず焦らず、自分の暮らしを楽しむと同時に、相手が住民かどうかに関わらず、こうした態度でもっと多くの人に接するようになりたいと思いました。沖縄の人を尊敬するのは、彼らが海のような性格の持ち主だからです。

その後の大阪と京都は、時間制限のため、あまり接触することができなかったのですが、一点だけ強く感じたのは、同じ関西地区にあってこれほど近いにもかかわらず、両地がまるで違った雰囲気だったことです。大阪は市井のにぎやかさだと言うなら、京都は貴族の優雅さです。両者の動静が際立ってい

たことで、今回の旅がより多彩なものになったのだと言えます。

日本各地の風情より忘れがたいのは、この 8 日間、訪日団と共に過ごした時間と、深い友情をはぐくめたことです。

忘れられないのは、初めて触れた海がみんなと一緒にだったことです。朝の明るいうちから日の入りまで、静かな砂浜の貴重な景色を鑑賞する一方で、存分に青春を謳歌しました。生まれて初めてのドラゴンボートレースでは、海のすぐそばで、力の限りを尽くして舟をこぎ、かけ声に合わせ、勝ち負けを気にかけず、前進することだけ考えていました。

ホテルの 4 人部屋で、買ったばかりの桃 1 つを分け合ったことも忘れられません。一口ごとに幸せな顔になり、感想も直接的な「足りない」から「死ぬほど美味しい」まで変わりました。桃が卒倒するほど甘かったのか、4 人で盛り上がる楽しさが言葉にできなかったからなのかは分かりません。

もっと忘れられないのは、日本の大学生達との交流で友情の火花が散ったことです。国籍こそ違っても、みんな何かしら共通点を見つけることができ、国境を忘れて楽しく語り合うことができました。たまに相違があっても、かえって絶え間ない交流する中でそうした違いを正視すれば、双方に対する理解が深められるのかもしれない。

最後に、日本科学協会の心のこもった手配と、交流を持ってくれたすべての個人や団体の協力に心から感謝を申し上げます。皆さんがいなければ今回の訪日イベントは成立せず、この 8 日間にこれほど深く日本の風土と人情を感じ取ることもできなかつたらろうと思います。

短い日本の旅で学んだことはたくさんあります。自分を豊かにするには、自ら足を踏み出し、より多くの人と交流する勇気が必要だと分かりました。もう国の陰に潜む井の中の蛙にはならないつもりです。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

東華大学 日本語科3年 焦蘇揚 (原文日本語)



八日間の訪日からいっぱい収穫しました。日本財団と日本科学協会のみなさんに感謝いたします。

今回は東京、沖縄、大阪そして京都に行きました。この四箇所は一度観光者として行きましたが、団体の見学で行くのは感覚がずいぶん違います。今回の訪日は人と人の交流を重視したからこそ、新しい日本を見せました。

東京では、優秀な大学生に付き添われて、この発展した都市をもう一度認識しました。そのあと、沖縄ではこの町の重い過去と今の現状を知りました。最後は関西に行きました。大阪の繁華さと京都の落ち着いた佇まいはまた、別の風情でした。

この八日間、日本の大学生の風貌が一番印象に残りました。彼らは私たちを受け入れるために、5月からも既に準備していました。東京での二日間は彼らの企画のおかげで、充実していました。陽気で、優れている学生との交流を通して、勉強させました。自分も更に頑張らなければなりません。

沖縄のビーチで美しい風景を堪能し、バーベキューし、ハーリー大会も参加しました。夏らしいことをいっぱいしました。私は男性の浴衣も試着しました。とても面白かったです。美味しい当地の果物も食べて、いい思い出になりました。沖縄はただ風景が綺麗なところではない。首里城を見学し、その歴史を知ることも大切です。沖縄の人々と交流して、彼らは心から太平な世を望んでいることを感じました。

大阪に着いた瞬間、工業化の進んだ町という感覚に直面しました。それに対して、京都は大阪を見守っている賢者のように、傍に立っているような感じでした。古都の佇まいに惚れました。最後の一夜は小雨が降りました。これは帰らせたくないためか、それとも私たちの帰りたくない気持ちを受けたのでしょうか。

短い時間でしたが、記憶に残ることがたくさんでした。今回の訪日を通して、中日交流のことも新たな認識をしました。今回の訪日は遊びだけで終わらせない。いい経験として、自分に成長させたいです。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

安徽大学 日本語学部 4年 楊瑞雲 (原文日本語)



今回は日本に行き、全部ではないですが、日本のいろんな面を見てきました。一番印象深いのは東京の高いビルではなく、大阪の賑やかな繁華街ではなく、沖縄の青空でもなく、日本の大学生の熱意と努力です。

今回の訪日旅行で最初に行く場所が東京だと聞いた時、正直に言えば少しがっかりしました。私は東京に行ったことがありますし、真夏に東京を回るなんてどこが面白いんだと思ってきましたが、今回はいろいろと楽しめました。それは東京が涼しかったというわけではなく、東京の大学生に感動しました。松尾一志さんを始め、中国人学生招聘事業実行委員会のみなさんは訪日旅行の前からメールで私たちの意見を聞いたりして細かい計画を作成してくださったそうです。中国人の私から見ればややこしいなあと思われるほどの細かい計画です。しかし、その「ややこしい」計画を作った皆さんのおかげで、東京での時間は毎日充実して過ごせたのです。25日の夜、その日のイベントが終わって、みんな普通にホテルのロビーで解散した後、私は友達と東京タワーを見に出かけようとして、またロビーで実行委員の皆さんの姿を見かけました。26日の交流会や料理大会の準備をしていたみなさんの姿はなかなか私の頭に消えず、それに感動しました。26日のカラオケ大会の時も、司会者の津久井さんは上の服を脱いで「中国」の書いたシャツをみんなに見せた時も、「雰囲気盛り上げるために、どれだけ工夫したんだろう」と思いました。その熱意と努力に答えるために、私は精一杯楽しんでいました。

それに、みなさんの努力ぶりに感動しただけではなくて、自分自身に対してひとつの質問が生まれてきました。もし逆の立場だと、相手に満足させるような計画を立てられるのか、また、その計画を実行できるのか少し疑います。私たち中国人の学生は良く「勉強熱心」と言われますが、勉強に時間を使いすぎ、行動力に欠けるとか、チームワークがうまくできないとか、こういうような問題も出てくるのではないかと思います。今回の訪日旅行がきっかけで相手とうまくコミュニケーションをするために、私達中国人の学生はこれからどうやって自分の能力を向上させるのにどのようなことをすればいいかというのも一つの課題だと思います。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

安徽大学 日本語学部 4年 徐龍鳴（原文中国語）



2013年7月24日、笹川杯日本知識大会と作文コンクール受賞者の訪日イベントが行われました。まずは今回の旅程をご紹介します。7月24日に東京に到着して2泊、27日に沖縄、29日に大阪、30日に京都を訪れ、31日に関西国際空港から帰国しました。

日本財団、日本科学協会、中国人民大学の催した今回の知識大会にはとても感謝しています。幸い大会で入賞し、貴重な訪日のチャンスを得ることができました。日本科学協会の顧先生、宮内さん、吉田さんが道中の配慮をしてくださったこと、また中国学生招待プロジェクト実施委員会のボランティア各位と沖縄のボランティア各位にも感謝しています。皆さんとの忘れがたい一瞬一瞬はずっと心に残っています。

今回の日本旅行では、日本文化を知ると同時に、日本の大学生の親切さと誠意を肌で感じることができました。東京での日程では、中国学生招待プロジェクト実施委員会のボランティア各位が一連のイベントを組んでくれました。心を込めたイベント準備をしてくれたおかげで、このイベントがより有意義なものになったと思います。この旅のメインは体験でしたが、日本文化の体験よりも、日本の学生の皆さんとの交流のほうが深く印象に残っています。中日両国はかねてから深い歴史的つながりと幅広い共通の利害を持っており、みんなが友好的な態度で共に発展することを期待しています。実は最初、内心では少し心配でした。前にネットや新聞で、日本の中国に対する友好的でない態度や観点についてたくさん見ていたからです。しかし数日間のふれあいで心配は完全に解消されました。今回のイベントで出会った日本の皆さんは友好的な交流のため来てくれた人ばかりなので、言葉の違いが壁になったとは言え、付き合ってみるととても親切で楽しいと感じました。

今回の日本旅行は7泊8日で日程がぎっしりでしたが、多くのものが得られたと思います。

一つは、外国語の重要性を強く認識したことです。言葉は人と人を結ぶ架け橋なので、言葉が通じないと交流しようにも障害が生じ、誤解も避けられなくなります。ですが、幸い数人のボランティアが中国語をある程度学習していたので、日本語での交流がぎこちなくても、彼らが喜んで中国語で接してくれました。もう一つはチーム意識です。特に沖縄で参加したドラゴンボートレースでは、トーナメント戦でなかったものの、日中の選手がともに汗を流し、一つのチームとして前へと進んでいきました。中日両国もドラゴンボートのように道を切り開いて、歌声も高らかに猛進していけたらと心から望んでいます。

今回の旅行に参加してたくさんの方々と知り合えたこと、お互いに率直で誠意がある交流ができ、学び合えたこと、同い年の外国の友人達の違う生活を知ったことを嬉しく思っています。今後もメールで交流を保ち、生活中的出来事や両国文化の理解について、やりとりを続けていきます。今回のイベントは円満に終了しましたが、心残りもたくさんあるので、機会があればもっと長く日本に滞在して、もっと十分に日本文化を知り、中日交流を促進しようとも思っています。日本の皆さんに中国を理解してもらって、中日両国の友好の発展推進に力を尽くします。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

安徽大学 日本語学部 4年 周娟 (原文日本語)



今回はとても光栄なことに日本科学協会に招聘されて、八日間の訪日活動に参加した。これは私が初めて日本に行って、初めて自分の目から今まで本とテレビだけで了解できる島国を観察する経験だった。

聞いた通りに日本は本当にきれいだ。青い空と透き通る海は心を落ち着かせ、溢れた緑は真夏の季節に涼しさを感じさせた。でも、私にとって、今回の訪日に一番深い感触は、美食でもなく、美景でもなく、日本人の熱情と素直だった。

尖閣列島事件以来、中日関係はもう谷底に落ちそうだ。それで、その後の様々な政治事件が重なって、中日は今一触即発の状態になったと思っていた。だから、日本に出発前に、日本人に冷眼と差別をされるかもしれないと心配した。でも、事実はこのような心配は余計なことだと証明した。私たちは日本に滞在期間に、ずっと日本人から熱心な招待と手伝いを受けた。東京に観光している期間、慶応義塾大学、早稲田大学などの大学の学生たちは、私たちの訪日のため、夏休みを放棄して、多い時間と精力をかけて観光スケジュールを設計した。また、ボランティアのガイドをして、東京の各名所に連れていってくれた。沖縄に観光している期間に、私たちは地元の中国を勉強している日本学生と交流して、一緒に潮風がそよそよ吹いているビーチでバーベキューをした。関西に観光している期間、私たちは道をあまり知らないのによく通行人に道を尋ねた。歩みを急ぐサラリーマンでも、のんびりと散歩しているお婆さんでも、ビルの守衛さんでも、コンビニのレジスターでも、聞いたら必ず辛抱強く詳しく説明してくれた。ある時さらに手で簡易な地図を描いてくれた。そういう時に、思わずに本心から「ありがとうございます」と言い出した。

沖縄に行った時に、二人の日本人の友達が私たちを連れて米軍基地前の、若者の町と言われる繁華街にドライブに行った。途中、私たちは色々喋った。驚いたことに、沖縄人の頭には、中日関係はそんなに悪くないと思われている。中国国内の大規模な反日活動とか、日系車を破壊した、なんか全然知らなかった。政局はどう動揺しても、日本国民の心は依然として素直だ。ある政治家の言動は平民の意志を代表できない。日本の平民たちは平和と中日友好を切望している。同時に、私たちもある誇張した記事に影響されて、全日本人を恨んで、勝手に頭の中に犬と猿のような日中関係を構想したことがあるかと反省しなければならない。

今回の訪日活動のおかげで、日本人民は中国人と中日関係についてどう考えているのか了解した。八日間は本当に短くて、全ての日本を見られない。でも、私がこの青い海に囲まれる国を愛していさえすれば、必ずまた来るチャンスがあると信じている。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

北京郵電大学 日本語科 3年 袁姝 (原文中国語)

いつかはその地に辿り着く



このタイトルは唐代の詩人、張祜の『破陣楽』の最後の句「千里を行くを辞せずんば路は遠けれど、いつかはその地に辿り着く」から拝借しています。苦難が多く長い道のりを恐れなければ、いつかは思ったところにたどり着けるという意味です。日本への旅そのものは幸運の賜物で、しかもたくさんの風景に出会い、たくさんの親友に知り合えたので、自然と心に決めました。道のりは長くても、もう一度きちんと会いたいと。

東京の町並みはどう表現しましょうか。きれいでよくできていて、道の両側に立つ建物はラインがくっきりとしていました。小さく切り取られてはいても空は青く、日本のドラマか映画の舞台に立ったように錯覚しました。目に入ったカフェもよくできていて、明るくオープンな中に落ち着きがあり、まるで自由な箱庭のようでした。人々の動きが慌ただしく地下鉄が忙しく込み合っている様子から、東京の圧力とリズムにはそう簡単にはついていけないと分かります。

しかしその一方、都心部にある新宿御苑は広く懐を開いており、色濃い緑が都市の文脈に溶け込んでいました。静かな園内を歩いていると、にぎやかな日本橋を思わせる一角に茶室があり、しばらくいると、沈黙の力がしみ込んでいました。墨のしぶきを感じるような勢いのある「滝」の字が飾られた床の間を前に、姿勢を正して古い茶道具を鑑賞し、互いに礼と微笑みを交わし、ほろ苦い抹茶の香りを味わいました。炎天下にありながら、湖南の地にいるような気分で、涼やかな風を感じました。

茶室の外では手が届くほど近くに、慌ただしく明滅するバーのサイン灯が。こうした溶け合う力というのが東京についての第一印象でした。

東京で二泊目の夜には、目頭を熱くするイベントがありました。イベント実行委員の皆さんがとても素晴らしく、初日の東京観光ツアーで皆さんと仲良くなれました。中には中国留学経験者や、共通の知り合いがいる人まで。まさに縁は異なるもの。その時の驚きと喜びは今でもありありと目に浮かびます。ずっと私達に気を遣ってくださっていた顧先生のお話によると、皆さんは準備に2か月以上もかけてくれたのだそうです。何から何まで完璧でした。そして多彩な友人達をイベントに引き込み、中国の学生と交流してくれたのでした。また、日中に付き添ってくれていたことは言うに及びませんが、夜に出歩いていて明け方近くホテルに戻ったところ、皆さんは1階のロビーでまだ打ち合わせや支出の突き合わせをしていました。

料理コンテストや流行歌の歌合戦など尽きることがないアトラクションの数々に、その気遣いの細やかさと創意工夫を感じ取ることができました。その夜に歓迎ビデオが放映されていたとき、『東京へようこそ』の歌が響くと、皆さんの礼儀正しい姿や笑顔を振りまく様子が映り、いろいろなぬくもりがスクリーンから伝わってきて、世界と抱き合っているような気分になりました。私達はこうしたあれこれに感動して「泣けるよ」(もう泣き出してしまいそう)になりながら、涙を堪え笑顔で最後まで参加していたのです。

連絡先を交換したので、その夜には写真と挨拶がメールで届いていました。ぎこちない日本語でお礼を書きながら、本当に貴重な友人達だから一生大事にしたいと思いました。

かつて「一期一会」という言葉を学んだ時すぐ気に入りましたが、まさにこの機会こそ、それを実感できる絶妙なものでした。再会できるかどうかは誰も知りませんが、今回の出会いで誰もが後悔のないよう力を尽くしていたのです。結果、授業で習ったこの言葉を、実感として復習できたのでした。

そうした気持ちを胸に、澄み切った沖縄の海と空を目にしました。東京のボランティア各位が精密に順序よく働いてくれたと言うならば、沖縄でのイベントは活発でのびのびしたものだったと言えます。知り合ったばかりの友人がメールで沖縄を紹介してくれたのですが、本州ほど名勝古跡はないけれど「それなりに楽しめます」（沖縄ならではの味わいがある）とのことでした。

午後の半日ビーチを裸足で駆け回り、舗装道路の熱さに大声を上げて、子供に返ったようにのびのびと遊びました。ドラゴンボートレースに参加したのは初めてで、みんなリズムが合わずばたばたしました。なかなか感覚が掴めず、レースの終盤にやっと息を合わせゴールに着いた時には他チームをうらやむほかありませんでした。初めて浴衣を着て、よろめきながら海辺をぶらつくと、目に入ったのは良い景色ばかりでした。全てが芸術映画のワンシーンのような心ときめく美しさで、それでいて自然だったのです。

翌日に平和祈念資料館を見学しなかったら、私は沖縄を半分も理解しないまま賛美するばかりで終わっていたかもしれません。同館は1945年の沖縄戦で犠牲となった「ひめゆり学徒隊」を追想するための記念館で、とても多くのことを考えさせられとても心が痛みました。

館内で放映されていた記録映画がとても印象に残っています。完全に聞き取ることはできませんでした。が、戦争経験者の語りに触れると、一言一句に当時の血なまぐささや残酷さ、出口の見えない救いのなさが感じ取れました。彼女たちが身を寄せる横穴に米軍のガス爆弾が投下された惨状の様子や、先生の「ここで甘んじて死ぬのですか」という激励に言及されたときのショックはとても言葉では表せず、聞いていてただただ涙が出ました。

記録映画の最後では、館内200名あまりの犠牲となった女学生の遺影が一つ一つ映し出され、厳かな音響効果の中で数十年の流れが示されていて、見終わると自分で現場を見学したように感じました。

一枚一枚の写真に添えられた氏名や身分などの定型的な紹介文のほか、学友による「無口で堅実」といった犠牲者の説明が添えられているのが目に入りました。その時、何も知らずぼんやりとしていた私ははっとして気付かされたのです。一人一人の犠牲者はみんな年頃の女の子で、最もすばらしいはずの青春の中この世を去ったのだと。ひめゆり達は私達と何も違いません。戦争がすべてに残酷なラベルを刻みつけ、その年を最も暗い時代に決めつけたのです。

年配の館長が私達の間立って、心から「もう二度と戦争がないことを望んでいます」と声を掛けてくれました。多くの人が黙って涙を拭いているのが目に映りました。多分その瞬間に思っていたことは同じなのでしょう。無関係な立場から話を聞いたのではなく、友達のように気持ちを同じくしていたのだと思います。できる限り戦争を知ることから、できる限り戦争を防いでこそ、彼女たちの死が意義あるものになるのです。

それから複雑な気持ちと期待を胸に、私達は関西を訪れました。目的地は大阪と京都です。さまざまな歴史のあるこの地はもっと長い時間をかけて味わう価値があるので少し心残りでした。しかしわずか8日間です。この旅程のおかげで最短時間でうすうすとは味わうことができたのだと思います。心残りがあることは再会の動機ではありません。旅行とその間の生活で、実にさまざまな側面を体験することができました。今後は機会を作れるよう努力して、もっと長い時間をかけて、もっと色々な視点から、もっと新しい体験をしたいと思います。

最後の歓送会では、みんなで乾杯して楽しく飲みました。日本科学協会の中村理事がわざわざ駆けつけ、一人一人と杯を合わせて、最後にほろ酔い顔で「中日友好万歳！」と高らかに一声。酔っ払った学

生団員が中村理事と抱きつくように「われわれは兄弟だ！」と応じました。その瞬間は感動的なものではありませんでしたが、これほど深い人と人の絆を見たのは初めてです。

文中で書き切れなかった名残惜しさと再会への思いを詩に綴ってみます。

本当に、きっと、またお会いしましょう。

醉短歌・离京都

振衣散策醉邻家，鴨川桂月惜岁华。
数日谈笑酬知己，一纸诗怀寄烟霞。
满座攒杯身不老，离城再许会清嘉。
千里不辞行路远，时光早晚到天涯。

京都に酔いて

酔いに任せてほとぼり歩き	鴨川・桂に月日を惜しむ
言葉を笑顔を交わした友よ	霞に寄せてこの詩を贈ろう
若くあろうと杯を交わし	離れてもまた会う時は来よう
道のりは長く辛かろうとも	いつしかその地に辿り着くまで

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

北京郵電大学 大学院1年生 唐菲（原文中国語）

初めての日本旅行



8日間の日本旅行はいつの間にか終わってしまい、思ったことを書き残そうとはしているのですが、まずは初めての日本旅行を記念して以下に書いてみようと思います。

今の気持ちを一言で表すなら、感謝の二文字しか思いつくものはありません。日本科学協会の先生方、日本の大学生ボランティア、各地のガイドの皆さん、各地の平和を愛する皆さん、ドライバー、……感謝する人、事、物が本当に多すぎて、また感謝の2文字でまとめていいものかも分かりませんが。

わずか8日間でしたが、日本を代表する4地区である東京、沖縄、大阪、京都を回ることができました。各地から受けた印象は全く違うものでした。

繁華な東京。初めて見る東京では、人々が慌ただしく行き交い、まるでタイムレースのようでした。林立する建築物は言うまでもなく、車の往来が盛んな大通り、何もかもがぎっしりとした感じで、それでいてとても秩序がありました。この点はどこでも見受けられたので、日本の国民気質と無関係ではないのだらうと思います。ここで接触したたくさんの日本の大学生ボランティアは、ものごとの処理能力に優れ、人や物事に接する態度もよく、とても深く印象に残っています。感動しただけでなく、震撼しました。

静かな沖縄。沖縄は訪れた中で最も好きな場所です。本当に何か神秘的な力があるため、自然と感動して、心が温まる感覚が沸き返り、何とも言葉に出来ません。風景も人もそうでした。沖縄の海はエメラルドグリーン、空は紺碧で、人々は親切で平和を愛する人ばかり。ひめゆり平和祈念資料館の館長には更に心を動かされました。残酷な戦争の中で幸い生き残った人は誰もが、戦争に対して一般人より深い感銘を持っています。館長からその言葉を聞いたとき、感動の涙を抑えられませんでした。

にぎやかな大阪。スケジュールがぎっしりだったので、大阪を見学する時間はほとんどありませんでした。行ったのは心齋橋だけです。そこで感じたのはにぎやかさでした。色々な商売をする人たち、様々な買い物をする人たち。目にしたものは商業の街と売り買いをする人々でした。

歴史を伝える京都。東京から京都へ行くと、現代から古代にタイムスリップしたような気分です。高くそびえる建築物が見当たらず、大通りも比較的静かで、色も揃っているようでした。日本語を専門とする学生にとって、清水寺、金閣寺の名前こそおなじみですが、初めて目にしてやはりその精緻さに感動しました。

表面をざっと見ただけでも、その中から日本国民の優れたところをたくさん見つけることができました。初めての日本旅行で感じたことをここで書き尽くすことはできませんが、日本で受けた感動と震撼は本で見たものよりずっとたくさんあります。日本の秩序や日本人の礼儀正しさは、いずれも一朝一夕にできたものではありません。これは私達が努力して学ばべきところです。

現在の中日関係はあまり樂觀できませんが、学生同士の交流や民間での活動を通じて、中日関係の未来はきっと晴れ渡るだらうと信じています。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

北京郵電大学 日本語科3年 李鵬飛（原文中国語）

近くから日本を観察して—日本滞在中のいくつかの細部



7月24日から8日間の訪日イベントに参加できたことは本当に幸運だったと思います。期間中は大いに心を動かされたことで、日本という国に対して、より入念な観察と確実な体験ができました。それまでは日本に関するすべてが本で見たものであり、自ら体験したことはなかったのです。

日本は中国から見て一衣帯水の隣国であり、古代からの切っても切れない関係があります。しかし大多数の中国人が日本海に持っている印象はお聞きの通りです。これまでは日本の実際の状況に対する証拠や自らの考察が不足していました。しかし本当の日本は驚きに満ちた国でした。自分の目で見て自分の耳で聞かないことにはよく分からないこともたくさんあることでしょう。

以下、訪日の期間中にあった忘れてくないいくつかの出来事を書き並べて、私が見た日本について説明したいと思います。先にも書いたとおり、あくまで個人的な印象に過ぎません。正しいかどうか、漏れがないか、偏っていないかなどについては、皆さん自身で日本の観察に行ってから、討論しましょう。

1. 日本の路面

旅行前に同級生から聞いた話では、日本の路面は清潔で、地上に埃が見当たらないとのことでした。小さいときから山西省で生活してきた私には少し不思議なことです。中国では首都である北京でさえも、ごみのない路面を見られることはなかなかありません。埃もないとは、全く想像できないことでした。そこで私は日本の路面に挑戦してみようという気になったのです。

日本に着いた翌日、7月25日の早朝に一人で街に出てみました。道を歩いていてふと思いつき、しゃがみ込んで左手の人差し指で足元をこすってみたのです。指を確かめてみると、本当に埃が付いていませんでした。土埃さえも少なかったのも、しばらくショックでした。信じられなかったのもう一度やってみたのですが、やはり埃は付きません。ここは都市化が進みすぎて土の痕跡も覆い尽くされているのでは、というのが辺りを見回して探し出した答えでした。しかし気付いてみると、そこは70階以上もある高層ビルの建築現場の近くだったのです。自国の建築現場を思い起こすと、すぐに答えは見つかりました。

今度は愛宕神社の近くで適当な場所を探して試してみたのですが、やはり埃は付きませんでした。ごみも廃棄物らしきものもなかったのは言うまでもありません。

しかし清潔な場所ばかりでもありませんでした。大阪の心斎橋に行くと、なじみのある中国語が聞こえてきて、北京の路面のようでした。すぐにアットホームな気分になりました。そして更に日本人が中国語と英語で「路面をきれいに保ちましょう」と書かれた看板を掲げているのを見たとき、内心やるせないものを感じました。

2. 日本のサービス

道中ではすべて日本のサービスを味わいました。普通の沿道にある居酒屋、小飲食店、街角のコンビニから商業地区の百貨店に至るまで、サービスに対する態度と情熱を目にすることができました。

店舗の入り口に立つと、女性店員がそっと挨拶してくれます。いらっしやいませ、店内ご自由にご覧くださいと。ただ見ている時にわざわざ話しかけてくることはあまりありませんが、手伝って欲しいことがあると示すと、彼らはすぐに早足で現れるのです。中国では一般に相手にされることがないので、や

や適応できない感じでした。何か買うと、大変な手伝いでもしたかのように、何度も礼を言われます。何も買わないときでも、白眼視されたり文句を言われたりすることはありません。

ヤマダ電機でデジタルカメラを買おうとした時のことです。もう気に入った商品を見つけ、支払いの寸前だったのですが、最終確認してみると、中国語機能がないことに気がきました。店員はすぐにこちらの意図を察して商品を持ち帰り、中国語機能付きのカメラ探しを手伝ってくれたのです。7機種ぐらい見たのですがどれも気に入らずにいると、店員は恐縮そうに、申し訳ございません、お探しの条件に合ったカメラがなくてお手数おかけしました、と言うのです。却ってこちらが申し訳ない気持ちになりました。こんな一幕が中国国内で見られたと聞いたら絶対に信じられないと思います。

ここまで書いてきて、日本での8日間に接したサービススタッフの語気がほぼ一致していたことを思い出しました。話すときは笑顔で、積極的なトーン。日本語そのものの習慣に関わるものとは言え、これも日本国民の風貌や資質の表れだと信じています。

3. 日本の建築物と住居

実はこの点については責任が負えません。観察できたものがあまりに少なく、きっと全面的ではなかったのですが、見たものと思ったことについて共有してみようと思います。以前に本で見かけたときは、日本建築はだいたい同じ様式で、中国の古代建築と似たようなものだと感じていました。しかし今回、清水寺、金閣寺と嵐山の沿道の寺院を観察してみて、私は日本建築にもそれぞれ独特な風格があると感じたのです。ふだん目にする建築の専門書がとても少ないせいだと思います。したがって、具体的な違いまでは説明できません。廊下の軒の曲がり方にしても建物全体の色にしても、そして建材に至るまで、中国のものとは異なる点がありました。もう少し具体的に言うと、日本様式はひなびて暗く、中国にあるような気迫に満ちた建物はあまり見られません。その建築の妙は精度の高い用地と計画にあります。すべての角で景色が考慮されており、しかも自然と一体になることができています。私の以前に行った南京瞻園のようでしたが、人工的な痕跡はもっと少なかったように思います。

もう一つの日本と中国との違いは、自然と都市との調和で、日本のほうがよくできていました。東京で泊まった旅館の近所に愛宕神社があったのですが、同社の両側は高層ビルでした。参拝道の両側も住宅がひしめき合っていました。同社は近代都市の中に問題なく溶け込んでおり、100メートル先には電車さえ走っていました。しかし愛宕神社は竜のように長い森に覆われており、静けさと神聖さが見えるのです。同じようにホテルの南側500メートル先には寺院もありましたが、名前は思い出せません。その寺院も商業モールとオフィスに挟まれていましたが、そこから受ける安らかさと静けさは久々のものでした。考えてみれば、繁華ににぎわう都市の中で自信の落ち着きを保てることこそ寺院の真の意味です。比べてみると、中国では都市と共存している寺院は珍しく、都市の中に存在すれば、人の往来が盛んにぎやかなことは避けられませんが、それでは禅の目的とあまり一致しないのではないのでしょうか。

もう一つ、今でもまだ分からない問題があります。日本の領土は30数万平方キロメートル、私の記憶では人口1.2億で、この人口密度は我が国の大部分の省を上回るものです。しかし高層住宅街があまり見られません。今回の旅行では、中国にあるような大規模高層住宅地域がとても少なかったのです。8日間で目にしたのは、先祖から伝わる二階建ての持ち家ばかりで、マンションのようなものはあまりありませんでした。あれだけの外来人口がありながら日本人は何処に住んでいるのか本当に理解できません。全く観察できていなかった可能性もあり、この問題には未だに悩まされています。

ついでに言うと、日本の住宅街は東アジアの古い国の住宅を思わせる作りで、古代の精神と風格がその中に残されているような感じも受けました。ですが私達の住居を見ても中国の二文字を感じることはまずありません。

4. 日本のインフラ

日本でもう一つ印象深かったのは、その整ったインフラでした。まず、障害者向けの施設からもその

一端をうかがうことができます。道路に視覚障害用ガイドが設けられているだけでなく、誘導音声までありました。私が入ったすべての公衆トイレにも身障者専用の個室が提供されていました。日本の地下鉄の発達ぶりは路線網の密度もかなり恐ろしいものですが、この辺りは皆さんご存じでしょうからこれ以上は書きません。町中にはレンタサイクルが置いてあるところもあり、最初の一時間は無料、一時間経過後に時間料金を計算するというシステムでした。東京、沖縄、大阪、京都のどこにも自転車専用道が見られませんでした。たぶん総面積が不足しているせいでしょう。

注目に値するのが、日本の街角にはごみ箱が少なかったことです。今お話ししたとおりの清潔な街角に、なんとごみ箱がほとんどありませんでした。初めは不可解でしたが、よく考えてみると分かります。ごみ箱があったら、人々はごみをそちらに投げるので、街角の清潔さは維持しにくくなります。それに日本人全体の素養があるので、ごみをポイ捨てする人もいないため、ごみ箱を設けなくとも散らかすことなく、持ち帰ることになっているのでしょう。面倒だと思ふ時はどうしたらよいでしょうか。答えは簡単、外出時にごみを出さなければ済むのです。

5. 日本の人々

これだけたくさんお話ししながら、日本人がいったいどういう感じだったのか正面から言及していませんでした。この数日間に見た人数も少なかったのですが、共通点をほんの少しまとめることはできます。ここで話すのは自分が目にした人だけなので、きっと日本人のうちごく一部だろうとは思いますが。したがってすべての人を表わすことはできないため、偏りのないようにお読みください。

一言でまとめると、日本は文明的な国です。文明の範疇はとても広いので、様々な面を含めることができます。ここでは真っ先に思いついたシーンだけ紹介します。まず、日本人は話し声がとても小さいです。話し相手にだけちょうど聞き取れるぐらいの声で話すため、他人の邪魔になることがありません。

次に、大多数の人がルールをきちんと守ります。東京で郵便物を出しにコンビニに寄った時、私達4人は待機場所の前でおしゃべりをしていたのですが（その時はそこが待機場所だと知らなかった）、その後ろは会計待ちの人で混み合っていました。しかし後ろにいた日本人のおじさん二人はずっとそこで待っていて、5分はゆうに経っていたと思いますが、私達がどけるまで待っていたのです。そのうち一人がすいませんと言いながら前に進んで会計を済ませたのですが、もう一人は待機場所でおとなしく待っており、前の人が終わってから、自分もまたすいませんと言いながらレジに進んで会計を済ませ、前の人と二人一緒にお店を出て行きました。二人ともずっと静かに自制しており、私は自分の至らなさを自問しました。

また、日本で信号無視をする人はあまりいませんでした。一度だけ目にしたのは夜中12時ホテルに戻る途中で、ある女性があたふたと急いで赤信号が変わる前に歩いて行った時。それ以外に赤信号が点いているとき渡る人は見かけませんでした。

一度にこれだけ思い出したので、他はとりあえず書かないでおきましょう。私が日本に行く前に持っていた『梁啓超自伝』には、彼が日本を学ぶ時に見せた情熱と希望が記されていました。機内で読んだ時にはまだよく理解できず、自分が日本語を学ぶ意義もよく分かっていませんでしたが、今なら答えを持っています。最後に日本を離れる時、脳内に考えが浮かんだのです。木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通の夢はもう実現しているようですが、梁啓超先生の夢はまだどこなのかも分かりません。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

中国人民大学 大学院1年 譚浩（原文中国語）

訪日感想3篇



1. 東京物語

東京を訪れたのは4年ぶりです。たいした変化はありませんでしたが、寛容さと魅力は十分にありました。何につけ作りが細かく清潔で、にぎやかさと静けさが両立したこの町で、日中はスーツ姿で働く人々が、夜には浴衣で月光浴。秋葉原には若い人が集まり、銀座のホワイトカラーは慌ただしく、中国南方の出身者にも親しみが持てたのは東京の空気が湿っぽいところだけでした。

しかし今回は独りで街をさすらう必要がありませんでした。日本の大学生と交流するという貴重な機会を頂けたので、彼らの姿を知ること、そして親交を深めることもできたのです。私が出会った善良な愛すべき日本の大学生について、まずお話ししたいと思います。

最初に、東京一日観光ツアーのガイドを努めてくれた星野君と山田さん。星野君はとても男前で、体格がよく、目の際に青あざがありました。ボクシングの試合でついた傷跡だと聞いて、ふと北野武監督の『キッズ・リターン』が頭をよぎり、尊敬の念を覚えてしまいました。星野君は自分でフィットネスジムを開業して自給自足しているそうで、SOHOらしさを感じさせる人でした。それに比べて自分ときたら単なる青白いインテリで見劣りのすることと言ったらありません。

道中、スポーツから社会事情まで、時事ネタから都知事選挙まで、あれこれ話をしました。共通点がたくさんあり、またお互いの違う視点を尊重し合っていました。星野君は中国を訪れたことがあるようで、中国語ができ、中国のこともある程度分かっていました。

本を買いたいと伝えると、ブックオフに連れて行って一緒にたくさんの本を漁ってくれました。文学、哲学、文化、どれも日本関係の本です。お互いに好きな小説を紹介しあったりもしました。私がたくさん本を抱えて本棚の間で興奮しているのを見て、彼は私の日本を理解しようという情熱に敬服しつつ、自身が自国をちゃんと理解してこなかったことを反省したそうです。実際は自分が生活しているところのことこそ一番よく分かっていないもので、ちょうど彼が日本を知らないように、私も祖国である中国のことをわずかにしか知らず、偏見だらけだったりします。

星野君は料理にも詳しく、お昼にはちゃんこ鍋の有名店に案内してくれました。ちゃんこ料理はボリューム満点で、食べきれないほど出て来ました。後から知ったのですが、ちゃんこというのはちゃんこ鍋だけではなく、引退した力士が開いたお店のことも指すのだそうで、店主は私達が外国人だと知ると、デザートをプレゼントしてくれました。午後は星野君の案内で秋葉原と銀座を見て回りました。一行が疲れたのを見て、彼はおしゃれなカフェに連れて行ってくれました。お茶と談笑を楽しんで盛り上がるひとときでした。

星野君が男前だと言うなら、山田さんはかわいらしいおしゃれなお嬢さんだったと言えるでしょう。山田さんは三姉妹の長女のためかお姉さんらしい雰囲気があり、面倒見のよい人でした。道中、日本語が話せない鄭さんのために、山田さんが英語で話しかけてくれていました。お昼には魚を一切れ分けてくれたので、星野君がうらやましそうにしていました。星野君は冗談が好きで、山田さんがいちいち彼の間違いを指摘するたび二人で面白おかしい掛け合いをしていました。また山田さんは二日目の討論会と中日カラオケ大会の司会も務めていました。落ち着いたある美しい笑顔にぐっときた男子はたくさんいたと思います。

討論会では鈴木君、鈴木さん、愛さんとも知り合いました。

内気で真面目な鈴木君はグループ討論のリーダーで、討論を真剣に仕切ってくれました。私達が問題を曲解して言いすぎるのがあっても、しっかり聞き届けてから適宜まとめてくれて、きりのいいところで話題を切り替えてくれていました。

もう一人の鈴木さんはお母さんが中国人、お父さんが日本人のハーフでした。12歳まで中国で暮らし、それから日本で生活しているため、彼女は中国東北部の人らしい率直さと日本女性の細やかさを兼ね備えていました。自分の意見を伝えるのがうまく、また他人の考えをよく聞いてまとめる力も優れていたのです。私達のグループは彼女のおかげでまとめができたのだと思います。討論を記録した模造紙を持ち帰りたいと言うと、彼女がすぐさま床に膝をついて丁寧に資料を畳んでくれたあの瞬間は今でもはっきりと覚えています。

討論会では全面的で深い交流ができました。最初に各自が関心を持っている環境問題について確認し、それから中日の大学生で環境意識が違う原因について討論して、最後に環境問題で両国が協力できる可能性について話し合いました。討論は全体として筋が通っており、最後にはみんなで床に座ってまとめたものを鈴木さんが紙に書き取ってくれて、みんなからアイデア溢れる意見が出されていました。完成後みんなで演題に立って発表したのはなかなかの効果があったと思います。唯一の心残りは時間が足りず、中日間の環境協力について発表できなかったことです。

討論会の後には料理コンテストと中日カラオケ大会がありました。グルメと音楽で日本の大学生たちと一つになって、一緒に両国の美食を作り、みんなで知っている歌を歌いました。いわゆる国境を越えるというのがここに現れていたのではと思います。日本で過ごした中で一番楽しい夜でした。

また津久井君、松尾君、天利さんも親切で善良な人たちでした。皆さんのことはきっと忘れないと思います。津久井君と松尾君は中国語がとても流暢で、また二人とも積極的な人でした。天利さんは清純でかわいい人でした。最後にスクリーンで彼らの製作したという『東京へようこそ』が放映されました。率直に言うと、感動で泣きそうでした。

まとめると、東京の皆さんがとても心のこもった周到な準備をしてくれたので、安心して十分に思うところをやりとりでき、また、料理と歌の文化交流を通じて、日本の大学生の考え方や能力に心から敬服しました。

日本という感性に満ちた国では、知らず知らず感性的になってしまうようです。最後の送別会ではみんなで雑談を楽しみ、大いに酔いました。記憶がほとんどないのですが、唯一ちゃんと覚えているのは、中村理事と李先生が約束していたことで、次に日本に来たら一緒に富士登山しようという話でした。その日が早く訪れることを願っています。

2. 沖縄の海

熱い空。
情熱的な人々。
美しい海。
そして美しい人々。

「どこの話ですか」と聞かれたら、歴史書をめくって琉球国のページを見せましょう。

「また訪れたいと思いますか？」と聞かれたら、黙って小枝を拾い、砂浜に自分の名前を書くつもりです。

初めて見る沖縄の海は、これまで見てきた中で最も青い海でした。しかしその魅力はそれにとどまりません。先生から沖縄の歴史を聞いて、那覇の街を歩き沖縄の人々と会話し、平和祈念資料館を見学し

て、フェンスの向こうが米軍基地だと理解してからその海を振り返ると、その青さが少し暗いことにやっと気付くのです。この穏やかな青い海と空も実は穏やかではないのだと。それでも穏やかであれと願っています。沖縄の海を愛する心は何物も邪魔できないものでしょう。

東京での秩序ある活動に比べ、沖縄での活動は割とのびのびしていました。これも沖縄らしさなのかもしれません。沖縄の大学生との交流も自由気ままなもので、みんなでバーベキューをしながら、中国と沖縄を紹介しあい、映画や音楽といった興味のある話題について語り合うというものでした。沖縄の大学生は初めはにかみがちで口数も少ない人ばかりでしたが、慣れてくるとオープンになってくれました。

赤峰さん、久留美さん、美佑さんは沖縄のガイドになろうと思っているそうで、県内地図を見せながら沖縄の風土や人々について紹介してくれました。シーサーや北部の動物など、興味深い話もたくさんでした。私達も北京の風土や特産物について紹介すると、面白がって聞いてくれました。それから、見たことがある映画とジブリアニメを勧めあいました。

そのほか、男子数人が沖縄の友人達とご当地の美酒、泡盛を飲んで真っ赤になりながら話を弾ませていました。まるで中国の実家に帰省したような感覚でした。日本はどこもお邪魔する感覚だけど沖縄はアットホームだよと友達が言っていたのも道理です。皆さんがこれだけのびのびとしているからでしょう。

夜には那覇のホテルに戻ったのですが、寝付けなかったので街を散策しました。那覇市の町並みは東京よりゆったりとしており、建物の雰囲気も様々でした。和風、沖縄風、洋風が混在しており、外観が少し傷んでいる建物もありましたが、話によると台風のせいだそうです。沖縄は日本本土とだいぶ異なり、沖縄の人でも大和民族とかなり違うのだと言えるでしょう。

帰り道、街角でお菓子をつまみに飲んでいるおじさんを見かけたので、道を尋ねるついでに話しかけてみました。おじさんの祖先は中国の福建省から渡ってきたものの、本人はもう日本人なのだそうです。大工さん一筋の人で、内装職人だそうです。もう63歳だということにまだ引退できないそうです。年金だけでは日常生活がままならないので、もう数年は働かないと、という話でした。30代の一人娘は県内で大きな眼鏡店を開いており、結婚はしているもののお子さんはいないそうです。

おじさんは数十年前の沖縄の話もしてくれました。沖縄変換時に起こった面白いでたらめな出来事をいくつか聞いた後、沖縄の未来について話し合いました。沖縄にはこんなに車は要らない、鉄道網が必要だという話で一致しました。

その夜は遅くまで話し込みました。別れ際、中国人と話したのは30年ぶり、まさかまた中国の若者と話ができるとは思っていませんでした。私もお礼を述べました。

おじさんが十分な年金を受け取って楽しく暮らせるよう心から願っています。苦勞して半生やってきたのにまだ生活の圧力を受けるとは、中国人にはちょっと理解できないことです。しかしこうしたことが中国でも起きる可能性はあるでしょう。

沖縄を離れるとき、思わずこの小さな島を振り返ると、沖縄の海と空はそれまでのようにひっそりとした青さを湛えていました。この地に暮らして、沖縄の人として、彼らの辛酸苦樂を味わってみたい気がしています。

3. 日本で出会った中国人

今回の日本旅行では、日本で暮らす中国人とも少なからず会いました。留学生、仕事で滞在している人、日本人と結婚して公民権を得た人たちなどです。暮らし向きは様々でしたが、皆さん日本での生活はとても充実しており、現状に満足しているそうです。ですが留学中の若者は帰りたいがっていました。彼らも公平な機会をくれる日本には感謝していますが、やはり故郷が恋しく、帰れる日が待ち遠しいの

だそうです。それを聞いて、自分も日本にいた頃を思い出しました。日本で暮らす中国人は中日友好のために黙々と貢献しています。彼らは日本が好きで、日本人の中国に対する理解を助けようと努力しており、日本人も中国を好きになってほしいと願っているのです。

1週間で日本の4都市を回り、慌ただしく表面だけ見てきましたが、狭い視野の中からも感じたことはいくつかあります。たくさんの人、たくさんのお出来事に触れ、日本人の生活も少しは分かりました。北京に帰った直後には違和感がありましたが、日本人の礼儀正しさと回りへの気配りに慣れてしまったからだと思います。北京では見知らぬ人に気を遣う人などいません。中国に長くいた日本人が日本に帰った後も適応しにくいようです。

中国には中国の、日本には日本の良さがあり、暮らしは違いますが一概に善し悪しは言えません。ただ、こちらにはないものが日本にはないと知って、それを理解したいと思うだけです。

日本にいる友人の皆さん、帰国してからたびたび思い出しています。皆さんもがんばっているのだから自分もがんばらないと、と気付かされました。

次に日本を訪れるときはもう少し長く過ごし、より詳しく日本を体験しもっと多くの発見をしたいと願っています。勿論、こちらの暮らしを知るため中国にいらっしゃるのも歓迎します。

中日の交流では昔から詩歌を贈り合う伝統があるので、古人に倣って、下手ながら気持ちを詩に綴ってみます。

琉球明月照海云、
浪花壯士起歌声。
万里长城君做客、
三千富士待我登。

琉球の月は海面を照らし、
浪花には男達の歌。
万里の長城は君を待ち、
霊峰富士は僕を待つ。

ここの天気が熱い、
ここの人も熱い
ここの海がきれい
ここの人もきれい

「ここはどこですか」
と誰かに聞かれたら、
僕は歴史書を開き、琉球のページを辿る。
「またここに来たいのですか」
と誰かに聞かれたら、
僕は無言のまま、岸辺の白砂に名前を書き残した。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

大連外国語大学 大学院1年 汪逸晨（原文中国語）

日本での収穫



日本から帰国して数日になりますが、感想を書こうとずっと思いつつ、思うことが多すぎてどこから書けばよいか分かりません。みんなの撮った写真を見ながら期間中のことを思い出してみ、そこから得られたものについてお話してみることになりました。

最初の収穫は美食です。食べるのが好きなので、美食はきわめて大事なことです。日本滞在中は毎日決まって牛乳を買い、街ごとにご当地アイスを探しては味わいました。

きっかけは、基礎日本語の授業で出て来た文章で見かけたエピソードです。「旅に出るときは、自分の目で見て自分の耳で聞き、自分の口で当地の美食を味わいます。こうした美食は当地の風景や人情を離れると味が変わってしまうので、お土産として持ち帰ってゆっくり味わおうとしても、何かが欠けているように感じてしまうものです」というような意味の話でした。

今回の日本旅行ではずっとこの話が頭にあり、あちこちで現地の正統なる美食を探しました。食べ歩きは見た目にはやや品を欠きますが、その楽しみはもちろん言うまでもありません。京都のアイスには黒ごま味が、沖縄にはゴーヤ茶があり、山梨産の水蜜桃はとてもジューシーで甘く、本場大阪のたこ焼きは中国で売られているものとは全くの別物で、中が火傷するほど熱くてとろとろでした。あたりの美景を長めながらご当地限定のグルメを味わうというのは本当に素晴らしいものです。

二つ目は友達ができたこと。自分は個人戦の入賞者なので、遊びに行くとき孤立しないか心配でなりませんでしたが、QQ（インスタントメッセージ）グループでみんなと会話していたので、元からの知り合いのようになれました。結局、浦東空港での集合から、不安は取り除かれていたのです。深く悩むことなくみんなと遊べてとても楽しい日々を過ごせました。

気持ちのまとめりと言え外せないエピソードがあります。沖縄に着いた日、ガイドさんからマンゴーが沖縄の特産物の一つだと教わりました。高いけれど味わってみる価値は十分にあるということです。

その日の夜、イベントが終わってからスーパーマーケットでマンゴー探したのですが、値段を見て呆気にとられました。高いとは聞いていましたが、それでも1個880円もするとは予想外だったのです。しかし沖縄のマンゴーはよそのものと違い、色も独特な赤さでした。先にも書いたように旅先ではご当地の美食を口にしかたかったので、つらい気持ちを抑えて200円の見切り品マンゴーを選びました。

その時、張哲琛さんが2人で分けて食べれば1人340円で済むよと声を掛けてくれたのです。よし！と感動の声を上げてしまいました。それから店内で雅君さんに出くわすと、彼女はこちらのかごを見て、マンゴーを買う気なのかと尋ねてきました。2人で共同購入するんだと答えると、私も入れれば3人になるから、3人で共同購入すれば定価880のマンゴーが買えるよねと言うのです。それはよかったと思いました。こうしてマンゴー試食組は3人に拡大したのです。

この話にはまだ続きがあります。ホテルに戻ると、食べてみたいという人が次々に増えて、結局1個のマンゴーを6人で分け合ったのです。この思い出は一生ものだと思います。

並んで順番に一切れずつ食べ、一口ごとに次の人へ回しました。ふと、本当に6人も兄妹がいたらご飯ももっと美味しいだろうなと思いました。

ちょうど最終日の歓送会で、ある学生（皆さんお分かりでしょうから名前は伏せます）が酔っ払って車上で意気軒昂に「兄弟、みんな兄弟！」と叫んでいたように、この数日で結ばれた絆は兄弟姉妹のように忘れられないものとなりました。

三つ目は、人と人とのコミュニケーションがとても必要なものだという考えが学べたことです。そう

考えるに至った経緯は二つあります。東華大学の皆さんとの付き合いが一つ、もう一つが日本人との付き合いです。

実家は上海に割と近いのですが、小さい頃から上海の人は排他的でよろしくないという話を聞いていました。そのせいで上海の人にあまりいい印象を持っておらず、進学するときにも上海地区は頭にありませんでした。

ですが面白いことに、今回の訪日で最も親しくなれたのは、上海の東華大学の三人だったのです。三人中二人が上海出身でしたが、彼女たちと接してみて、他の地区の人と何も変わらないことに気がきました。二人ともかわいくて気遣いの出来る人でした。かつて聞いていた上海人は排他的だとかいう感じは全くせず、とても仲良くできました。四人で遊んだときも笑いが絶えず、自分のほうが二年も先輩だったのですが、まるでそんなことは意識せず、まさか彼女たちのほうが年下だとは気が付きませんでした。

「北方の四匹狼」と名乗っていた私達四人は、生まれも育ちも南方だったのですが、北方の狼を自称するのも楽しかった思い出です。上海に戻って解散するとき、最後まで一緒だったメンバーにお礼を言いました。皆さんのおかげで考え方が変わったと。

上海の人は付き合いにくいと感じていましたが、実際にはこちらが色眼鏡をいただけでした。あの人は上海出身だと聞いただけで敬遠するありさまだったので、交流もなかったのです。

もう一つの日本人との付き合いについて。二年前の交換留学では、多くの日本人に助けてもらえました。現在の中日関係は二年前どころでなく、ニュースでは毎日のように日本がどうのこうのと聞かされ、かなりの緊張状態にあるのだらうと思います。しかし、今回また日本を訪れ、イベントを組んでくれたボランティアの皆さんだけでなく、あちこちで暖かみのある親切な日本人にたくさん出会いました。

実際、人と人との間で最も大事なことはコミュニケーションです。コミュニケーションをとらなければ、お互いに対する偏見がより悪化してしまいます。今回の訪日交流イベントでその考えにしっかりと確信が持てました。

以上が今回の日本旅行での収穫の記録です。

最後に、この交流の機会を提供し手配に腐心してくれた日本科学協会、尽力してくれたボランティアの皆さん、楽しませてくれた訪日団各位、ありがとうございました。感謝すべき人はもっとたくさんいるのですが全部は挙げられません、悪しからず。

最後の最後に、俳句を添えておきます（無理矢理ひねり出したものでよければ）。

真夏には、みんなと会えて、幸せよ。

汪さんの作文を読んで試みたものはこちらです。

七月の 沖縄マンゴウ 六人で 食べ美味しさも 六倍かなあ

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

南京大学 大学院2年 劉雅君 (原文日本語)

美しい日本の思い出



今はもう南京の家に着きました。自分の部屋の椅子に座って、ぼんやりとしていながら、写真を見回っています。昨日の昼まではまだ日本にいたが、夜はもう中国に帰りました。飛行機が交通機関としてよく使われている今、行き帰りが便利になったと同時に、いささか不真実感が感じられます。日本に滞在した八日間はほんとうにあっという間で夢のようでした。日本で撮った写真を見ながら、この八日間のことは次々と頭に浮かんでいきます。

24日に東京に到着した際、わくわくした覚えがあります。これからのことについて好奇と緊張にあふれています。成田空港で訪日団全員が集まって、迎えに来た日本科学協会の顧先生たちと合流しました。その時、ほんとうに新しい旅が始まったような感じがしました。訪日団の団員はみんな北京での知識大会後、成田での再会は二回目です。知り合いと言っても、それほど詳しいわけでもありません。顧先生たちとはメールでの連絡があっても、会えるのはそれで初めてです。その場において、みんなはきっと私と同じように興奮しているでしょう。

東京で過ごした三日間は忙しいけど、すごく楽しかったです。日本の学生さん、特に実行委員会の皆さんの行き届いた準備のおかげで、どのグループの東京見学もとても楽しそうです。お台場で温泉を楽しめ、海浜公園での名所探し、どれも貴重な思い出になりました。東京は南京に負けないくらい暑いけど、日本人の友達との歓談で暑さも忘れられました。最も忘れがたいのは26日の一日でした。朝の熱々とした討論会、午後の楽しい料理大会、夜のにぎやかなソングクイズ、どれも雰囲気がよく、みんながすごく張り切っていました。ソングクイズの最後のところ、実行委員会の皆さんが作ってくださったビデオが上映され、この三日間の生活を記録して、どれもこれも懐かしい記憶を呼んでいます。じっと見ているうちに、懐かしくて涙が出てきそうです。楽しい三日間であると同時に、懐かしい三日間でもあります。この大切な記録はきっと忘れがたい記憶になります。

東京で懐かしい三日間の後、私たちは沖縄へ向かって出発しました。日本は初めてではないけど、沖縄は初めてです。沖縄は日本で有名なリゾート地と聞いて、海は非常に綺麗だと前から知っていました。今回は自分の目で沖縄の海を見られることはずっと期待しています。白い雲が漂っている青い空、きりが見えない青い海、綺麗な海浜ビーチ、どれも印象的です。海で張り切ったハーリー大会、ビーチで沖縄の学生さんと楽しく交流しながらやったバーベキュー、とても新鮮で忘れがたい経験です。その場の学生さんの中に、日本人の学生さんもいて、中国人の留学生も何人かいます。日本人の学生さんはみんな中国語が好きなので、中国語がべらべらの人もいて、これからは中国で就職する予定の人もいます。日本人の学生さんの中国に対する愛情にほんとうに感動しました。そして、沖縄に留学している中国人の学生さんはほとんど沖縄で就職したがつているという気持ちを聞いて、すごく感心しました。日本人の学生さんは中国語を勉強して中国で就職し、中国人の学生は日本語を勉強して日本で就職することになります。このようなバランスのよい人員交換は、中日友好交流の真の現れではないでしょうか。沖縄で出会った中日両国の学生さんから中日友好関係の希望が見られ、中日関係はきっと困難を乗り越えられ、よりよい方向に向かって進められると固く信じています。

その後、関西に向かって、関西巡りをしました。東京と沖縄とずいぶん違う感じの関西をいっぱい味わってきました。今回日本の旅では、いろいろな風景が見られ、さまざまな日本を味わえ、とても楽しかったです。それよりもっと楽しかったのは、日本科学協会の先生の方々とお目にかかり、数日間にわたって付き合ってくださいしたこと、そして日本人の学生さんとの交流で新しい友情を築き上げたことで

す。これから中日関係の行方はよく分かりませんが、私たち中日若者同士は自分のできる範囲で努力すれば、きっと何かいいことが出てきて、花を咲かせます。それで、いつかきっと中日関係を推進する力になれると信じています。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

哈爾濱工業大学 大学院1年 孫琳（原文中国語）

共に過ごした夏



今でも忘れられないこと。東京お台場のレインボーブリッジの美しさ。われらG組が餃子で一位になったこと。沖縄のあの藍色の海、あのとても厚い雲。仲間達と大阪でショッピングを満喫したこと。京都の静寂な小径と願をかける寺院……共に過ごしたこの夏。

笹川杯知識大会で入賞した私はラッキーでした。日本財団と日本科学協会のご招待にありがとうございます、今回の日本旅行が実現したのです。日本に来たのは初めてではありませんが、中国各地のエリート達とこの国を感じ取るのは初めてで、そして日本の大学生や人々と交流ができたことで今回の旅はより有意義で豊かなものとなりました。

東京での二日間は日本の有名大学の学生が同行してくれて、とても充実した有意義なものでした。大江戸温泉物語はさながら小さなお祭り会場で、見て回りながら温泉に浸かって心身のリラックスができ、屋外での足湯という選択肢があったことにも非常に満足しました。テレビドラマでよく見るお台場のレインボーブリッジも、イメージそのままの夢のような素晴らしさでした。二日目は日本の学生と様々な形で交流しました。環境問題の討論、料理コンテスト、カラオケ大会を通じ、歌と笑いの中それはそれは充実した48時間を過ごすことができました。

沖縄の海、青い空と白い雲の美しさには震撼させられました。現地ではドラゴンボートレースに参加することもでき、何もかもが新鮮で満足できる経験でした。青空の下、青い海の砂浜でみんなと焼き肉を楽しむ光景が想像できるでしょうか。素敵な風景、焼き肉、ビールと、仲間達そして沖縄大学、琉球大学の中国人留学生と日本人学生。青い空と海、白い雲と浜辺の中、みんなで盛り上がったのです。数え切れないポーズで写真を撮りましたが、海の素晴らしい青さは撮り尽くせませんでした。うららかな景色の中を、砂浜をぶらぶら歩いて、このまま時が止まればいいのにと思いました。

大阪のたこ焼きはやっぱ美味しく、京都の金閣寺、清水寺、嵐山の竹林は壮観なままでした。同じような風景を、違う時期に、違う人たちと歩いたのです。これほど多くの人と知り合って、一緒に味わうと、景色が更に美しく見えるような気がしました。

この旅に招待して下さった日本財団と日本科学協会には本当に感謝しています。道中ずっと付き添って下さった親切な顧先生、かわいい吉田先生、一見厳しそうでも実際はとても優しい方だった宮内先生にも、そして北海道に連れて行こうかと冗談をおっしゃった中村常務、素敵な写真をたくさん撮って下さった人民中国の孫先生にも。皆さんが努力して下さったからこそ、素晴らしく充実した日々が過ごせたのだと思います。

帰国後にも日本の例の情勢はどうだったかと聞かれることはありました。実際、旅行中は何も感じなかったのですが、NHKの取材を受けた時さながらに、国と国の角度から見れば、今の中日両国は少し厳しい情勢にあると思います。ですが、こういう時には民間の交流こそ大事です。国と国との交流も、主体はその国民であるべきで、国民同士の理解とコミュニケーションあってこそ、問題の解決を促せるのです。きっと誰もが平和に憧れていると信じています。

わずか8日間はすぐ終わってしまいました。毎日がとても充実して忙しく、終える気になれない日々でした。今回の日本旅行は終わりましたが、各人は進むべき道にまだいます。その道すがら、共に過ごしたこの夏をずっと覚えていることでしょう。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

南京師範大学 日本語科 4年 呂篠（原文中国語）

細かいところから知る日本の強さ



中国人はいつも大国を気取り、日本をからかって「小日本」と呼んで、国土が狭く資源に乏しい国だと思っていますが、今回の日本旅行では細かいところから「大日本」を目にすることができました。

5月の知識大会から、中日双方が日本旅行の件に着手して、頻繁なメールのやりとりを通じて、まだ顔も合わせないうちから友達になっていました。訪日団の名簿、旅券、ビザ、航空券、日程といったこまごまと煩わしいことを、日本側が根気よく1通1通メールで確認してきたので、ひとしお親しみを感じたのです。

日本を訪れる前から、日本の強さを感じていたということになります。みんなのビザの資料はすべてEMSで各自に郵送されましたが、私の名前には簡体字と繁体字の違いで2種類の書き方があるため、とても注意深い日本科学協会の先生がわざわざ両方で送ってくださったことにはとても驚きました。

また、東京の日程のために慶応大学の皆さんが卒業論文の作業時間を割いてプロジェクトの実施委員会を立ち上げ、個々人のために特別な日程でグループ行動を設定してくれました。その分刻みなスケジュールの精度も中国では絶対ありえないものです。

先生方と学生の皆さんが親切で丁寧なので、旅行の日が来る前から期待でいっぱいでした。

7月24日、飛行機が東京の成田空港に着陸。第一印象は中国の空港ほど大きくはないものの、日本らしい清新さと静謐さがあって、きちんとして快適な感じでした。一つ一つの小さな売店には和風アイテムがきれいに並び、環境を作り出す観葉植物は自然の中にいるかのような気分にさせてくれました。

ホテルに着くと、一連の「予想外」がたたみかけてきました。エレベーターの前には手指の消毒液があり、客室内には湯気が当たっても曇らない鏡、枕元には直接USB接続できる充電器、浴室の小さいかごには化粧用具とかみそり！全体の空間は中国より小さくても、内容は絶対に強いです。外出時の不便もそうした親切設計のシステムで解決されていました。そのあたりの問題には数え切れないほど接していますが、この業界の心配りと責任感を初めて感じたのは日本ででした。

思わず日本の他業界の強さにも気づきました。日本製のものが好まれるのは理由があって、品質だけではなく製品設計からして快適便利な親切さがあるのです。そして全部が日本人の細かさ、慎重さ、まじめさのなせる業だったということに。

ここ数年来の流行語「細部が成否を決める」は最もよく日本人の真実を描写しています。このような国土が狭く、資源の乏しい国が、世界でこれほど高い業績を得ているのは、実はその「小ささ」のおかげなのです。

幸い茶道を学ぶ機会がありました。茶道は日本人が細部を重視することの現れの一つです。茶室全体の内装と装飾品から茶道具の選びかたまで、そして茶道全体のプロセスに至るまで、すべてに細かいところの美が現れていました。

夏には夏の生け花と書画が茶室の床の間に飾られ、大自然に身を置いたような気分にさせてくれます。氷の形をした茶菓は、さわやかで満足した気持ちを作り出してくれました。茶道具はすべて完璧ではなく、少し傷があり、茶道の不完全な美の境地を表現。小山状に盛られた抹茶が、小さな茶碗の中で自然の存在を表していました。

茶道は単にお茶を味わうだけでなく、独特な気持ちで美を鑑賞するものとなっています。こうした美は茶道のかすかな動作それぞれの間で散りばめられ、更に心と心の何かも感じさせてくれます。

どこで何をするにつけ、日本人の親切さと細やかさを学ぶことができました。細部を重視する人が他人から好かれるに値しない理由はなく、そういう団体が他人からの尊敬に値しない理由も、そうした国が強大でない理由もありません。

初めての日本で、日本の細かいところの強さと心の強さを肌で感じることができました。

盛夏中 海に囲まれ 気持ちいい 情熱のなか 涼しくなるよ

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

貴州大学 大学院生1年 馮婉貞 (原文日本語)



期待していた八日間の日本への旅はもう終わった。家に帰って、体が疲れた上で、心の興奮を長い時間落ち着かせることが出来なかった。頭の中は素晴らしかった毎日を回想している。

以前日本を訪れるチャンスがあったが、ある原因で、最後に実行しなかった。実際に、今回日本へ行ったのは初めてだ。昔からの日本への了解は、ただ本から了解した知識だ。中国では百冊の本を読むことより、万里の道を歩くことがもっと良いという言い方がある。そうですね。専門書から日本に関する全てを了解することができるが、自分自身が日本へ行かず、根本的にこの国を理解することは必ずできない。

大学入試センター試験の準備をした時、ただ一種類の外国語を勉強しようと、日本語を選んだ。最初にそんなに大きい興味がなく、この何年間の勉強時間はただ日本語を習うことを目標にしていた。選んだことをぜひ努力してちゃんと完成しようとした。漫画も見なく、映画も見なく、全く合格的な日本語勉強者ではない様子であった。先週飛行機を垂れ込めている雨量を突き破って、東京に着陸した時、窓外の輝かしい光を見て、もう他の国に着いて、これが伝説的な東京だということを突然に意識した。早く心を持って体験し、目を拭いて、この世界を見ましよう自分に教えた。

行きたいところが本当に多くて、時間が短い、グループに分けて選んだ一番行きたいところに行った。日本温泉を体験し、浅草寺に参拝し、日本伝統的な文化を体験した。苦勞したボランティア達が一緒に行って、興味を持っていることあるいは分からない所を説明してくれた。翌日日本若者達との中日環境保護に関する討論会、料理作り、歌詞クイズ

などの活動が行われた。日本側の学生達といろいろな課題がある。そこには、もめごともなく、争いの発端もなく、ただ両国若者交流する楽しさと調和的な雰囲気がある。真面目な平和問題がいらなく、このような雰囲気の下で、多く友達ができて、別れる時はみんな離れられなかった。ボランティア達が詳しいスケジュールを作り、彼らのまじめさと苦勞が感じられた。

もし、東京は高いビルがそびえている現代的な雰囲気が強い都市であるといえば、沖縄は全然違っている異郷風情である。空気が新鮮で、空が青く、海も青く、町が綺麗で、全く桃源郷のようだ。ここで、初めて海を見て、初めてハーリー大会に参加し、初めて怖いプールに入って、初めてBBQを体験した。沖縄は確かに深い印象を残してくれた。また、沖縄は中国と昔から密接的な友好関係を持っていたため、心中で他の親しい感覚が湧き出る。大阪も美しい都市である、ビジネス雰囲気が濃い心齋橋も可愛い飾り物で飾られて、とても面白い。最後は最も期待している京都で、さすが千年以上の歴史を持っている古城平安京である。古めかしく優雅的な建物、歴史感を持っている神社、お寺、有名な川と森、全て魅力的である。この古城に於いて、まるで千年以前に戻り、周りが人が行き来して、たいそうにぎやかで、遣唐使が唐の物事を持って帰る平安京のことを思い出した。

八日間の旅はこれで終わった。もっと深刻的に日本と日本人を了解させた。日本がそんなに綺麗で、どこへ行ってもゴミが見られなかった。百次聞いても、一回見る方がいい。自分の目で、真実的な日本を体験することができる。日本側の友達が友好的で、親切的な持て成しと手伝い、及び熱情に心が暖かくなった。国境がなく、若者友達の交流があるだけだ。

ただ残念が残って、それが私の言語表現能力とコミュニケーション能力である。完全な日本の環境で、自分のコミュニケーション能力が遥かに足りない。他人がぺらぺらと交流でき、私達ももっと焦っている。その時、早く帰国して、自分のレベルを向上させようと努力したい。心の思いを完全に表現し出し

たい。また、日本への体験と理解で、自分の考えを持って、勉強に有益だ。日本語を勉強し始める時、このようなチャンスがあれば、きっと今のレベルではない。身をもって体験したことがあるからこそ、日本語をちゃんと学ぼうとする意欲がある。

沖縄でのスケジュールの中では、ひめゆり平和祈念記念館に見学する計画があった。被害生徒達と先生達の写真を見ると、みんな心情が暗くなった。戦争が残酷で、かわいそうな民衆達が戦争の中で最大な被害者である。戦争が欲しい民衆がいない。ここで、世界は永遠に平和が欲しく、国間が平和的に往来し、民衆が友好的交流出来ることが欲しい。日本語を学ぶことはただ一つの言語を学ぶことではなく、それをツールに、両国人民の友好交流を促進する任務を担うことが大事なことだ。世界の平和、民衆の福祉、国家も繁栄に自分の力を尽くしたい。ここで、私達を歓迎し、わざわざ大阪に私達を歓送した中村常務、私達のそばに立ち、一緒に八日間付き添った顧先生、宮内さん、吉田さんに、心より感謝の意を申し上げたい。先生達が従事している両国民衆友好交流に促進する努力に深い敬意を表したい。また、各地で私達を持て成した先生達、市民達、及び生徒達の熱情に日本人民の友好を感受させた。別れる時はそんなに離れられなかった。これがまことな別れではないと信じて、今度の再会を期待している。私は、これから何をすべきかを考え始める。。。。。。

水无月抵大江户，霓虹古朴总相宜。
云低海阔骄阳烈，风诉琉球异域情。
天下厨室大阪府，千载平安国色城。
把酒约待重会日，得交知己心底留

江戸とネオンが織りなす東京
海も日差しも薫る沖縄
食は大阪 雅は京都
君との杯またいつの日か

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

中国人民大学 外国語学院日本語科 準教授 錢昕怡

八日間の訪日を終えた感想



このたびは 2013 笹川杯日本知識大会の主催校の代表のひとりとして、訪日団に参加させていただいた。行く先々で日本科学協会の行き届いたお気配りと、中国の若者に日本をよりいっそう理解してもらうための熱意と工夫が感じられ、とても感動に満ちた旅だった。

まずは東京での日中若者の交流イベントを高く評価したい。慶応大などの学生ボランティアからなる中国人招聘事業実行委員会によって行われた、環境問題討論会はもちろんのこと、東京見学、料理対決やカラオケ大会などにも若者ならではの創意工夫がみられ、とても打ち解けた雰囲気の中、日中の若者の親交を大いに深めることが出来た。日中両国の交流と友好を担う次世代を育てるという趣旨から、日本科学協会は学生ボランティアにこのような活躍の場を提供しただろう。一教師として、この親心は見習いたい。これから中国の若者たちにも中日交流の場でより大きな役割を果たしてもらいたい。

それから、今回の訪問地は関東、沖縄、関西と、三つの地方にわたり、日本をほぼ縦断したことである。高層ビルが立ち並び、鉄道網が織り込まれている国際大都市東京から、南国ムードが溢れる沖縄、そして古い町並みや寺院が点在する古都・京都へ。走馬灯をみるようだったが、訪日団のみんなも日本の地域性や文化の多様性を肌で感じる事ができた。「百聞は一見に如かず。」今回の日本を縦断した旅は皆さんにとって、日本は小さい国だ、日本は単一民族だといったステレオタイプを見直すいい機会となるだろう。

この八日間の旅から得た何よりも大切なものは日本科学協会の皆さんと訪日団のメンバーたちとの出会いと友情である。同じ時間と空間を共有することによって、私たちは本当の仲間となった。このたびは本当にお世話になった。皆様、いずれまたどこかで会おうね。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

燕山大学 文学新聞伝播学学部 4年 楊超（原文中国語）

出会った人と出来事



北京時間の12:45分、飛行機が着陸。乗務員の軽やかな日本語が聞こえましたが、吸い込んだのはもう北京の空気で、8日間の日本の旅はこの時、本当にピリオドを打ったのでした。

日本に対する感想をお話するのは、多かれ少なかれ複雑な感覚があります。この感覚をどう形容すればいいのか分かりません。単純なプラスマイナスの評価ではまとめることができないのです。感じたというのが最も確かな表現かもしれません。

東京はドラマで見たように、一列一列がきれいで風情もありました。ここで知り合ったのは津久井二郎さんときれいな日本のお嬢さんです。

二郎さんは活発で親しみやすく、表情豊かで生き生きとした雰囲気の人でした。初日の行程で、二人が東京を案内してくれたのです。自分の時間を犠牲にして何度も計画を練って、何度も路線を検討してくれていたことを知った時、本当にとっても感動しました。この数人から日本人がどうだとまとめることはできませんが、彼らの品格が学ぶに値するものであることは疑いありません。

浅草ではお嬢さんと二人で観光する機会がありました。私は全く日本語がわからないので、ごく簡単なやりとりしかせず、おかしなところもありましたが、原始的な言語は通じるもので、いくつかの中国語ときれいでない英語を使っていました。言葉が通じないなら眼光で、心を理解すればよいのです。そんな感じでした。最も原始的なレベルでの交流は大変でしたが、楽しめました。

一日の最後に抱き合ってお別れをすると、友情とはこういうものかという気になりました。嘘も誇張もなく、一日いや数時間でも友達になれるものです。

沖縄は本当に空も海も青いところで、景色が美しいだけでなく、静かな場所でした。古いカラオケ機材で何年も前に引き戻され、何年も前の当地や住人たちはどうだったのだろうと思いを馳せました。初めて出会った当地の人々の純朴さに心が動きました。彼らには独特な特徴があり、美しい大きな目、温かな性格、強い情熱を兼ね備えていました。食卓で左に座った日本人男性は三十代らしく、小柄で見た目にはカッコいいとは言えない感じでした。ところが彼は相当な中国マニアで、携帯電話に保存した京劇のコスプレ写真を見せてもらったら、本当に美しかったのです。彼は粗末な中国語テキストを手を苦勞しながらとつとつと中国語訳をしては、一段ずつ中国語の字句を作っていました。手を角に見立てて頭に寄せ、色々とう面白動きをしてくれた彼は、カッコよくはなかったのですが、確かに純朴なかわいらしさがありません。

夜、静まりかえった海辺を高くから満月が照らすと、沖縄の海はそっとさえずりのようなリズムを奏でました。海辺の石に腰掛けた二人の若者が小声で何か話しているのを見て、『海角七号』のシーンを思い浮かべました。月のきれいな夜に、ある日本の若者が、敗戦して帰国する船上から台湾に残る彼女へと手紙を書くシーンです。彼らは戦争で出会い、また引き離されたのでした。そんな画面によくはた月夜、日本の若者が二人そこでささやき合っているのは幸運でないとは言えません。海辺の月はそんな静かさと、波の音を伴っていました。きっと同じような月明かりの下、山の麓で、川辺で、どこでも、月を眺めながらの愛情は同じことでしょう。これだけ平和で穏やかであってこそ、愛情が長続きできるのです。

日本から帰って来て、一方ではますます自分の国が心から好きになりました。飛行機で祖国の景色を高い所から見下ろすと、雄大な河川、山河は絵のように美しく、いっそう自国の文化が好きになった気がします。もう一方では日本のことも好きになり始めました。その清潔さと秩序、礼儀正しさとまじめ

さが。日本の人々が何事に対しても一心に完全無欠にやり遂げるところがもっと好きです。この点は尊敬すべきところで、中国人が学ぶに値するところだと思います。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

中国海洋石油総公司 ニュースセンター 記者 付饒

日本旅行記



東京は「汚れを隠す」ところだという第一印象でした。お手洗いとごみ箱を見ての感想です。

成田空港のお手洗いはとても広く清潔で、ちり一つ落ちていない施設で、備え付けペーパーにも不足がありませんでした。今は中国国内の公共施設でもかなり清潔なお手洗いはありますが、「便利さ」の観点からは確実に日本とは開きがあります。

日本のごみ分類はとても細かく、しかも街中にはごみ箱がほとんどありません。ごみの分別処理、粗大ごみの有料化などはかなり一般的です。日本はエネルギーに乏しいため、石炭燃料を節約してエネルギーを効率よく使わなければならないため、こうした細かいごみ分別法があってもおかしくはないと連想しました。

空港から東京の宿泊先に着いたのはもう遅い時間でしたが、ガイドさんから東京についての紹介がいくつかありました。東京ディズニーランドは夕方になると童話の世界のような姿だそうです。しかし同園の近くを通るとき、ガイドさんが示したのは道路の反対側でした。明かりの灯っていないところです。

その部分は同園の倉庫で、緊急避難場所を兼用しているのだという話を聞きました。東日本大地震の発生時、同園の従業員は道を挟んで LED 灯を掲げ、利用客全員をそこへ案内したそうです。神聖なほどロマンティックな雰囲気や騒ぎを乱すことなく落ち着いた振る舞いは、従業員の平素からの訓練と「顧客至上」の理念を示しています。

東京の愛宕山の旅館に到着したとき、長旅で疲れきっていたのですが、やはり興奮を抑えきれず一部の仲間と東京タワーの夜景を見に行きました。上海の「東洋の真珠」、広州の「広東タワー」、台北の「101」、パリのエッフェル塔といった高層建築には行ったことがあったので、東京タワーが取り立てて珍しいとは思いませんでした。しかし夜の霧に見え隠れする絢爛な色彩はやはり魅力的でした。タワーまで歩く途中、寺院、神社、住宅、商店を通り過ぎました。珍しくもなんともないものばかりですが、いずれも中国文化と複雑な関係があるうえ、微妙な違いもありました。

あまり考えが進まないうちに疲れが襲ってきたので、旅館に戻って日本式の湯船に浸かって寝ました。

25 日の旅程は「電車」に乗るところからです。駅に歩く途中で、日中の東京を初めて細かく観察してみました。「洋服」(スーツ、シャツなど)をまとって慌ただしく道行く人々の姿に、その場がオフィス街なのだと気付かされました。道路は狭いものの、きちんと秩序がありました。歩道上でさえ人々は左寄りに歩き、急ぐ人のために通路を空けていたのです。

電車では東京の海や橋を遊覧しながら、東京の同年齢の人に生活の話を書きました。グループ行動の「リーダー」徳永さんは今年、慶応大学を卒業して日本の航空会社に就職し、初任給は月 20 万円(人民元に換算すると約 1 万 2 千元)だそうです。希望の仕事につけたと聞いて祝福しました。同時に中国の「就職超氷河期」を連想し、就職情勢が日本の若者よりも困難なことを密かに嘆きました。

最初の目的地は大江戸温泉物語です。中国と違ってこの温泉には江戸時代を模した町並みが作られており、浴衣で館内を歩き日本のグルメを味わう趣向が凝らされています。

日本の温泉文化は世界でもおなじみです。グループの日本人メンバーにリードしてもらって浴衣に着替え、男女に分かれて大浴場で室内外の色々な温泉を楽しみました。

しばし温泉を体験してから、日本式の食堂でお昼です。私が選んだお刺身定食は 1380 円でした。中国の定食と比べると安いとは言えませんが、おいしくてボリュームも十分にありました。

昼食後には初めて「自動販売機」を体験。日本では飲料や食品だけでなく、アイス、新聞、煙草、場所によってはお土産まで自動販売機で買うことができます。

次の移動も電車でした。徳永さんの案内で、かの有名な秋葉原電気街を歩いたのです。今や秋葉原と言えばアニメオタクの「聖地」です。ここではアニメ関連商品やコスプレ（なりきり）用品がたくさん売られているからです。

メイドさん文化も秋葉原を彩っています。リーダーの案内でメイド喫茶に行ってみました。店内では「メイド」に扮した店員さんがデザートやドリンクを運んでくれます。利用客は店内のポラロイドカメラで彼女たちと記念撮影してもよいことになっていますが、身体に接触してはならないルールです。

男社会で「メイドさん」文化が流行っているのは、日本人の仕事がストレスフルで、風変わりなレジャーで紛らわせる必要がある証拠の一つでしょう。

秋葉原ではショッピングも体験しました。自分用にパナソニックのシェーバーを買ってみました。9千円は中等品の価格帯でした。日本の商業施設にはほとんど値引きの余地がなく、全国各地でほとんど価格差がありません。

夜六時過ぎ、「三尺三寸著」での歓迎会に向かいました。歓迎会では初めて日本科学協会の大島美恵子会長にお会いしました。とても風格をお持ちの方でした。挨拶では現在の微妙な中日関係に触れられていました。しかしこの一日の交流で目にしたのは両国の民間、特に青年の交流は今でもしっかりした基礎があるということです。「国の交わりは民が親しみあうところにある」という言葉を思い出しました。中日関係の未来は私達若者がどう築いていくにかかっています。

夕食後、中国青年報の張蕾さんの案内で渋谷観光にも行きました。地下鉄の駅を出るとすぐ「ハチ公」の銅像が目に入ります。この像は当駅が目印で、若い人が待ち合わせするスポットです。その近辺から、かの有名な交差点を眺めました。さまざまなファッションの若者が一塊にまとまって、信号が赤になると、人、車、ネオンサインの急流が織りなす壮観はシンフォニーのようでした。

渋谷では「暴走族」も見かけました。改造した単車、エンジンの轟音、独特な服装は、渋谷のすべてと融合しているようでした。アジアひいては世界の若者のファッション先端を代表する姿です。

宿に戻る地下鉄は終電でしたが、酔っ払った人が多く乗っていました。日本の会社員、特に男性は退勤後「二次会」で同僚と呑んでから帰宅するとは話に聞いていましたが、まさにそんな様子でした。

日本財団のビルは東京でも繁華な港区にあります。26日の朝、中日50名あまりの青年がそこで環境問題と中日関係について語り合いました。グループ討論はとても熱い雰囲気でした。環境についてのグループ討論では、両国の若者が環境に対して持っている関心事に違いが見られました。中国側はPM2.5や水質汚染など、比較的日常生活に近い環境問題を気にしていました。日本側では地球温暖化、廃棄物リサイクルといったより世界規模の環境問題について関心を寄せる人が多かったのです。環境問題に関する双方の関心事について、各自の解決方法を提案しあいました。双方とも、情報共有と技術面での交流強化を希望しています。また日本の青年は、中国が環境分野の立法と制度教育を強化すべきだとも行っていました。

私のいた「F組」には福島出身の女子大生がいました。彼女によると、2011年の地震で放射性物質漏出事件があってから、それまで人気のあった福島の農産物が売れなくなってしまっているそうです。当地の観光業にも大きな影響が出ているとのことでした。福島原発の事故は日本政府も原子力発電の発展戦略を見直す契機となりました。日本に50基ある原子力発電所が全て運転を停止して保安検査に入り、「脱原発」の声が絶えず上がっています。

お昼頃に衆議院の前を通りかかると、その向かいに「福島原発の再起動反対」と掲げたデモの人がいました。これも一部の民意の表明です。

環境省地球環境局中国研究官である染野憲治さんから中国の環境汚染対策に対していくつか提案を頂く機会もありました。染野さんは1970年代初めに日本の環境品質が転換点を迎えたころの状況について

紹介されましたが、このお話は将来の中国にとって重要な参考資料となります。「1964年、日本で東京オリンピックが催され、1970年に公害対策基本法が公布、1974-1975年の環境保護の投資はピーク期に達しました。日本の軌道で推測すると、中国は2008年にオリンピックを催したので、向こう10年で多くの問題が見つかる可能性があります。投資拡大が続き、投資のピークとなるのは2018-2020年になるでしょう。」

現在の微妙な中日関係という背景にあって、中日の青年が環境問題について討論したのには民間交流としての重要な意義があると思います。今回の訪日団の団長を務めた中国青年新聞社の李雪紅編集委員が発言されたように、討論会では両国の青年の情熱と国に対する責任感が見られ、こうした深い交流により相互理解を促す試みは中日両国には非常に重要です。両国の間に存在する問題の解決にも有益な影響があります。

笹川杯全国大学日本知識大会の特別賛助者である日本財団の尾形武寿理事長がインタビュー時に話されたところによると、両国間には常に大小の問題があり、相互理解が十分でないためのもものも大きいとのことで、両国の青年が討論会の形で交流を深めることは両国関係の将来の発展を利するものであり、今後もこうした交流活動を続けていきたいそうです。

午前中の討論会と比べると、午後の料理コンテストとカラオケイズ大会はリラックスした雰囲気でした。中日両国の青年が満面の笑みで両国の特徴的な料理「関西風お好み焼き」、「開口笑（中華ドーナツ）」、「餃子」などを作り、ジェスチャーで相手の曲名を伝えようとがんばったりしていくうち、きっと心の距離はなくなったと思います。

別れの時はいつもつらいものです。宿の出入り口で手をつなぎ花道トンネルを作って日本の皆さんを見送り、曲がり角で姿が見えなくなるまで見つめていました。

近い将来に再会できることはないでしょうが、交換した名刺のメールアドレスがつながりを持ってくれます。東京を離れないうちに何人もの友人から心のこもったメールをもらいました。

27日、全日空の「ポケモンジェット」で日本の最南端、沖縄へ向かいました。首里城は2000円札に刷られた観光地で、日本における重要度が窺えます。沖縄で最初の目的地は首里城でした。特に貴重なのは、中日の風格を併せ持った建築物の由来が、古くは琉球と呼ばれていた沖縄が中国の属国だった歴史にあることです。着陸してからガイドさんに琉球の歴史を聞き、この街に対する親しみが増しました。

午後はビーチに出て水着に着替え、写真を撮たくさん撮りました。和服を着るところから交流イベントが始まり、夜のカラオケ大会では、中日の青年が協力して両国でポピュラーな歌を何曲も歌いました。周華健（エミール・チョウ）の『花心』が沖縄民謡のメロディーで、日本では『花』と呼ばれる曲だったことを初めて知りました。日本の女子大生一人と、この歌の各国語バージョンを歌いました。

沖縄で二日目の午前中は気分の沈む日程でした。軍事や戦争に関係する地区を回ったからです。沖縄の米軍基地を遠くから眺め、沖縄市戦後文化資料展示室を見学して、沖縄国際大学で富川盛武学長から米軍のヘリコプター墜落事故で外構が壊れたときの話を伺いました。在日米軍の存在に頼る市場が不景気な様子を見て、米軍の飛行機が住宅地を飛行しないようにという同学長の主張に回答を得られていないと伺い、日本は第二次大戦で他国に罪を犯した一方、自身も重傷を負っていたのだと思わず感嘆してしまいました。70年近く経つ今なお沖縄が戦争の辛い結果を味わっていることから、平和の重要さが分かります。

お昼は「和風亭」でとても日本的な天ぷら定食でした。一同が畳の上に座って刺身、味噌汁を味わい、茄子、南瓜、エビ、きのこのこの天ぷらを頂きました。天ぷらの衣は中国の揚げ衣と違って薄く透き通り、金色の絹糸のようでした。特に野菜の天ぷらは透明感があるだけでなく、裏側がほとんどベトついていないものもありました。だからこそ天ぷらは香ばしく揚がるだけでなく、油を吸いすぎないため具材のあっさりした味を壊さないで済むのです。

定食が運ばれてきた時はみんなとても空腹でしたが、手を付ける前に写真を撮る人がたくさんいまし

た。

午後の日程はかなり気楽になりました。海辺でドラゴンボートレースを体験し、沖縄大学で中国語を学ぶ学生 33 人と交流し、豊見城市民と海辺で焼き肉を楽しんで、沖縄の伝統舞踊を習いました。その光景を目にしてこちらも「太極拳」を一通り披露してしまい、日本の若者達と「言葉ではない」交流を持ちました。

28 日の午前と同様に 29 日も沖縄の平和祈念館を見学しました。ひめゆり祈念館は戦争で亡くなった女学生を記念した施設です。1945 年当時まだ 17 歳で、戦争の中で先生や学友達が亡くなっていくのを目の当たりにした生存者である館長のお話を伺うこともできました。館長がつぶさに経験された世の変転を伺って、改めて戦争の残酷さと平和の大切さに感嘆しました。

東京と沖縄とで日本のさまざまな一般の方と交流したことで真実な日本の一つが見られました。慌ただしかったとは言え、日本で目にした一つ一つの景色、一人一人の言動は日本についての新しい認識をくれたと思います。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

寧波日報社 編集者 袁明淙 (原文中国語)

日本式の道路横断から中国式を振り返って



初めて東京を見たら、日本人の歩く速さにきっと驚くことでしょう。朝晩を問わず、地下鉄駅から勤務先まで、通勤族がすごい速さで歩いています。更に驚くべきことは、テンポの速い生活に慣れている日本人は交通規則を頑なに守っていることです。細い道で通行車両がないときでも、赤信号を無視して渡る人はいません。中国式の渡り方とは鮮やかなコントラストです。

日本人がルールを守る人たちだとは前から聞いていましたが、新宿駅付近の混雑した交差点で、半歩もはみ出さず信号を待っていた人たちが青になると流れていく場面にはこの上なく震撼しました。

どうして日本人はそんなことができるのでしょうか。「小さいときから交通ルールを守るように教育されているから」とある日本人は答えてくれましたが、内心の疑問は消えていません。

日本旅行の前に、ある隣人からこんな話を聞きました。電動スクーターで子供を幼稚園に送る途中、赤信号で停車したときにタイヤが少しだけ停止線をはみ出してしまいました。子供がそれに気付いて、線の後ろまで戻らなければ、1センチもはみ出ではいけないと言ったのだそうです。

その話からまじめに想像すると、こちらでも幼稚園のうちに交通ルールを守るように教育されているのです。では何故、大人になると信号無視をしてしまう人が多いのでしょうか。

明らかに、信号無視する人も交通ルールの知識ではなくルール意識が足りないのです。つまり自分から、規則で自分の行動を縛るという意識が足りていません。

日本では誰もがルールを守る環境で暮らしているため、人々は強いルール意識を持っています。交通ルールが厳守されているように、列に並ぶのも常識で、ごみの分別も過酷なほどきちんとされています。

2004年の秋、香田証生という日本の若者が、政府の忠告を聞かず戦争中のイラクに旅行してテロリストに誘拐されたニュースを思い出しました。政府は救出部隊を何度も派遣したものの、彼は最終的に殺害されてしまったのです。そのニュースが日本に伝わると、一部の日本人が彼の実家に電話して、彼はルールを守らなかったばかりに政府に手間を掛けたと叱責したそうです。世論の圧力を受けた家族は政府と社会に謝罪せざるを得なくなりました。テロリストが公開した録画の中で、彼は小泉首相(当時)に対して「小泉さん、すいませんでした」と話しています。ここから、日本ではルールを守らないと多くの人から後ろ指を指され巨大なプレッシャーを受けるといことが分かります。

ここで中国を振り返ると、ルール意識の足りない一部の人は、信号がないかのように勝手に道路を横断しています。信号無視で罰を受けても、恥ずかしげもなく口実を探しては信号を見なかったと答え、所持金がないので罰金は払えないなどと言っているのです。

実際、ルール意識が集団として欠けているため、中国式の横断法が横行しているのです。もし社会全体で交通ルールを守らないのは恥ずかしいという雰囲気形成されていたら、信号無視をしたとき白眼視に晒されるでしょうが、それでも大手を振って歩けるでしょうか。

集団としてルール意識の足りない状態が続いていけば、中国式の横断もそのまま横行するでしょう。先の話にあった真面目なお子さんが、ルールは破ってよいものだ、公平性は踏みにじれるというのを目にして育っても、信号無視をする大人にならないとは誰も保証できません。

東京で最後の夜、渋谷駅前の有名な交差点に立ってみました。信号が青に変わった瞬間に、まっすぐ並んだ人々が忽然と歩き始め、道路に押し寄せました。私もそこに加わりましたが、横断を急ぐため

はありません。雑踏の足並みから、人々がルールを守っているという素晴らしい体験をしようと思ったからです。中国国内でもこうした体験が実現できるようになることを心から望んでいます。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

桂林天華智投信息諮詢工作室 總經理 鄭天華（原文中国語）

青い海と空



皆さん、私はもう中国に帰ってしまいました。

出発前に、日本の友人からメールをもらい、最近の日本は暑いので対策の用意をするようにとのことでした。しかし期間中、日本の「酷暑」は中国よりいくぶん見劣りがするものだと感じました。

8日間の日本旅行は本当にとっても疲れしました。飛行機に乗ること4回、4都市を回り、道中はずっと自分の荷物を気にしていました。毎日のように車の乗り降りや建物内の移動で持ち歩くことを考えると、いつどれがなくなるやら心配でなりません。しかし荷物をホテルに置いている間も自分たちはバス、地下鉄、徒歩で目的地間を動かなければならず、本当に移動で疲れ果てました。

そう、旅程がぎちぎちだったのです。きっと主催者とボランティアの皆さんが、限られた時間でよりたくさん日本を知ってもらおうと考えてくれたのでしょう。午前、午後、夜とも盛りだくさんで、昼も夕方も面倒を見てくれていました。当然、私達より皆さんのほうが疲れたはず。毎晩の解散時にも、皆さんは片付けや資料整理、翌日の計画をする必要があり、地下鉄の終電で帰宅していたようです。そして翌朝の集合時には階下で待っていてくれました。お礼を言おうと思っていましたが、皆さんはずっと笑顔を向けてくれていました。間違いなく友好的な笑みなのですが、まだお互いを理解していないことも分かっていたので、近づいてみることにしました。

日本の大通り沿いにはほとんどごみ箱がないので、ごみは長時間持ち歩く必要がありました。日本のごみ処理技術は向上し、分別も数年前ほど細かくはなくなったそうですが、中国と比べるとやはり面倒の二文字に尽きる感じでした。

日本の公共施設にはほとんど喫煙者がいませんでした。屋外の吸い殻入れやガラスで囲まれた喫煙室に集まった喫煙者たちは、すでに「最高の幸せ」の一種であるあの快感にありつけなくなっているのではと思います。

数日で表面だけざっと見て回りましたが、ある摩天楼のそばに恐らく数百年前からの神社があり、この高低、新旧の異なる建築物が当然のように混在しており、何も違和感がありませんでした。

割と多くの中国人が目目していたドラッグストアの店内では、たくさんの化粧品に「和漢処方」と書かれているのが目に入りました。数年前、中国で一部の「憂国の士」が「伝統医学を廃止する」と騒いでいたとき、日本の多くの友人から、明治時代に漢方は廃止され、1970年代にようやく復興したのでまるまる百年の断層が生じていると指摘されたのを覚えています。

日本の古代建築は現存しても、伝統文化は存亡の危機に瀕しているようで、残念に思うこともたくさんありますが、もう増えないでほしいものです。昔も今も私達は多くの面で交流しているはず。たとえば経済、技術、残念な思い、経験など、北京と東京の地下鉄のように。北京ではホームを間違えても地上に出て道を渡る必要はありませんが、東京ではエスカレーターが整備されているので階段の長さを心配する必要がありません。

日本の上空を駆ける飛行機はいつも一面の広々としていた海と空の間を通ります。その時の飛行は安定しており、天地は一面の紺碧で、飛行機が止まって透き通った水晶玉の中に浮かんでいるように感じるのです。その瞬間、世界はそれほど静かで、平和も友情も気に懸ける必要がありませんでした。以下に詩を綴ってみます。日本語でその意味を伝えられる日が来るかも知れないし、皆さんが中国語のまま読める時が来るかもしれません。

朝に東京を発ち午後には守礼門へ
波が雲に届くまっすぐな水平線
鳥が休む日の入りには潮も引き
 新旧の友人と親しむ
 千年を受けて万里を憂えず
 晴れて虹かかかりますように

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

中共南開区委党校 講師 劉曉秋（原文中国語）

細部の中の日本



2013年7月24日から31日、中国青年報「笹川杯作文コンクール2012—感知日本—」の一等賞受賞者として日本科学協会のご招待にあずかり、他の受賞者達と日本を感じる旅をする機会に恵まれたことは一生の思い出です。

8日間のうち、一部の有名な人文・自然の景観を見学したほか、日本の大学生と向き合っ
て環境問題と中日関係について討論を交わし、また沖縄の県民の方や学生と気軽な対話を楽しみドラゴンボートレースに参加したりもしました。楽しい時間はあっという間で、気付けば帰国からもう何日も経っています。

期間中の写真を整理しながら、その間のできごとをあれこれ思い出してみました。今回の日本を訪問する旅で最も印象深いことをあげるなら何かと聞かれたら恐らく、金閣寺の精巧な美しさでも、沖縄の青い空と海でもなく、細かいところに配慮が行き届いた日本のサービス業だと答えます。

「態度が全てを決める」とも、「細部が成否を決める」とも言われています。私がお話ししたい細部の日本とは、細かい配慮で顧客至上の理念を体現する日本のサービス業とそのスタッフ、そして国民の行いもその影響を広く受けているということです。

空港から旅館に向かうバスで早くも気付いたことがあります。まず、バスの運転手さんが文句一つ言わず三十人あまりの荷物をトランクルームに片付けてくれたこと。バスのステップに少し湿ったタオルが掛けてあり、靴に付いた砂埃を取れやすくすることで車内が清潔に保たれていたこと。バスの座席すべての背面に小さな設備がついており、それぞれ飲み物、バッグ、ごみを入れられるようになっていたこと。乗客のニーズを最大限に満たしてくれていると思いました。

日本のサービス業は細かい配慮の極致に達しているなと気付くと、細部の改善をし続けることが日本人にとっては更にすごいのだろうと分かるようになりました。

旅館で入浴を済ませてテレビを付けると、備え付けのトイレットペーパーの折り方を流しているチャンネルがありました。一般にトイレットペーパーはきちんと三角形に折られていることはおなじみです。日本のホテルはたいていそうですが、中国ではほとんど気にかけていません。しかしそのチャンネルで流れていたのは、ペーパーの一端で四つ葉のクローバーや千羽鶴など面白い形を作る折り方だったのです。ペーパーの色ごとに目標とする作品が違い、たとえば緑だと四つ葉のクローバーや青蛙、ピンクだと花や鶴といった具合でした。キャストがそれぞれの折り方を説明しているのを見て、すごいものを見たとしばらく感嘆してしまいました。トイレットペーパーがこんなにも鑑賞に堪えるものだったとは。よく考えてみるとごく小さなことですが、宿泊客がお手洗いに入る時、色々なかわいらしい形に折られているペーパーを見たら、にっこりと笑って、気持ちと口角を同時に上げられないでしょうか。

こうした例は他にもたくさんありました。日本全体が丁寧に刈り込まれた盆栽さながら、あちこちに気遣いを見せてくれていたのです。旅館やホテルの片隅もがら空きのところはありませんでした。目を楽しませてくれる緑が風になびいたり、小さな花壇が人目を引いたり、「花の世界、砂の天国」といった静かさとはるかさを感じ取れるものだったのです。こうした細部から見える日本には、どこからの観光客も親しみと暖かさを感じることでしょう。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

南京信息工程大学 日本語科 3年 付昱（原文中国語）

中日友好を交流から



大学で4年も日本語を学びましたが、日本を訪れたのは初めてです。日本の文化習俗を体験する機会をくださった主催者の方に感謝を申し上げます。

初めて日本に着陸した時、少し興奮していました。宿に到着した時はすでにとても遅かったのですが、同行者と東京タワーに行きました。夜の東京は静謐で落ち着いている感じがして、とても好きです。

東京での3日間は東京の学生ボランティアと一緒に観光し、両国の環境問題を討論し合っ、料理を作り、歌を歌って、深い友情を築きあげました。

日本の学生に会ってしばらくは、何から話せばよいのか分かりませんでした。東京大学の田村さんと群馬大学の上原さんが、親切に東京の景色の名所を解説してくれて、少しずつなじんでいきました。話題も自然の景観から中日両国の文化と生活まで及びました。日本語専門の学生とは言え、日本については間接的にしか理解がありません。ですが彼らと話していく中で、日本の若い世代の暮らしや気持ちを知ることができ、中国の若者の考えかたを分かってもらうことができました。

様々な要因の影響で、両国の間にはいくつかの偏見があります。しかし東京の学生達と交流する過程で、認識の偏差が存在しているのは恐ろしいことではないと納得しました。恐ろしいのは、本当の交流が不足して、相手を本当に理解できないことです。

沖縄に着いた夜の歓迎会で、沖縄大学の新垣さんと話し合ったことを思い出しました。彼女は中国語ができないので、日本語で少しおしゃべりをしました。彼女は訪日団の一行にとっても興味があるのに恥ずかしがり何話をしたら良いのか分からないといった様子でした。宴会が終わってホテルに戻ると、彼女からメールが来ました。中国人に接したことがなかったので、本当に私達と交流したい、中国を理解するため翌日もあれこれ教えてほしいとのことでした。翌日は沖縄の学生達と海岸でバーベキューをしてお酒を飲み歓談しました。そんな楽な雰囲気の中で歌ったり躍ったりして、最後は名残を惜しみながら別れました。

この8日間の日本の旅で、たくさんの友好的な日本の若者に会いました。お互いに理解しあおうという好奇心がありました。中日両国は地理上で一衣帯水だけでなく、文化の上でも同じ流れを汲んでおり、似たところがあまりにもたくさんあります。沖縄の宴会では、日本の定年退職者ともたくさん知り合いました。皆さん中国語を学んでいるのだそうです。その理由を聞いてみると、興奮しながら「北京や西安、中国のあちこちへ行って、古い神秘や、数千年の文化が伝わる中国を見てみたいから」と答えてくれました。

受賞作品で書いた日本の先生も、最初は中国を見てみたいという気持ちだったのが、結果として私の母校に5年も勤めたのでした。先生は次々と優れた日本語人材を育て上げ、そしてたくさんの学生の心に中日友好の種を蒔いてくれた人です。

その日の宴会では、沖縄の優しいお年寄り達に、中国へ来れば日本語の先生になれますよと笑って話しました。中日友好を促せるだけでなく、中国の景勝地をゆったり見て回ることもできますよと。あるおばさんが感動して連絡先を聞いてきました。中国に行ったら必ず声を掛けると言うのです。中国で両国の交流に余力を尽くしたいとのことでした。

沖縄を離れる日、テレビの取材を受けました。キャスターは「中日両国の友情を、沖縄の青い海と空のように永遠に続けていけるよう願っています」と話していました。

東京の学生と別れる時、歓送会で名残を惜しみあいました。目頭を熱くする人も、再会を約束する人もいました。みんなで連絡先とプレゼントを交換しあって、個別ではあれ友情の新しいきっかけができたと思います。

東京の旅で近代日本の美が体験できたと言うなら、京都と大阪では昔の、沖縄では中日両国文化の結合した美が体験できたと言えます。日本科学協会の中村常務のお話を思い出しました。「日本を代表する富士山に行かなかったのは、また再会するときに富士山で杯を交わすためだと思っています。」

北京空港に着陸した時、日本の学生からメールを受け取りました。「またね、と言ったからにはきっとまた会えます。交友は永遠に続きます。」それを見てふと、両国の関係が厳しいときほどお互いの交流は強化すべきだろうなと思いました。今回の訪問団がアイスブレイカーの役割を果たしていることを望みます。

富士山の麓で再会できる日がそう遠くはないはずだとは私も強く信じています。日本の友人の皆さんのことを考えています。中日友好交流という夢のため、共に努力しましょう。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

天津外国語大学 日本語科院生 李钰婧

花は咲く—初めての日本—



時は7月、日本科学協会のお招きにより、笹川杯作文コンクール及び日本知識大会で受賞した私たち一行は日本を訪れました。成田空港へ向かう途中、飛行機が大きな揺れに遭い、何分間も続けて不安定の状況だったため、スチュワーデスまで平静ではありませんでした。初めての空の旅でこんな経験をしたのは思いがけないことでした。しかし、この旅が普通と違うのは全てここから始まっていたのかも知れません。

頭の中には常にあるメロディーが流れています——「花は咲く」です。シンプルな歌詞の中になんと熱い未来への希望や励ましが含まれているのでしょうか。いつか日本の方々とともにこの歌を歌おうと思いましたが、今回の旅ではチャンスを得られませんでした。しかし、歌うまでもなく、中日双方の参加者たちの心の中には、既に美しい花が咲いているのです——友情の花、希望の花、若くて生命力が満ち溢れている花。

東京滞在の初日、団員達はグループに分かれて東京名所を巡りました。案内役を務めたのは、中国大学生招聘事業実行委員会の皆様でした。彼らはボランティアとして、今回の招待のためにいろいろ心血を注いで準備をしてくれました。この精神に非常に感服しています。私のグループの日程は、午前が温泉、午後が浅草観光でした。温泉に向かう途中、遠くから東京タワーが見えました。赤と白が混ざり込んで聳え立っている東京タワー。東京のシンボルであるこのタワーを見て、自分は本当に日本の空気を吸っているのだということに気づき、訳も分からなく少し興奮しました。これからもいろいろと日本らしさを満喫できるよね、と心の中で期待しました。

温泉に到着後、初めての浴衣を楽しみました。引率者の上原さんが親切にいろいろと教えてくれたため、温泉に不慣れな私にとっては助かりました。雑談したり写真を撮ったりして、メンバー達は短い時間で既に仲よくなりました。楽しい温泉の体験を終えた後、浅草へ向かいました。賑やかな境内には観光者がいっぱいでした。正門には、人力車の車引きさんがいました。彼の誘いを受けて、人力車に乗りました。車引きさんはいろいろ紹介しながら私たちと雑談していました。私たちグループメンバーは午前に知り合ったばかりと聞くと、不思議な顔つきでした。

「本当？なんか長く付き合ってきた友人だと思いましたよ。すごく仲が良さそうですね」と車引きさん。

この話は確かにそうだと思います。人と人との「縁」というのは、二種類あると思います。ある人々とは、いくら付き合っても心が寄り添うことはありません。しかし反対に、初対面で意気投合できて、ほんの短い時間ですぐ仲良くなれる人々もいます。正に今回の中日青年のようです。今回別れたら、この先一生会えるチャンスはないかもしれません。むしろこのことを覚悟していたからこそ、双方とも一層今回の出会いを大事にしようと思って、たった一日でとても仲良くなれたのです。「中日友好」は、おそらく既に無味乾燥な四文字ではなく、中日両国国民の心に深く刻まれた願いや着実な行動に変わったと感じました。

名所めぐりが終わったら、夜の晚餐会を迎えました。主催者の大島会長が優しく歓迎の挨拶をしてくださり、団員一同非常に感動しました。

二日目の東京滞在は三つの活動がありました。午前のディスカッションでは、中日青年が環境問題や相手国に求めることについて意見を交わしました。最後の発表を聞いて、各グループとも深く考えた上に結論を出せた気がしました。若者世代の力はこれからもだんだん強くなり、この世界に大きく貢献で

きると信じています。

そして午後の楽しい料理ショーを迎えました。ちなみに、グループのメンバーは既に変更してあります。活動の計画者・中国人学生招聘事業実行委員会の皆様の、訪日団の団員により多くの人々と交流してもらいたいという思いがあったからです。抽選の結果、私のグループは餃子作りになりました。餃子作りが得意な私は興奮して、メンバー達と手分けして作り始めました。中には餃子作りが苦手なメンバーもいましたが、皆の協力のおかげでだんだん上手になりました。実行委員会の皆様の配慮は素晴らしいと思えました。わざわざ協力が必要な活動を準備したからこそ、各グループは素早く団結し、心を一つにすることができました。餃子を作っているうちに、中日両方が一つの目標を目指して頑張りました。なんと貴重な経験だったでしょう。しかし、審査の結果、私のグループはあと一歩で優勝を逃してしまいました。原因は、日本人の味付けをよく知らなかったからです。惜しかったですが、優勝よりもっと大事なものを得ました。それは、活動を通して中日青年との間で結ばれた友情の絆です。

それからは中日POPソングクイズでした。実は、このゲームの際にも新しいグループ分けがありました。しかし、前の料理ショーが楽しかったため、メンバー達は既に名残惜しくなっていました。実行委員会の方々は皆のその気持ちに気づき、そのまま料理ショーのグループでやると決めてくれました。一曲一曲のよく知られている歌の流れとともに、その場の雰囲気も非常に盛り上がりました。私のグループも、まるで前の料理ショーのリベンジを目指すかのように、全員燃して次から次へとクイズに正解していき、最終的に優勝を手にすることができました。非常に楽しかった私たちは抱きあって歓声をあげました。その時、私には聞こえました——花の咲く声でした。そう、花は咲いていたのです。その場にいた中日青年の顔にも、心にも。この花の香りが中日両国国民の心に届いてくれるよう、心の底から願っています。

初めての日本訪問でした。しかし初めてではないのは、中日両国の友情や人の暖かさの経験でした。別れの際、私は涙をこらえてさようならと告げ、他の団員も名残惜しく日本人の方々を見送りました。

それからの五日間も、日本名所を回って、主催者側の至れり尽くせりのおもてなしを受けました。中日民間交流の情熱をしみじみと感じ、両国国民の友好への思いを十分理解することができました。日本へ来ることができて本当によかったです。これからも、友情や希望の花はどんどん咲いていくことでしょう。

ありがとう、日本。また会おうね、日本。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

哈爾濱工業大学 日本語科 4年 季 佳琳（原文中国語）

8日の縁



大阪を離れる前日は2時間しか寝ていませんでした。帰国便の中で途切れ途切れ見ていた夢はこの8日間の断片ばかりで、北京から東京、沖縄、大阪、京都へと回った、心いっぱいの幸せな記憶です。

私は人と人との縁を信じています。訪日団の引率の先生、日本科学協会の先生方、中国の大学生達、東京イベント企画チームの日本の大学生達、沖縄の親切な市民……皆さんが初対面とは思えないほど親しく感じられました。

そっと写真を何枚か見ると、絵葉書コレクションに入れたくなるような美しい風景、みんなの笑顔ばかりで、8日の旅行の中でできた永遠の結晶だと思います。古い日本の風格を伝える江戸東京博物館、とてもにぎやかな秋葉原電器街、夜空の下きらきらとまばゆい東京タワー……大都会東京は初めて日本を訪れた私達を大歓迎してくれました。

それから沖縄の青い海の青空、大阪の喧噪、京都の静かな落ち着きを訪ねて回り、色々な角度から日本の魅力を味わうことができました。毎日がイベント満載で、平均5時間弱しか寝ていませんでしたが、むしろ興奮状態が続いてずっと楽しめたと思います。

日本各地の素晴らしい景色より感動したのは、各地の学生や住民の皆さんが中国人に対して親切で友好的だったことです。

東京では慶応大学、早稲田大学の学生と中日の環境問題について激しい討論を繰り広げました。中日の双方の学生がそれぞれ相手国の環境問題に対する自国の見方と提案を出して、両国が協力できる側面について討論するというものです。その後の料理コンテスト、カラオケ大会ではみんなが能力を発揮しました。グルメと音楽に国境はありません。

沖縄では現地で熱心に中国語を学んでいる市民が中国語と日本語のちゃんぽんで交流してくれました。学生よりずっと年上の人も多くいましたが、素晴らしい中国語学習熱を保っている人たちでした。彼らの中国人と中国文化に対する純粋な思いにはとても感動しました。

わずか8日間のうちに異国の友人と知り合い、異郷の風景を味わって、たくさんの感動が得られました。今日の別れは明日の出会いのため。心の奥底でかすかに、この8日間の縁でまたいつかきっと、中国か日本で皆さんに会えそうな気がしています。

※原文が日本語の文章は原文のまま、原文が中国語の文章は翻訳して掲載しました。

中国青年報社 国際部 記者 張蕾



中国青年報社が、去年、公益財団法人日本科学協会、人民中国雑誌社と共に「笹川杯作文コンクール 2012—感知日本—」を開催したのは、ちょうど中日国交正常化 40 周年の時期でした。本コンクールは幸運にも両国政府から「2012 年中日国民交流友好年」の一連の活動の一つに認定。心あるすべての人々が、この一年で中日関係が「高速鉄道」さながら速やかに前進すると思っていました。ところが、思いがけないことに、両国関係は尖閣諸島問題で大きく暗礁に乗り上げ、ゴールどころかスタート地点に戻ってしまったのです。

多くの人々が「政冷経熱」ならぬ「政冷経冷」で現在の中日関係を形容するようになりました。200 回あまりも中国訪問歴があり、中国と 30 年あまりの付き合いがある日本財団の尾形武寿理事長にも、今の両国関係は国交樹立以降で「最もよくない時期」と映っているそうです。

8 月 5 日、日本の言論 NPO が中国日報社と共同で実施した最新の「日中共同世論調査」の結果を公表しました。それによると、両国の国民が相手国にマイナスのイメージを抱いている割合がいずれも 9 割を超えています。調査レポートによると、この一年で、両国の国民感情と認識のいずれも悪化し、2005 年の定期調査開始以来で最悪の数字であるとのことでした。

そうしたなか、複雑な思いを胸に、「笹川杯作文コンクール 2012—感知日本—」と「笹川杯全国大学日本知識大会 2013」の受賞者一行 28 名が 7 月 24 日から 31 日の 8 日間、日本の青年や人々とふれあう旅に出たのでした。本当の日本を自分の肌で感じようという目的意識が見られました。

両国の若者が共に関心を寄せる環境問題

数年前に日本常駐だった頃、日本人から一番よく聞かれた質問は、「日本のどこがよいと思うか」でした。

日本人は他者からどう見えるのかを気にしているようです。「空気」と口にすると、質問の主は目を丸くして聞き返してきました。少ししてから、かつての大気汚染の記憶を辿ったり、黄砂やスモッグに覆われた風景に思いを馳せたりしたものです。

7 月 26 日午前、日本科学協会の主催する「中日青年討論会」が東京の日本財団ビルで開かれました。討論会のテーマは環境問題です。

基調講演では、日本の環境庁、駐中国大使館経済部での勤務歴があり、東京財団の研究員を勤める染野憲治さんから、中日両国の環境協力についての紹介がありました。それによると、中日両国にはすでに 20 年あまりの環境協力の歴史があり、1996 年に北京で中日友好環境保護センターが設立されたとのことでした。双方は砂嵐などの研究テーマで協力を行った実績があります。今年 1 月に北京で基準を大幅に超える PM2.5 のスモッグが発生したことに言及すると、染野さんは 1968 年の東京の写真を示しました。写真では、黒々とした空気の中で建物は輪郭しか見えず、現在のスモッグ発生時の北京とかなり似た状況でした。日本は過去のある時期、経済の発展だけに関心を持ち、環境保護をないがしろにしたため、1955 年のイタイタイ病、1956 年の水俣病、1960 年の四日市喘息といった深刻な公害を招きました。その後、環境保護の重要性が理解され始め、被害者達は 1960~70 年代から公害問題に対する訴訟を始め、公害反対運動を起こしました。日本政府が立法による環境公害問題の解決を図ったのはその後です。今や東京の空気は大幅に改善されています。

かつては東京もそうした痛ましい経験をしているのです。記者自身、日本の空気の質は優れた自然条件によるものと思っていましたが、人的要因のほうが主となっていることをはっきりと理解することができました。

討論会の参加者 54 名はグループに分かれて環境問題を討論し、その結果を発表しあいました。各グループの発表内容をまとめると、環境問題について中国側の参加者が共通して気にしているのは、自国の水質汚染、土壌汚染、PM2.5 指数、森林面積の減少が健康に及ぼす影響で、日本側では放射能、資源の再利用、地球温暖化といったより世界規模の問題により関心が寄せられていました。

これらの問題はどのように解決すべきでしょうか。共通してみられた考えは、環境関連の立法強化、地方政府/公共団体の理念を経済重視から環境との両立にシフトさせること、企業の社会的責任感を涵養すること、環境意識の普及、青少年に対する環境意識の強化などでした。

環境分野で中日両国が協力する方法についての認識は、日本には深刻な公害の経験があり、近年には放射性物質の漏洩事故があったため、関連する経験による経験と先進的な技術を中国に提供できるというものでした。また双方は、現在の日中関係は政治上の関係が民間交流にも一定の影響を及ぼしているものの、環境分野での協力が中断されるべきではないとの意見でも一致していました。

沖縄人の「中国コンプレックス」

7月27日の昼ごろ、沖縄本島的那覇空港に着陸。空港内では年間を通して蘭が飾られており、訪れる人々を歓迎しています。

沖縄はあまりにも多くの出来事が積み重なる地方です。訪日団の旅程からもはっきりと見ることができました。

1日目、古代琉球王国の皇宮の首里城を見学。中国とあまりに深い縁を持つ場所です。沖縄と中国との縁は、今でも分かりやすく痕跡が見られます。例えば、黒い肌、大きい目で中国人と容貌が似ている沖縄の人が中国人に示した友好と親切さには、訪日団の一同が感動しました。他の例では、沖縄国際大学、琉球大学の学生、中国語愛好者と訪日団の交流会を主催した、中国教育文化協会の陸丹鳳先生の紹介によると、沖縄市教育委員会の仲松齡子会長は、去年から現地の小学校に中国語の課程を取り入れているそうで、また市では、1人あたり6万円（約3800元）を補助し、2週間の短期中国留学を奨励することが決定されたそうです。

訪日団の沖縄滞在で意外な喜びとなったのは、豊見城市でのドラゴンボートレースに参加できたことです。団員達は不慣れな操作でドラゴンボートを漕ぎながら、沖縄の青い海と空を満喫し、チーム名に謳う「追い風」や「猛竜」といった覇気はどこへやらの陶醉ぶりでした。

美しい沖縄のビーチで行われた現地の若者との焼き肉パーティーも、訪日団員達には忘れられないひとときとなりました。沖縄大学の王志英先生が中国語を学ぶ学生30数名を連れていらしたのです。交流の後、日本の学生は、中国の団員のすばらしい日本語能力とコミュニケーション能力に対して心から賛嘆し、今後いっそう真剣に中国語を学んでいきたいと話していました。

「文化は水のようにお互いを潤す」

訪日後に改めて「日中共同世論調査」の結果を振り返ると、次のような記述がありました。中国の回答者が日本に対して「良い印象」を持つ最大の理由は「科学技術レベルが高い」（58.2%）で、「仕事熱心でまじめ」（54.4%）と「日本製品の品質がよい」（49.4%）が続いています。日本の回答者が中国に対して「良い印象」を持った最大の理由は「古代の文化と歴史に関心がある」（43.8%）で、「周囲の留学生や民間交流に従事する人を含め、知り合った中国人の影響で」（32.3%）と「中国が世界の大国として国際社会で活躍しだした」（22.9%）が続きました。

今回、訪日団のメンバーが日本で自ら経験したことで、「中国が世界の大国として国際社会で活躍しだした」点に深く感銘を受けています。一同が共に経験したことは、愛と恨みの間にはたくさんの豊富

な感情が、白と黒の間にはたくさんの鮮やかで美しい色があるので、自分の目で見つけ、肌で味わい、フェイストゥフェイスで交流すれば、そのすべてが可能になるということです。

7月26日の中日青年討論会で、笹川杯の作文コンクール、知識大会のは特別賛助者である日本財団の尾形武寿理事長が、政治上で最も問題が生じやすいのは得てして隣国なので、中日関係の改善には皆さんの力を借りなければならぬとおっしゃっていました。できる限り自分の目で相手の国を見るよう勧める言葉もありました。

作文コンクール受賞者訪日団の団長、中国青年報社の李雪紅編集委員は、今回の訪日の過程で、中日両国の若者の溢れる青春の力と国に対する責任感を目にすることが多かったと話しています。若者同士の交流は、理解を促し、好感を増すだけでなく、中日協力や中日関係にもポジティブな影響があります。

日本科学協会の大島美恵子会長も、中日関係のよくない今、両国の青年が率直で誠意ある対話を共にする機会は貴重で、中日両国の青年が良い友達になれることを望むとおっしゃっていました。

8日間という交流の時間とても短く、訪日団員は日本に対して多分あまり全面的に感じ取ることはできなかったでしょうが、交流を通じて、知っているようで知らなかった風景を目にして、様々な日本人の姿を知ることができたかと思います。また、あまり政治の痕跡を見ることはありませんでした。もしかすると皆さんが心の底で、中日の青年の交流と民間の交流を通じて、中日関係の苦境に希望が見えてくるきっかけを見つけないかと願っているのかもしれない。

日本科学協会の中村健治常務理事は、ある漫画家の話の話を引いて、作文コンクールと知識大会そして訪日団の価値と意義を説明できるかもしれないとおっしゃっていました。「政治は火のようなもので、燃える時は熱く消える時は冷たいが、文化は水のようにずっとお互いを潤し続けるのです」